

研究集録第23号

昭和61年度

実践力を育てる集団活動のあり方

昭和62年2月27日

東京都小学校特別活動研究会

目 次

○ 会長あいさつ	
○ まえがき(本年度の研究をふまえて)	1
○ 昭和61年度研究発表大会要項	2
○ 新春座談会(役員合宿研究会)	4
○ 各研究部の研究活動…… I 学級会活動研究部	7
II 児童会活動研究部	29
III クラブ活動研究部	51
IV 学級指導研究部	73
○ 役員・本部幹事・理事名簿	95
○ あとがき(編集後記)	97

— 今までの研究集録一覧 —

第1集(昭和39年度)	特別教育活動における指導計画作成上の諸問題
第2集 (40)	特別教育活動の本質をふまえた指導計画のあり方
第3集 (41)	特別教育活動の本質をふまえた望ましい指導計画と実施計画
第4・5集(42・43)	望ましい指導計画による実践事例とその考察
第6・7集(44・45)	改訂指導要領実施のための具体的方策と問題点
第8集 (46)	新教育課程実践上の諸問題
第9集 (47)	教育課程実践上の諸問題
	— 各内容相互関連と他の領域等の関連 —
第10集 (48)	特別活動と他領域との関連
第11・12集(49・50)	一人一人を生かす特別活動の特質と指導のあり方
第13集 (51)	一人一人を生かす特別活動の指導のあり方
第14~16集(52~54)	楽しく充実した学校生活をめざす特別活動
	— 新教育課程をふまえて —
第17集 (55)	豊かな人間性を育てる特別活動
	— 新教育課程に即した指導計画とその実践 —
第18・19集(56・57)	豊かな人間性を育てる特別活動
	— 集団活動の指導原理とその実践的解明 —
第20・21集(58・59)	特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成
第22・23集(60・61)	実践力を育てる集団活動のあり方

会長あいさつ

研究集録 第23集によせて

会長 古橋 宏

都特活は毎年、一年間の研究成果を研究集録にまとめて刊行し、現場指導の改善と充実に努力を続けてまいりましたが、今年度は数えて第23集を発行することになりました。今年度は「実践力を育てる集団活動のあり方」を研究主題として取り組んでまいりましたが、これは昨年度からの継続研究で、第二年次の研究になります。

学校教育は知、徳、体の調和的発達の実現をめざして行われていますが、それにも拘らず、知的学習に傾きがちである、児童が受け身で主体性がない、自分本位で思いやりに欠ける、目立ちたがるが地道に耐える実践行動力に不足しているなど、多くの問題点が指摘されています。

いうまでもなく特別活動は集団活動、自主的活動、実践活動を特質としています。ですからこれらの課題克服にとって特別活動が効果的な役わりを果たすことはまちがいありません。しかし、指導の現状は必しも満足すべきものではありません。前述の如き学校教育に寄せられる批判や指導上の問題点が、私には「特別活動よ、もっとしっかりせよ」との警鐘のように受けとめられるのですが如何でしょうか。

このように考えると、本年度の研究主題は特別活動の特質をそのまま表現したものであり、この課題の解明と力強い実践こそが特別活動を前進させ、ひいては学校生活の活性化、学校教育の充実につながっていくと思います。

この研究主題を受けて学級会活動、児童会活動、クラブ活動、学級指導の各部会はさらに具体的な小主題を設定して研究実践にあたりました。これらの部会主題もほとんどが昨年の継続ですから、前年度の成果をふまえてより発展的な研究が行われたと確信しています。

この研究過程では、各部会とも多くの授業研究会、調査、実践資料を通しての協議や検討が行われました。都内広域にわたる研究活動は容易ではありません。その中で部長さんを中心に会員の先生方が熱心に取り組んで下さいました。今年度の特長として、若い先生方が多く参加されています。将来の教育界を背負って立つこれらの先生方が、この領域研究に積極的に踏み込んで下さるのは心強い限りです。

また、都特活の研究を支えるように各区市の研究会の先生方が大きな協力をして下さいました。ですから、この研究成果はこれらの先生方との共同財産であると思います。助言指導の先生をはじめ熱心に参加して下さいました先生方に厚くお礼申し上げます。

さて、過日、教育課程審議会の中間まとめが発表されましたが、特別活動についても若干の手なおしが検討されています。この中で最も問題になるのは学級会活動と学級指導とを統合の方向で検討するとの項目でありましょう。ご承知のようにこの両者は性格が異なり、安易な統合は指導に混乱を起し、ひいては学級会活動の崩壊につながりかねません。現状をさらに充実の方向が良策と信じていますが、そのためには、現在あるものへの確かめ、改善工夫への努力が必要です。この研究集録が有効に活用されるよう念願しています。

まえがき（本年度の研究をふまえて）

実践力を育てる集団活動のあり方

専門部長 岩下紀夫

本年度の研究も、つつがなく終わることができました。ときあたかも、臨教審や教育課程審から、教育改革に対する答申が次々となされましたが、特活のあるべき姿、為すべきことからは、今も昔も変わらないし、変わってはならないと私は考えています。

子どもたちが、自発的・自治的に実践活動を積み上げていく過程は、特別活動の総てであり、本質論だからです。主体性を学びとらせ自主性を学ばせ、実践的な態度を今こそ強く育てていかなければならないときだと強く考える次第です。

都特活では前年度に引き続き「実践力を育てる集団活動のあり方」をテーマとしました。前年度は研究集録22号にありますように「実践力とは何か」、「望ましい集団活動とはどういう姿なのか」の問題から掘り起こし、実際の指導事例をもとに研究を深めました。

特活における実践力の姿は各活動に於て異なると思いますが、共通して言えることは、①話し合いや計画性を実践に結びつけさせ、諸活動を価値づけるものにしていく。そのためには、事前の計画や準備に力を入れ、子どもたちが主体的に取り組むことができるようにする。②実践過程を大切に、最大限に子どもたちの自発的・自治的活動を生かせるよう子どもたちに任せる活動にする。③論も大切だが、実際に自分の手で、自分の力で物ごとを成しとげるといふ効果を高めるなど、実践的な展開の姿を推進することにあると考えています。

本年度の研究は2年継続の研究ということもあって、各専門部の内容は下記の通りです。

- | | |
|-----------|------------------------------|
| ○学級会活動研究部 | 児童理解と活動内容の構成に視点を当てた研究 |
| ○児童会 | 代表委員会における議題（集会・生活）のはざまに対する追求 |
| ○クラブ | 集団活動における個と集団の関わりを中心に |
| ○学級指導 | 「適応」で、発達段階に応じた内容と授業展開の工夫 |

前年度の研究を更に積み上げ、積極的に授業研究を多く取り入れ、具体的・実証的な研究が深まったことを、深くよろこびたいと思います。

その間、快く実際の授業を引き受けていただいた学校・授業者、並びに指導助言に時間を割いていただいた講師諸先生方に、厚くお礼を申し上げます。また、各研究会に遠隔の地から熱意をもって参加いただいた諸氏に、敬意を表します。

豊かな人間性の教育に果たす特活の役割は、極めて大きいと言わざるを得ません。子どもたち一人一人が主体性を持ち、自発的に自ら考え・判断し、進んで役割を受け持ち、自分の立場を望ましい集団の中で生かし、学校生活の充実を味わうことができるよう、指導体制の確立を期していきたいと念じています。

昭和61年度 研究発表大会要項

1. 日 時 昭和62年2月27日(金) 午後1:30～4:00
2. 会 場 豊島区立仰高小学校
3. 研究主題 実践力を育てる集団活動のあり方
4. 時 程

	1:00	1:30	2:10	2:20	3:00	3:30	4:00
受 付	全 体 会 (あいさつ オリエン テーション)		移 動	分 科 会 (・学級会 ・児童会 ・クラブ ・学級指導)	研 究 発 表	研 究 協 議	講 評

5. 研究会

(1) 全体会

○ 進 行 庶務部長 小川 國 壽

◇ 開会のことば

副 会 長 岩 園 敏 明

◇ あいさつ

会 長 古 橋 宏

◇ 祝 辞

東 京 都 教 育 委 員 会

◇ 〃

全 国 特 別 活 動 研 究 会

◇ 〃

全 国 道 徳 特 別 活 動 研 究 会

◇ オリエンテーション

専 門 部 長 岩 下 紀 夫

◇ 閉会のことば

副 会 長 佐 藤 弘

(2) 分科会

研究部名	学級会活動	児童会活動	クラブ活動	学級指導
テ ー マ	一人一人が意欲を もって実践する学 級会活動のあり方	実践力を育てる 児童会活動のあり 方	自発的・自治的活 動を高めるクラブ 活動のあり方	発達段階に応じた 指導内容と授業展 開のあり方
運営部長	名取 幹夫 (江・四葛西小)	中川 秀男 (中野・桃三小)	塚越 正昭 (墨・両国小)	鈴木 和夫 (港・白金小)
司 会	野村みや子 (小平・三小) 松村 二美 (江東・南砂二小)	佐々木善光 (文・真砂小) 若林 彰 (板・板四小) 早乙女悦子 (板・稲荷台小)	湯田 耕司 (東久留米・一小) 長田 信彦 (板・中根橋小)	嵯峨 悦子 (墨・錦糸小) 藤本 仁 (港・白金小)
発 表 者	三村 勝久 (台・清島小) 赤羽根 智 (多・東永山小) 大泉 永 (目・八雲小) 大久保聡子 (三鷹・南浦小)	福島 尚子 (板・成増小) 村田 邦子 (東村山・富士見小) 池田 久子 (台・金曾木小)	浅木 麻人 (江・南葛西二小) 西田 菊佳 (荒・三日暮里小) 中村 一久 (中央・有馬小)	細野 良正 (多・東永山小) 丸西美佐子 (文・駒本小) 朝田 幸子 (大・蓮沼小)
記 録	山口タツエ (足・弥生小) 山口 祐一 (江・四葛西小)	井上 睦美 (調布・柏野小) 金子 尚子 (品・四日野小)	須藤久美子 (大・池雪小) 宇田川 稔 (世・船橋小)	冨田 嘉子 (新・東戸山小) 篠崎たか子 (荒・赤土小) 藤田 新二 (墨・中川小)
助 言 者	港区立神応小学校 長 門倉昭三 品川区立上神明小 学校長 岡田定雄 多摩市立東永山小 学校長 布施篤美 港区立高輪台小学 校 大谷武夫	港区立赤坂小学校 長 竹石善一 練馬区立中村小学 校教頭 渡辺 壽 三鷹市立井口小学 校教頭 星野隆治 新宿区立淀橋第三 小学校 今野正保	千代田区立西神田 小学校長 佐藤弘 江戸川区立下鎌田 小学校長小野眞澄 中央区教育委員会 指導主事大谷徹夫 墨田区立業平小学 校 関口照治	豊島区立駒込小学 校長 石川和男 世田谷区立八幡山 小学校長 新倉剛 練馬区立大泉第三 小学校長安岡正凱 葛飾区立細田小学 校教頭 米本滋雄

『都特活・'87年を語る』

62. 1. 11 宿泊研修会より

出席 古橋 宏, 岩園 敏明, 佐藤 弘, 石川 和男, 竹石 善一, 岡田 定雄
 米本 滋雄, 門倉 昭三, 岩下 紀夫, 星野 隆治, 名取 幹夫, 三村 勝久
 松村 二美, 佐々木善光, 塚越 正昭, 長田 信彦, 嵯峨 悦子, 渡辺 広子
 布施 篤美, 赤羽根 智, 島田 泰介, 小野 真澄, 新倉 剛, 松野 彰夫
 渡辺 寿

昭和62年1月10・11日, 新春の輝き, そして梅の香ただよう箱根塔の沢温泉・一の湯を会場にして, 恒例の新春座談会が開催された。

古橋会長のあいさつに続いて, 岩下専門部長, 星野専門副部長の司会により, 各研究部の研究経過, 集録のまとめのめやす等について報告された。さらに, 本年度の研究をふまえ残された問題, 62年度への研究の抱負等について語っていただいた。

○ 学級会活動研究部

「一人一人が意欲を持って実践する学級会活動のあり方」をテーマに研究を進めてきた。昨年の研究では, 児童一人一人の願い欲求に着目し, 特に「児童の欲求をより高次に高めていく指導」のあり方に重点をおいたが, 本年の研究の中で, 「意欲」とは意志に支えられた欲求であるという受けとめができた。

学級会活動の現状をみると, ①議題が出ない。②司会者の話を聞かない。③成員一人一人が自分のクラスにそれなりの親近感を持っているが意欲的でない。等の問題がある。さらに児童一人一人の意識をみると, ①問題点のある生活に慣れ切ってしまう, 改善点を気づく力を失っている。②今よりも楽しい生活があることを知らない, というような問題がある。個と集団のかかわりの面では, 個と集団との結びつきが弱いため学級集団を高めようとする必要感, 切実感を持ってないでいる。

そこで今年度の研究では, 次の四つの方向をうちだして研究を進めてきた。①一人一人に意欲を持たせる指導の基本となるもの, ②一人一人の欲求を高次の欲求へ高める基盤となるもの, ③一人一人の児童の意欲を高めるための具体的な指導, ④みんなの願いを実現させ, つぎの活動の意欲へつなげる具体的な指導等である。

○ 児童会活動研究部

部会テーマを昨年度と同じように「実践力を育てる児童会活動のあり方」ということで, 代表委員会の話し合い活動について研究してきた。研究の視点としては, ①実践力の概念を実践的に明らかにする。②実践力を育てるのにふさわしい議題の発掘に努める, の二つをとりあげている。昨年度も研究しているが, 生活指導上の問題や道徳指導, 学級指導にかかわりそうな

学校生活上の問題がたくさんあるけれども、それらを議題にすることは是非について話し合われた。その結果、いろいろな障害をとり除いてやれば、代表委員会の議題になるのではないかなという意見が出された。そこで今年は、集会活動的な議題と生活指導的な議題とのはざまを探るといふことで、議題の発掘をしながら研究を進めてきた。

この研究を通して、①人間関係を育てることは、特別活動の担う大切な役割であると再度痛感させられたこと、(人間関係の育成にかかわる議題は、はざまの一つではないか) ②その集団が支持的で受容的なものであることがまず大切であること、③議題の選択及び活動に際してはその学校の教師集団の中に共通理解が可能な限り図られていなければならないこと、④「望ましい議題の条件」に再検討を加える必要があること、等のことがらが、わずかずつではあるがわかってきている。

○ クラブ活動研究部

クラブ活動研究会テーマは60年度からの継続として「自発的・自治的活動を高めるクラブ活動のあり方」をとりあげ研究を進めてきた。

本年度はクラブ内の集団構成のあり方を中心にして研究を進めてきた。すなわち、①異年齢の集団を活かす小集団(活動グループ)の作り方、活動方法、内容の工夫、②各クラブの特色を活かす活動とグループ作りの工夫等について、クラブ活動の見学及び都内各校の実践資料を基に検討してきた。

異年齢の活動にみる現状の課題として、①所属決定の時の人数調整の難しさ(希望を活かすと学年の偏りができる)②運動クラブにおける能力差、(能力別のグループ作りをすると、学年別になってしまう)③クラブによる希望人数の偏り、(大人数のクラブと小人数のクラブ、運動クラブの人気過剰)④クラブ活動以外の異年齢の活動経験の不足、(教師側の問題では要求過剰や経験不足からの指導の難しさ、児童にとっては、負担過剰やとまどいから興味、活動意欲の減退につながる)等が考えられる。

○ 学級指導研究部

研究テーマとして「児童の発達段階に応じた指導内容と授業展開のあり方」をとりあげ、実際に授業に活かせる具体的な研究ということを進めてきた。

低・中・高の三つの授業をくんで、発達段階や指導内容などの観点から迫ってきたけれども、結局授業としてどうであったかという話し合いが中心となり、発達段階を系統的につっこむということが弱かったことを反省している。

適応の指導をとりあげ、「協力」ということを大きな柱にして三つの授業をくんだ。低学年では、仲よしの関係をつくる。手をつなぎ合う子供たちというようなことをねらいにしている。中学年では、友情という程度に高める。ただ仲よくするというだけでなく、手をさし出してあげるという子供を育てるためにはどうするかということ考えていく。高学年では、信じ合う仲間ということ、相互理解の仕方から相互援助へという視点で協力という価値に迫ってきた。

学級指導の授業を行うにあたって大切なこととして、①授業のねらいや方法を決めていくと

きに、児童理解や日常の学級経営とのかかわりというあたりに深いかかわりをもたせて授業をくんでいくこと、②学級指導では、授業をすることによって、つぎの時間から実践する気持ちを起こさせることが究極のねらいになっているので、そのための評価をどのようにしていくかを考えなければならないこと等があげられる。

○ 助言と抱負

- 生活指導的な議題を認知したうえでやっていくことはどういうものか。都特活は本質をふまえて方向づけていくという大きな役割を持っている。
 - 児童の生活に直接かかわる問題ともとらえられるが、生活指導的な議題となると問題がある。このことは学級会にしても代表委員会にしてもさけて通れないものであるので、都特活としての明解な線をうち出すことは大切なことである。
 - 学級会や代表委員会の基盤となる児童の集団の質が問題である。集団の質が相当高いものであれば、児童には難しい問題と思われるものでもある程度解明される。その辺のところにもふれておいて混乱を避けた方がいいのではないか。
 - 児童の切実な問題であるとして出てきた場合には、なんとか条件設定をしながら取り組んでみようという試みは十分感じられるが、その場合研究のまとめの段階で相違点を明らかにして、そして相違点の中からおこる部分で迫りうるということを明確に具体的な例をもっておさえていく必要がある。
 - 児童活動の特質の中に自発的、自治的活動がある。それは、教師が指導計画を作って意図的に指導しているのとは違った意味を持っている。児童が自分たちで計画をつくって実践している。そこに息ぬき的な要素もあるだろうという考え方をするのではないか。
 - 学級経営の中で、児童に任せてできる仕事をみつけさせて、できるだけ児童に解決させようという部分と、当然、教師が学年の発達段階に応じてきちっとおさえる点とを明確にしておかなければならない。その点を適当にしているところにいろいろな問題が出てくる。
 - 児童相互の人間関係を基盤にしながら、そういうものの指導がしっかりおさえられたうえでこそ自発・自治ということも成立してくる。
 - 教課審の「中間まとめ」素案を見ると、「学級会活動と学級指導を統合の方向で検討する」と書いてある。そのようになれば、自発的、自治的活動は衰退していく。都特活の組織で、現行の学習指導要領でやっていけるよう要望していく必要がある。
 - 「これからの特活をどうするか」ということで話し合ってきたが、こういうことがらを現場でひろめていかなければならないのではないか。それを自分自身がしなければならぬ。自分自身の実践力ということはそのことではないか。指導計画がなければ指導計画を作る。わからない教職員がいればわかるように話をしていかなければならない。それらが「これからの特活をどうするか」ということに対する具体的な解答になっていくものと考える。
- (1月26日の役員会で、教育課程審議会に提出する要望書を検討し、全委員に提出することに決定した。)

I 学級会活動

テーマ 「一人一人が意欲をもって実践する学級会活動のあり方」

I まえがき

1. 研究主題について 9
2. 学級会活動の現状とその分析 9
3. 一人一人の意欲を育てる指導の視点 10
4. 研究への取り組みと経過 11

II 授業研究（実践事例・1）

1. 「班対抗バスケットボール大会をしよう」 12
多摩市立東永山小学校 6年 赤羽根 智 教諭
2. 「学級ミニ運動会をしよう」 16
目黒区立八雲小学校 5年 大泉 永 教諭
3. 「ゲーム集会のやり方を考えよう」 20
三鷹市立南浦小学校 1年 大久保聡子 教諭

III 児童の意欲を伸ばす指導の実際（実践事例・2）

1. 学級会活動入門期の指導(1)……学級会活動を育てる学級経営の工夫 24
足立区立弥生小学校 山口タツエ 教諭
2. 学級会活動入門期の指導(2)……学級会活動に意欲を持たせる指導の工夫 25
小平市立小平第四小学校 鶴沢 典子 教諭
3. 学級会活動入門期の指導(3)……議題を見つける目を育てる指導の工夫 26
中央区立月島第三小学校 遠藤 朋子 教諭
4. 意欲的な話し合い活動を推進させるための計画委員会への指導 27
立川市立柏小学校 鷲尾 健一 教諭

IV 研究の反省と今後の課題 28

○ 研究の経過

61・5・27 (火)	61年度総会, 分科会, 組織づくり	豊島区立仰高小学校
61・6・20 (金)	研究計画の作成と検討	江戸川区立第四葛西小学校
61・7・17 (土)	研究の視点についての研究協議	台東区立清島小学校
61・9・19 (金)	授業研究 6年 話し合い活動	多摩市立東永山小学校
61・10・24 (金)	授業研究 5年 話し合い活動	目黒区立八雲小学校
61・11・6 (木)	授業研究 1年 話し合い活動	三鷹市立南浦小学校
61・12・1 (月)	研究協議	江東区立南砂西小学校
61・12・25 (木)	研究のまとめと原稿執筆分担	江戸川区立第四葛西小学校
62・1・17 (土)	執筆原稿検討	〃
62・2・14 (土)	研究発表打ち合わせ, 諸準備	〃
62・2・27 (金)	研究発表大会	豊島区立仰高小学校

研究・執筆者名簿

部 長	名取 幹夫	江戸川・第四葛西小	橋本 尚子	渋谷・笹塚小	
(司 会)	野村みや子	小平・小平三小	山本 俊子	〃 ・ 〃	
副部長	松村 二美	江 東・南砂西小	武田 光子	〃 ・ 〃	
(司 会)	三村 勝久	台 東・清島小	倉林 享子	板 橋・志村坂下小	
副部長	赤羽根 智	多 摩・東永山小	久富美智子	〃 ・ 高島三小	
(発 表)	大谷 武夫	港 ・高輪台小	大数見 仁	練 馬・下石神井小	
副部長	遠藤 朋子	中 央・月島第三小	岸 由紀子	足 立・寺地小	
副部長	石岡 克彦	台 東・根岸小	小口 栄寿	葛 飾・幸田小	
副部長	有賀 芳子	目 黒・東根小	加藤 英雄	〃 ・ 〃	
(記 録)	山口タツエ	足 立・弥生小	(記 録)	山口 祐一	江戸川・第四葛西小
副部長	鷲尾 健一	立 川・柏 小	太田 恵子	〃 ・ 西葛西小	
副部長	塩澤 雄一	千代田・番町小	小久保裕子	〃 ・ 東小岩小	
(発 表)	大泉 永	目 黒・八雲小	山口 恵子	八王子・加住小	
	佐藤 早苗	江 東・南砂東小	(発 表)	大久保聡子	三 鷹・南浦小
	伊原 静江	〃 ・ 南砂西小	湯場崎奈保	調 布・上ノ原小	
	香田 禮子	〃 ・ 数矢小	荒木 厚子	〃 ・ 〃	
	神山 裕子	品 川・伊藤小	鶴沢 典子	小 平・小平四小	
	小川 直子	〃 ・ 大井第一小	安田 康隆	東久留米・神宝小	
	小林 和子	豊 島・仰高小	松田 篤郎	武蔵村山・三 小	
	斉藤富美子	〃 ・ 大成小	金成 美枝	保 谷・東 小	

Ⅰ. まえがき

1. 研究主題について

全体主題『実践力を育てる集団活動のあり方』を受け、本部会では「一人一人が意欲を持って実践する学級会活動のあり方」を研究主題として設定し、児童一人一人の実践力の高揚をめざすことをねらいとした。（昨年度研究集録参照）

学級会活動は、児童たちの発想や願いをもとにし、実際に自主的な実践活動を行わせる中で一人一人の児童を育てようとする教育活動である。「やらせの学級会活動」でなく、「児童たちが自ら進んで意欲的に実践する学級会活動」でありたい。そのためには、一人一人の児童の良さをより多く認め、励ますとともに、自信をつけさせ、意欲を持たせるための日々の実践を積み重ねられるべく機会の設定に配慮することが指導の大きなポイントである。また実践の積み重ねを通して、児童たちに活動そのものの事実をみつめさせ、認める目を育くませる意味で、自らに対する自己評価や仲間同士の相互評価、さらに指導者による評価の在り方について深い検討がなされる必要がある。

本部会では「意欲」を、個の欲求に基づく意志に支えられた積極的な行動であり、環境条件の変化に即応してフレキシブルな行動をとり得るような活動力とおさえた。「意欲」を高めるために、例えば議題の選定など、個の発想を全体に広げ「みんなで決める」ことを通し、「みんなで決め、みんなで創り、みんなが満足する」ことの積み重ねの繰り返しの中で、一人一人の欲求を高めて行くことが大切であると考えた。「みんなで……」という意識での活動は、即ち、自己評価・相互評価に基づき・支えられたものであり、それが個の良さを集団に反映させ、至らなさを集団が援助していくといった、望ましい集団活動を促進させるものとする。

本部会主題『一人一人が意欲を持って実践する学級会活動』について、昨年度第一年次の研究で、①成員一人一人が学級生活に関して“こうありたい”と願う欲求や学級会活動に対して期待感や価値観を持たせること、②具体的な活動の実現をめざすべく能動的に環境を変化させていこうとする自発の行動を育てていくこと、を視点に押え、児童一人一人の願いや欲求をより高次元のものに高めていく指導のあり方を研究の重点とした。本年度の研究においては、特に、「一人一人の児童の意欲を育てる」ことを主眼とし、その指導のあり方を方向づけるために、学級会活動の現状をつぶさに検討した。

2. 学級会活動の現状とその分析

(1) 学級会活動の現状

議題が出ない、特定の者しか発言しない、自分達の役割についてそれがおろそかになっても平然としている、司会の進行に対し協力できない、など多くの問題点がある。このような学級集団の一人一人についてその意識の傾向を、人間関係等から調査してみると、現在の学級生活に満足しきっているのか、「さらに良くしたい」「もっとこうありたい」という意識が稀薄であることが大きな原因となっていることがわかった。個と集団との関わりという点から分析すると、自分が、その所属する集団からどう評価されているかということに対する意識はほとん

ど持っていない実態が指摘でき、集団の中で人気のある子も、そうでない子も学級に対して自らの所属する集団として親愛感を持って所属している傾向が認められた。学級会活動に対する参加態度にしても、建前的には前向きであるものの、実際の活動は積極性に欠ける面が多く、依存的・傍観者的傾向の児童の多いことが認められた。

(2) 学級会活動の現状の分析

多くの児童が依存的・傍観者的傾向にあり、なぜ意欲的な活動に乏しいのか、について次のように分析した。

●個の意識

- ・現状の生活に慣れ切ってしまう、改善点に気付く目を持っていない。
- ・より豊かで、楽しい生活があることを知らない。

●個と集団との関わり

- ・気の合った特定の少人数との結びつきは強くても、学級集団としての全体的な結びつきが弱いため、学級集団を高めようとする必要感・切実感を持ってない。
- ・学級全体として、協力し合って豊かな生活を築き上げる成就感、満足感を味わう先行経験が少なかった。

以上の事柄が指摘できた。これらをさらに分析すると、児童も指導者としての担任も、自分達の学級会活動について「学級会活動とはこうしたもの」という思い込みが意識に強く働き、その殻から脱け出せないでいることが主たる要因として存在するように思われた。

3. 一人一人の意欲を育てる指導の視点

以上の事柄から、次のような視点で指導を重ね、授業研究で検証を試みた。

(1) 一人一人に意欲を持たせる指導の基本

一人一人の願いや欲求を発掘し、それらを学級全体、共同のものに広げ、実現しようとする活動の中で、成就感を味わわせ、自信を持たせるための日々の小さな実践の積み重ねを大切に

(2) 一人一人の欲求をより高次のものへと高める基盤

より高次の欲求は基本的な欲求が満たされた後に生じてくる。学級会活動においては、相互に認め励まし合うことのできる暖かい人間関係の風土的土壌があること、発言・司会等「やり方がわかる」という自信を持てることが基本的欲求であり、これらを培う指導を大切にする。

(3) 一人一人の意欲を高める視点

一人一人の意志を尊重するとともに、「みんなで決める」活動を積み重ねる指導、喜びに満ちた豊かな生活に触れさせる指導を大切にする。

(4) 共同の願いを実現させ、次の活動への意欲へつなげる視点

一人一人の考えを全体に広げるための指導や援助、一人一人が活動の内容を十分理解できるための指導や援助、成功の喜びが一人一人にとっての喜びにつながるための指導や援助について、常に指導のねらい、あるいは評価の観点として大切にする。

4. 研究への取り組みと経過

第1回目の部会では、先に書いたテーマにいかにして迫るか、各学級で今悩んでいる問題を自由な雰囲気の中で出し合っていく中から考えていった。特に意欲を引き出すにはどうしたらよいか、児童が意欲をもって実践していると捉えることができる状態はどんな状態かも話し合った。そして、第2回目の部会から、3回の授業研究を重ねて行く中で検証を深めて行った。

昨年度第1年次の研究に比べて、本年度は次の3点により、より研究が深められた。

1点目は新しい部員が増えたことである。しかも、その新しい部員が率先して授業研究を引き受けてくれたことである。その中には、学級会の授業を公開するのは初めてという熱心で意欲的な若い部員も数名いた。本部会主催の3回の授業研究は、会場を、多摩地区1、市部1、区部1と地域の偏りをなくした。A教諭は、心理学をも取り入れた授業を展開してくれた。B教諭は、膨大な資料を作成し、客観的なデータに基づいた授業を展開してくれた。C教諭は、ご自身の病気入院・退院・祖母の死亡とご不幸が続いた翌日が授業研究だった。代役をたてるという温かい先輩の言葉にも「私にやらせてください。」と最後迄がんばって授業を展開してくれた。その意欲とプロフェッショナルな精神にこそ、テーマ同様「一人一人が意欲を持って実践する学級会活動研究教師の在るべき姿」があり、身を持って実践する教師の姿勢の大切さを示してくれた。そういう教師の意欲こそ、児童一人一人が意欲を持って実践する学級会活動を育てることができるのではないかと出席した部員すべてが痛感したし、感動もした。

2点目は、授業後の研究協議会の内容に広まりと深まりがみられるようになったことである。今迄は、仲間うちの研究だということ多少手心を加えた発言もみられたが、今年度は、本音が出たり少し手厳しいのではないかと思う位の的確な指摘もみられた。研究というものは温かい人間関係の中での厳しい目が必要なのではないか。温かい人間関係が育っていたからこそ、自由な雰囲気で見解の交換ができたのではないかと思う。

3点目は、1回目の部会で、授業研究の予定者及び、会場校、司会、記録等の年間計画を作成したこともよかった。さらに、研究協議会の内容をまとめ、次回の部会の通知とともに部員に送ったこともよかった。そうすることによって、たまたまその時に出席できなかった部員にも、研究経過が手に取るようにわかった。研究内容も部員に浸透し、ひいてはそれが部員の定着率の向上につながったようだ。以上の3点が今年度の研究取り組み状況とその経過である。

しかし、現状で満足しているだけではいけない。教育課程審議会の中間報告によると、学級会活動と学級指導の統合が問題となっている。児童の自主的・自発的な実践活動であるべき学級会活動と、教師の意図的・計画的な指導で行われるべき学級指導とをいっしょにしてしまうなどは言語道断である。児童自らの発想で行われる学級会活動は、学校生活で最も充実できるべき時間である。児童に任される唯一の時間が十分に保障されないことは、自己教育力の育成が叫ばれている今風の教育論からみても逆行である。東京都内の学級会活動を愛する教師が手を取り合って、学級会活動の危機を乗り越えるために何をすべきか、さらに研究を深めたい。

Ⅱ. 授業研究

[事例 ・ 1]

— 6年生・話し合い活動 — [9月19日]

多摩市立 東永山小学校

6年1組 (男19名, 女20名)

指導者・ 赤羽根 智

1. 本学級の研究主題 『実践に結びつく積極的な話し合い活動の指導のあり方』

2. 主題設定の理由

学級会の話し合い活動は、実践のための話し合い活動である。したがって実践に結びつかない話し合いというのは無意味である。ところが本学級では、実践に結びつくまでにかかなり時間がかかったり、予定どおりに実践できずに再提案されるというケースが、当初みられた。

そこで、即実践に結びついていくようにするには、どのような話し合いがおこなわれればよいのかについて、よく考えさせることを目指して本主題を設定した。

3. 学級の実態

5年生からの持ち上がりの学級である。全体的に明るく、男女仲がよい。何でも自主的にやるが、計画的に根気よく最後まで責任をもってやりとげられない傾向が見受けられる。

ソシオメトリック・テストの結果を見ると、第5学年の時と比べ、第1下位集団が男女混合となり、所属人員が増し、周辺児・孤立児が減少してきている。

司会は、5年・6年(1学期)でほとんどの児童が経験済みである。(本時終了時点で司会の未経験者はあと1名)教師の手をかりなくても、自主的に計画委員会を開いて計画、準備を進めていくことはできるのだが、そのつめが甘い。

話し合い活動に対する意識は次の通りである。(主な理由をあげてある)

〈好き〉……………8名

- ・クラスでいろいろなことを実行できるから
- ・おもしろいから

〈どちらかという好き〉…15名

- ・決まったらそのことができて楽しいから
- ・クラスのためになるから
- ・議題によるから
- ・不満が解決したりするから

〈嫌い〉……………2名

- ・私の思っていたことが全部反対になるから
- ・みんなが最近だらだらしているから

〈どちらかという嫌い〉…14名

- ・すぐ(思うように)意見が出せないから
- ・話し合いがごちゃごちゃして長びくから
- ・議題が遊びの議題ばかりだから
- ・意見を言わないといけないから

(調査実施日 S.61.9.4)

4. 指導の実際

(1) 計画委員会の充実を図る

- ① 計画委員会の時間（ほとんど朝）を有効に使う。
- ② 可能な限り教師が見守るようにする。（特に話合いの柱立ての時）
- ③ 柱立てについて十分に吟味する。（予想される意見、流れも考えてみる）
- ④ 提案者を必ず計画委員会に参加させる。（今まで、不参加のことがよくあった）
- ⑤ 話合い（学級会）を時間内に終わらせる工夫をする。（原案、模造紙、印刷等）

(2) 次回の学級会（話合い）の予告をしっかりとさせる

十分な意見を出しあいかつ、話合いを時間内に終わらせるためには、次の学級会についての予告（議題、提案理由、話合いの流れ等）をしっかりとしておく必要がある。

（朝の会、帰りの会、予告黒板）

(3) 終末の助言を大切にす

話合い中、教師は児童の発言を記録。終末の助言で大いにほめるよう努めた。ほめられることは自信につながり、さらに実践意欲をかきたてるものと考えられる。特に議事進行に対する援助の発言、先を見通した積極的発言、話合いを前進させたり実践に即結びついていくような建設的発言等を賞賛。また、前回（過去）の話合いでの反省点を顧みて、その反省点が今回の話合いで生かされたかどうかについて常に考えさせ、生かされていた場合は、大いに賞賛した。

(4) 可能だと思われることはすべて児童の力にまかせる

- ① 司会グループの編成について児童と話合った。その結果、1巡目は生活班が輪番、2巡目はくじで司会グループを編成することに決定。（3巡目は未定）
- ② 年間の集会の回数は教師側の方からは特に指定せず。最近、児童の方からさかんに「いつも集会の議題ばかりだからいそがしくなる。集会の議題はせめて1ヶ月に1回にした方がいい」という意見がでている。

5. 学級会活動（話合い活動）の実際

(1) 議題 『班対抗バスケット大会をしよう』

(2) 議題選定の経過

9 / 3 朝の会 議題の選定、吟味、処理（全員） — 議題案決定

- ① 勤労感謝の日に学校で働いている方々に感謝の手紙を書こう ————— 代表委員会へ
- ② 専科の時、1人もふざける人がでなくするにはどうしらいいか ————— 先生へ
- ③ 運動会の係を決めよう ——— 議題 ⑧ クラスの歌をつくろう ——— 今のまま
- ④ リレー大会をしよう ——— 他の月へ ⑨ 2学期の係を決めよう ——— 議題
- ⑤ キックベース大会をしよう —他の月へ ⑩ 班対抗バスケット大会をしよう —議題
- ⑥ かくし芸大会をしよう ——— 他の月へ ⑪ 飼育小屋の色をぬりかえよう — 飼育委員会へ
- ⑦ たて穴住居をつくろう ——— 他の月へ ⑫ サッカー大会をやろう ————— 他の月へ

9 / 16 朝 計画委員会（司会グループ+提案者+教師）

(3) 本時のねらい

工夫し協力しあって、みんなで楽しくバスケット大会ができるような計画を話し合う

(4) 実施計画

第10回 学級会 昭和61年9月19日（金） 第5校時 天気：晴											
議 題	班対抗バスケット大会をしよう										
提案理由	みんなバスケが好きだし、スポーツ大会が近いから	提案者	元5班								
司 会	中川	黒 板	望月								
副 司 会	大津, 日野, 長山	書 記	大井田								
話合いの めあて	みんなで協力して 楽しいバスケットボール大会ができるような計画をたてよう！										
— 進める順序 —		— 資料・時間など —									
①はじめの言葉 ②歌 →（思い出がいっぱい） ③今日の学級会の係の紹介 ④議題の確認 ⑤提案理由の説明（提案者：元5班） ⑥提案理由に対する質問や意見 ⑦話合いの順序の確認 ⑧話合いのめあて ⑨話合い 1. 日 時 2. 場 所 3. やり方, ルール 4. 実行委員 5. その他		※ 机の並べ方 — ふつう（班にする） 約8分 1. 日時（使える日） — 運動会のあと <table border="1" style="margin-left: 40px;"> <tr><td>9 / 30火</td><td>5・6校時</td></tr> <tr><td>10 / 9木</td><td>5・6校時</td></tr> <tr><td>14火</td><td>5・6校時</td></tr> <tr><td>16木</td><td>5・6校時</td></tr> </table> 2. あいている場所 体育館, 体庭 3. やり方, ルール 総あたり戦 — トーナメント 審判 試合時間 など		9 / 30火	5・6校時	10 / 9木	5・6校時	14火	5・6校時	16木	5・6校時
9 / 30火	5・6校時										
10 / 9木	5・6校時										
14火	5・6校時										
16木	5・6校時										
⑩決まったことの確認（書記） ⑪反省と次回司会グループの確認 （副司会） ⑫先生の話 ⑬おわりのことば		約7分 ※ 10 / 18に スポーツ大会（予定）									

(5) 指導上の留意点

- ① 日時の選択に時間がかかって、話し合いの中心がぼけないよう留意する。
- ② 与えられた時間内で、全員が楽しくバスケットボール大会ができるようにするためにはどうすればよいのかを常に頭に入れて考えさせるようにする。

(6) 評価

工夫し協力しあって、みんなで楽しくバスケットボール大会ができるような計画を話し合うことができたか

6. 指導後の児童の変容

- 柱立てをきちんとしておいたり、原案を用意したり、提案理由を明確にしておく話し合いが時間内にスムーズに進行しやすいことなどを経験していくことによって、計画委員会の重要性を再認識し、さらに計画委員会を充実させるよう努力するようになった。
- 事前に話し合いの流れや提案理由などについてみんなに発表して、意見を聞いておけば、当日の話し合いで混乱するようなことが少ないということを実感し、予告を大切にするようになってきた。
- 前回（過去）の反省を少しでも生かして話し合い活動を進めようとする意欲がでてきた。
- 「意見を出しあえばみんなの気持ちが伝わってくる」とか「決まったらそのことが実行できるので楽しい」というように、進んで自分の意見を述べようとする児童が増えてきた。
- 日時についても可能な限り自分たちで選択できるということで、自分たちの言動に責任を持とうという意識が高まってきた。

7. 反省と今後の課題

今回の集会はめあてどおりに、工夫し協力しあって、みんなで楽しくバスケットボール大会をすることができた。またその数日後のスポーツ大会（児童会主催）でも高学年の部（バスケットボール）で優勝をし、大いに盛りあがった。今後の課題としては、

- (1) 司会グループの編成の仕方（生活班、くじ、係、出席簿順等）、年間の集会の回数等、もっともっと児童自身にまかせてみてもよいことがあるのではないかなと思う。もちろん時間はかかるが、自分たちで考え、自分たちでやってみて、自分たちで気がつかせる。（もちろん事前に教師自身が予想される結果を知っているのが大前提）この訓練を低学年のうちから積んでいけば高学年になった時に、教師から指示されなくても「司会グループは生活班が1番やりやすい」とか「年間の集会の回数は事前にある程度決めておいた方が都合いい」というようなことを、彼ら自身が判断できるようになるのではないだろうか。
- (2) 一人一人が意欲をもって実践するような学級会活動にするためには、「温かい学級集団」が基礎になくはない。そのためには私たちは、ソシオメトリック・テスト、C・M・S、S・M・T等、客観的な資料も積極的に取り入れ、常に学級の人間関係向上に努めていく必要があるのではないだろうか。

このようなことを考えながら、今後ともさらに研究を積み重ねていきたい。

〔事例・2〕

—— 5年生・話し合い活動 —— [10月24日]

目黒区立 八雲小学校

5年2組 (男19名, 女16名)

指導者 大 泉 永

1. 本学級の研究主題 『互いに協力し合い、意欲的に実践する学級会活動のあり方』

2. 主題設定の理由

「自己を高める」ことは、同時に他を高めることと結びつき、一人一人の児童に、自己価値観を持たせ、個性的な存在を認め合う人間関係を大切にすることにつながる。

学級会話し合い活動において「自己を高める」という意味は、児童一人一人が集団の中の個としての充実感を持ちながら、民主主義のルールに支えられた話し合い活動を活発に展開し、意欲的でねばり強く、かつまた創意工夫に満ちた実践活動を作り出して行く事ではないかと考える。

しかし、現段階では意欲的に話し合い活動に参加し、男女の協力が常にスムーズに行われ、根気強く最後まで実践活動を積み重ねているとは言えない。

望ましい集団活動を一人一人の児童が意欲を持って実践する能力こそ、最も児童にとって必要であり、その能力の発展が、学校生活を生き生きとした活気のある場に変えて行く原動力となる。

そこで、本年度の研究にあたり、すべての実践活動において男女が仲良く協力し、かつ意欲的に参加できる学級会活動を創造するため「互いに協力し合い、意欲的に実践する学級会活動のあり方」を研究主題として設定し、研究を進めた。

3. 学級の実態

学級の実態については、5年生で学級編成替えをした学級である。児童一人一人の意識を理解する方法として④学級生活の採点〔学級集団の実態把握〕⑤ソシオメトリー⑥自己診断テスト〔行動・性格の評価を目的とする検査〕項目としては①基本的な生活習慣②自主性③責任感④勤労意欲・根気強さ⑤創意工夫⑥情緒の安定⑦寛容・協力性⑧公正⑨公共心等9項目。⑩学級会活動についてのアンケート等4つの意識調査を行った。

④の結果から大部分の児童が学級生活に明るいイメージを持っていて、心から親しめたり、困った時に相談できる友達の存在を確認している。反面3人の児童がそのような児童の存在を否定している。また男子・女子とも良く協力しているかと言えばそうではなく、学級の50%が男子・女子の協力が足りない事を指摘しているのが現状である。しかし決して対立しているわけではないが、この点を研究課題として改善して行きたい。

⑧のソシオメトリーからは2人の孤立児と3人の周辺児を把握する事ができた。2人の孤立児については、低学年の時から友達がほとんどいない状態で、心から親しめる友達を、男女の協力による意欲的な集会活動や日常の小集団活動で作り出して行きたいと考える。

⑨から言える事は、自主性が足りないと言う結果が出ている。その理由を学級会での発言に関して考察してみると、学級会で「もじもじして言えない」児童が12名(35%)もいると言う事実であり、「はっきり言うことができる」児童は9名(25%)にしか満たない。また根気強さや創意工夫にも落ち込みが見られる。この点についても意欲的でねばり強く、また創意工夫に満ちた実践活動を望ましい集団を形成しながら実行していく過程の中で作り出して行きたい。

⑩で言える事は多数決ですぐ決めてしまうのではなく、話し合いを続ける事によって少数意見を尊重し、みんなの意見をまとめる事が大切であると言う意識を持つ児童がかなりいる。司会の輪番制についてもクラスの全員が経験する事を望ましいと考えている児童が多い。全体的に見ると、男子より女子に発言力のある児童が多く、学級会をリードしていく感じがする。

4. 指導の実際

意欲的な児童の実践活動を、男女の協力を基礎とした望ましい集団を通して創造させるには民主主義のルールに従って、児童一人一人の創意工夫に満ちた意見を尊重し、より高次の話し合い活動に発展させ、綿密な実践計画を作成し実践させなければならない。そのための指導の方策として次のような手だてをとった。

(1) 学級会の事前の指導を充実させるための方策

- ① 議題案を児童一人一人に記入させ、その中から議題にふさわしい案を学級全員の話し合いで決定させた。
- ② 計画委員会では、議題選定に伴い、話し合いの順序を決め、また議事がスムーズに運ぶように実施計画を十分に立てさせ、話し合い活動に参加させた。
- ③ 議題によっては、一人一人にアンケートを行い、原案を作って話し合いを焦点化させた。
- ④ 学級会個人ノートを使い事前に自分の意見を記入させ、考えを整理していつでも発言できるようにした。
- (2) 司会・副司会・ノート書記・黒板書記などの議長団と計画委員会を生活班の輪番制にした。
- (3) 学級会で発表する意欲は「承認の欲求」とも関連している事から、一人一人の発表に対しては発表してくれた児童の名前を黒板に張りつけ、意欲を持たせた。また発表の回数によって、名前が書いてある紙の色を変え、児童の意欲を高めさせた。
- (4) 自己評価・相互評価・教師の評価などに十分な時間をかけ、充実させた評価をした。
- (5) 学級会話し合い活動における児童の座席をソシオメトリーの調査結果を参考にして作った。

話し合い活動において、自分の意見が何の抵抗もなく発表できる環境や友達の意見を尊重する人間関係を作り出す事は大切な事であり、男女の協力にもつながる。議長団や生活班のグループなどにおいてもソシオメトリーを活用し、望ましい学級集団づくりをめざした。

- (6) 男女の協力を助長するために、体育、社会、算数などの教科で協力学習に取り組ませた。

5. 学級会活動（話し合い活動）の実践

(1) 本時のねらい

- ① クラス全員が団結して楽しい「学級ミニ運動会」の計画を話し合う事により，男女が互いに協力し合える温かい人間関係を育て，クラスの調和を向上させる。
- ② めあてに合った発言を児童一人一人ができるようにさせる。
- ③ 友達の発言内容の中で立派な意見に対しては，賞賛の言葉を発表できるようにさせる。

(2) 実施計画

第 16 回 学 級 会 実 施 計 画		10月24日（金）5校時	
議 題	学級ミニ運動会をしよう		
め あ て	学級ミニ運動会をやって，みんながもっと仲良くなる。 要点をまとめて発言する		
提 案 理 由	春の運動会も楽しかったし，スポーツの秋でもあるので，学級ミニ運動会をやったら楽しいから		
司 会	幸田 典郎	ノート書記	外池 奈央
副 司 会	橋本 欣士・倉田 良子	黒板書記	小川 桃子・前田 裕幸
話 合 い の 順 序		時 間	気をつけること
1. 開式の言葉		5 分	○時間内におさめるようにする
2. 司会，副司会，書記の紹介			
3. 議題とめあての確認			
4. 提案理由の説明			
5. 提案理由への質問，つけたし			
6. 話し合いの順序の確認			
7. 話し合い			
①種目を決める			
②競技の順番を決める			
③チームを決める		10 分	
8. 決定事項の発表		5 分	○友達の良い所を見つけ発表する
9. 今日の反省や感想			
10. 先生の話			
11. 閉会のあいさつ			
準備する物	アンケート用紙		

(3) 指導上の留意点

- ① めあてからはずれないような話し合いをさせる。
- ② 児童一人一人の意見を大切にしたい話し合いが進められるように配慮する。
- ③ 数多くの児童が発言できるように，司会，副司会の議事進行に配慮し，助言する。

- ④ 実践への意欲や、次の話し合い活動への意欲を持たせるため、終末での助言の時間を十分にとる。

(4) 評価

- ① 「学級ミニ運動会」の種目などについて創意工夫が見られ、楽しい計画が立てられたか。
② 児童一人一人が友達を認め合い、励まし合う雰囲気の中で話し合い活動ができたか。
③ 要点をまとめて、めあてに合った発言ができたか。
④ 友達の発言内容の中で立派な意見に対して、進んで賞賛の言葉を発表できたか。

6. 指導後の児童の変容

「学級ミニ運動会」を議題とした話し合い活動が、少数意見を大切にしながら、できるだけ多数決の採用を避け、児童一人一人の創意工夫に満ちた発言を尊重して、活発に進められた事は、男女の協力を基礎とした意欲的实践活動の基盤を作り出したと考えられる。事実「学級ミニ運動会」が行われた当日、児童は決められた係活動を自主的に行った。例えば、準備係は体育館で障害物競争のためにマット・跳び箱・なわとび・バスケットボール・平均台・ハードルを準備し、むかで競争や2人3脚と借り物競争の準備も教師の指示を全く必要としない状態を進める事ができた。進行係の指示に従いチーム（男女混合）がスタート地点に整列し、スタート係が合図をして競技が始まる。途中で不正行為がないかどうかを審判係が公正な目で判断し、注意を促す。得点係は種目ごとのチームの得点を記録用紙に記入し、競技終了後発表した。

保健係はけがをした児童を保健室につれて行く等を実行した。競技中特にむかで競争では男女の息の合った協力の姿勢が見受けられ、思わず笑いも浮かぶなど実に楽しい雰囲気で「学級ミニ運動会」を進行する事ができた。すべてに意欲的实践の姿勢を感じさせた。

このような実践活動を通した後、児童の意識調査を再び行った結果、以前1人しか男女の協力を認めていなかったものが、10人に増え、自己診断テストによる自主性、勤労意欲、責任感等にも以前より良い結果が認められた。孤立していた児童も、比較的多くの友達と一緒に遊べる雰囲気が学級に生まれてきた。学級会話し合い活動においても「もじもじして言えない」児童が12人から7人に減っている。このような結果から学級集団の中で、友達の建設的意見を大切に、協力して実践活動を進めて行ける児童が増えてきていると感じられた。

7. 反省と今後の課題

今後の課題として、話し合い活動における「量」と「質」の問題が指摘される。量的には、児童の発言回数も増えているのだが、質的な面でまだまだ「質」の高い意見が少ないと言える。

アイディアに富んだ創意工夫の見られる実践活動は、やはり「質」の高い話し合い活動を通して創造されるものであろう。児童一人一人の「個性」と「能力」を十分に活かされる話し合い活動を今後、実践して行かなければならないと思う。また児童一人一人が幸福感を味わい、充実した学校生活を送れるために、児童全員が仲良くできる人間関係を今以上に強固に作り出して行く事が「質」の高い発言を促すうえでの基本となると考える。この課題を解決できるようにあらゆる学習場面でいろいろな方策を試み指導して行きたいと考える。

— 1年生・話し合い活動 — [11月6日]

三鷹市立 南浦小学校

1年4組 (男19名, 女18名)

指導者 大久保 聡 子

1. 本学級の研究主題 『一人一人が意欲を持って実践する学級会活動のあり方』

2. 主題設定の理由

学級会活動では、児童が自分の問題をみんなの前に出し、他人の出した問題も、自分たちの問題としてとらえて話し合い、解決しようとする態度を育て、その過程において児童が主体的に行動するよう導くことが大切であると考え。そのためには、話し合い活動、係活動、集会活動のそれぞれの場面で、児童一人一人が生き生きと活動できることが基本であると考え。しかし、話し合いはできたが、その後の実践でつまづきをみせたり、話し合いが、一部の児童の発言で終わってしまったりする。これは、事後の実践への見通しを持って話し合いができていなかったり、議題の理解が不十分であったためではないかと思う。そこで、議題を自分たちの問題としてとらえ、話し合った結果を実践に移せる児童を育てたいと考え、本主題を設定した。

3. 学級の実態

明るく元気な子供達であるが、自己中心的で我が儘な子が多い。そのために、学級集団としてのまとまりにやや欠けるところがある。

学級会は好きだが、発言する児童に片寄りがある。一学期は、黒板書記とノート書記を班長の輪番で行い、二学期からは、教師の助けを借りながら、司会も班長の輪番としたが、順番がまわってくるのを楽しみにしている。その反面、学級会で話合っている内容が理解できずにいる子が数名いる。しかし、その子達も発言しようとする意欲はあり挙手するが、指名されると何を言っているのかわからずに「忘れました」と答えるか、まったく関係のないことを発言する。また、聞いているだけで、積極的に発言する児童に任せてしまう子も多い。学級会前に次回の議題について学級会係から説明したり、計画カードを使ったりすることにより、少しずつ自分の意見を言うことができるようになってきた。

4. 指導の実際

よい話し合いは、よく聞きあえるかどうかにかかっていると思う。そこで、人の話を最後まで聞く態度を育てるために、月曜日の朝会での校長先生のお話を簡単にまとめて発表する練習をさせたり、国語を中心とする各教科・道徳で、人の意見でわからなかったことを質問して確かめさせたり、人の意見と自分の意見を較べて発言できるように「……さんと似ています」とか

「……さんにつけたすと」「……さんの意見をまとめると」というような話型の提示をしたりして指導をしてきた。また、話すことに慣れさせるために朝の会・帰りの会等で順番に話をさせたりしてきた。

議題については、一学期は教師がほとんど用意してきたが、児童のつぶやきや訴えの中からとりあげて「……さんがこんなことを言っていたけれど、みんなで考えてみたら」というように提示し、自分達も議題を出してみたいという気持ちを育ててきた。二学期は、議題ポストに出された議題を帰りの会を使ってみんなで決めていく過程の中で、学級会にふさわしい議題とはどのようなものか気付かせ、身のまわりの生活の中から議題を見つけることができるようにすることを指導した。

係活動では、児童とともに学級に必要な係をさがしながら、すべての児童がどの係も経験できるよう輪番で仕事を進めてきた。二学期になって学級会で話し合い、児童の希望で係への所属を決めた。仕事を忘れずにできるようにするために、係の掲示板を用意し、活動の終わった係の札を裏がえして目で確かめるようにした。

集会活動では、みんなが楽しくできる計画がたてられるよう援助するとともに、できるだけ多くの児童が、集会に必要な係を分担し、みんなで作る集会になるよう指導した。集会活動は原則として学期に一回の予定だが、集会に使えるようなゲームや歌を授業でもとりあげたり、準備の時間を十分確保できるよう心がけてきた。また、集会が終わったあと、よかったところ、こうすればもっとよくなると思うところを話し合い、次の集会へつなげていけるようにしている。

5. 学級会活動（話し合い活動）の実践

(1) 本時のねらい

- ・みんなで楽しくできるゲーム集会の計画を考える。
- ・みんなに分かるように最後まではっきりと発言する。
- ・友達の意見を最後まで聞く。

(2) 実施計画

第 12 回 学 級 会 実 施 計 画		11月6日(木)5校時	
議 題	ゲーム集会のやり方を考えよう		
めあて	みんなが楽しくできる計画をつくろう。		
提 案	一学期の飯田君のお別れ会で、ゲームをやったことが楽しかったです。また、みんながゲームをやりたいと思って議題に出しました。〈提案者 小林 香織〉		
理 由			
司 会	有馬 雄太	ノート書記	黒木 大介
副司会	大江 佳織	黒板書記	柴田 満実・建部 愛
話 合 い の 順 序		時 間	気 を つ け る こ と
<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで歌を歌う ・先生の話 			<ul style="list-style-type: none"> ・集会の場所と時間の確認をする。

1.はじめの言葉		
2.役割紹介	10分	
3.議題とめあての確認		・めあてにそった話合いができるようにする。
4.提案理由の説明		
5.質問		
6.話合い		
①どんなゲームをするか決める	30分	・前回の学級会で話し合ったことが生かせる内容を考える。
②ゲームをいくつするか決める		・時間を考えて決める。
③どんな係をつくるか決める		
7.決まったことの発表		
8.先生の話	5分	
9.終わりの言葉		

(3) 指導上の留意点

- ・無理のない計画がたてられるように助言する。
- ・前回の学級会で話し合ったことが生かせるような内容にさせる。
- ・できるだけ多くの児童の発言をとりあげ、よいところを認め励ますことにより、次回の意欲につながられるように助言する。

(4) 評価

- ・みんなで楽しくできるゲーム集会の計画がたてられたか。
- ・みんなに分かるように最後まではっきりと発言できたか。
- ・友達の意見を最後まで聞き、興味を持って話合いに参加できたか。

6. 指導後の児童の変容

一学期は、自分の意志を言葉で相手に伝えることができず、そのために暴力をふるったり、すぐ泣いてしまったり、トラブルが大変に多かった。しかし、人の話を聞いたり、みんなの前で話をする機会をつくったことにより、自己表現のしかたがわかってきたのか、少しずつトラブルが減ってきた。また、自分達が話合って計画をたて、それを実践するという経験を何回かつんだことにより、学級への所属感が少し強くなってきた。遅れの目立つ子や、障害のある子も、自分達の学級の仲間として意識し、認められるようになってきた。

7. 反省と今後の課題

一年生に入学してくる子供達の多くは、国語や算数等の教科学習にはある程度の予備知識を持ち、自分なりのイメージをつくりあげている。しかし、学級会というものに関してはほとんど何の予備知識もなく、白紙の状態にある。このような時期にこそ、「学級会は自分たちの時

間」であるという自覚を持たせ、意欲的に取り組む姿勢を育てていかなければならないと考える。そのためにも、話し合いの基本的ルールを身につけさせるとともに、議題集め、話し合い前の実施計画の指導、事後の実践への指導、その実践が次の活動へと生かされるような計画が重要になってくる。

ところが、実際の場になると、「話し合わせたい」という教師の意図が強くはたらきすぎ、児童が「自分の問題」としてとらえていないために、話し合いが不活発になってしまったり、発言が一部の児童に片寄ってしまったりすることがあった。計画カードを使ったり、事前に学級会係によって議題を知らせることにより、自分の意見を持って話し合いに参加できるようになってきたが、まだ十分とは言えない。また、実施計画をつくったり、話し合いで決まったことの掲示をしたり、議題箱の整理をしたりという事前、事後の活動のための時間が十分に確保できない週もあり、継続的・発展的に指導が続けられたとは言えない面がある。お楽しみ会の計画や、係活動について、といった比較的身近で意見の出しやすい議題の場合、発言は活発になったけれども、それぞれが、自分の意見の主張のみに終わり、反対意見を説得できるような話し合いに深めていくことがむずかしかった。

入門期の子供達にとって、事前の話し合いの実施計画を作る場合、どの程度まで援助することが必要なのだろうか。低学年にふさわしい話し合いの柱のたてかたとはどのようなものなのだろうか。低学年での実践を、中学年、高学年へと積み重ね、深めていけるようにするために、おさえておかなければならないポイントとは、どのようなことなのだろうか。十分に実践できなかったこととともに、疑問点もいくつかでてきた。このような疑問を解決できるよう、今後実践を積み重ねていきたい。

一 口 メ モ (望ましい議題)

● 適切な議題の条件

- (1) 学級生活に、直接結びつく問題であること。
- (2) 学級の全員に共同の問題であること。
- (3) 児童の自治的活動の範囲内と認められる問題であること。
- (4) 児童自らの手で、具体的に解決の方策を見出し得る問題であること。

● 議題の種類

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| (1) 学級会の組織に関するもの | (5) 学校行事への参加に関するもの |
| (2) 学級会活動の計画に関するもの | (6) その他、学級生活の充実、発展に |
| (3) 学級内の約束や相互援助に関するもの | 関するもの |
| (4) 児童会活動に関連するもの | — 特別指導指導上の諸問題 — (文部省)より |

Ⅲ. 児童の意欲を高める指導（実践事例）

〔事例・1〕

《学級会活動入門期の指導(1)……学級会活動を育てる学級経営の工夫》

低学年における話合いの入門期に、どのような手だてをこうじたらよいか、いろいろと考えたり、実践したりしてきた。

- (1) 教科の時間では、どんな答えでも大切に扱い、認め励ました。

道徳においては、登場人物になりきらせ、思ったことや考えたことは、同じものが出ていても、「〇〇さんと、……ところが同じなのね」「〇〇さんと、言い方が違うけれど同じ気持ちね」と言うようにして、一人でも多く発言できるよう配慮した。

- (2) 話し方や聞き方では、「はい・いいえ」「……です。……ます」「わかりません。忘れました」「もう少し考えさせてください」「よく聞こえないので、もう一度言ってください」などの話し方の指導を取り入れた。

話を聞く時は、「話をしている人の目を見て、最後まで聞く」ようにさせた。

- (3) 一日一回以上の発表

一日一回以上手を挙げて発表ができるように配慮した。全員がわかる質問をしたり、発表の少ない子が手を挙げていると優先して指し、どの子も一日一回以上発表することによって、発表への意欲を持たせた。

- (4) 朝の会・帰りの会を利用して

朝の会や帰りの会で、日直として司会の練習をした。自分の言葉として言えた時は、うーんとほめ、声の小さい子には、ちょっとした言葉でも大きい声で言えた時は、「〇〇のところが、大きい声で言えてよかったわね」というように、一人一人のよいところをみつけて励ますようにした。また、会員としての力をつけるのにも利用した。「〇〇さん、よいことに気がついたわね。帰りの会で話してみるといいよ」など。

- (5) 遊び（ゲーム・歌など）

いろんな経験をさせるようにした。少しの時間を利用して、ゲーム・歌などを教えることによって、子どもたちの親密さを増し、話題も豊かになった。また、発言の意欲を高める一つの手だてになった。

- (6) 集会活動

集会活動を多く取り入れることによって、人の前で話すことに自信を持たせた。また、集会活動の仕事をやることによって、会が楽しく進むことが理解でき、係活動にもつながる。以上のようなことを、常日頃気をつけて指導していくと、一年生でも話合い活動がうまくいくと思う。どんなことでも基礎が大切だが、話合い活動では、こんなあたり前のことができてはじめて、楽しい話合い活動に結びついていく。

〈足立区立 弥生小学校 山口 タツエ〉

《学級会活動入門期の指導(2)……学級会活動に意欲を持たせる指導の工夫》

五月頃になると、一年生も学校生活に慣れて、あれこれ先生の手伝いをしたがるようになる。そこで「今まで先生のお手伝いをしてくれたけど、クラスみんなのためにしてあげられることはないだろうか」と投げかけてみる。やりたい気持ち十分の子どもたちは、すぐに目を輝かせてとびついてくる。ここで学級会一係活動一の導入を図るとともに、「学級会とは」について理解させ、教師主導の話合い活動から出発する。ここでは、二学期に入ってからの話合い活動での手だてについて記してみたい。

〈司会台本を持たせる〉

今まで先生がやってきた「指名や黒板記録を」みんなにまかせたいと話すと、子どもたちの反応はさまざまである。が「だれでも出来る」手だてを取ってやりさえすれば、どんな内気な子でも、指名や黒板記録（教師が書いたものを貼る）は出来る。司会グループを作って（指名2人、貼る2人）輪番にすれば、グループ内で各々がやりたいものを決めて来る。事前に会の進め方を話合って、書き込みの済んだ台本を家に持ち帰り練習させる。前日には、司会グループの役割りにそって一度リハーサルもする。こうすれば、どの子どもみんなの前で、憶せず自分の役割りをやりとげる。出来たという実感が自信となって子どもたちの心を一まわり大きくさせていく。

〈評価を具体的にする〉

話合い活動の終末段階では、具体的な例を上げて、名指しで評価していく。「あのようないい方がいいのか」「発言できなかったけど、しっかり聞いていたことを先生は見ている」「司会グループの役割りは今日のようにすればいいのか」と一つ一つ子どもたちは教師の評価を通して気づいていく。やがて子どもたちは相互評価が出来るようになる。相互評価を聞きながら教師はさらに目指すものを取り上げて評価していく。友だちから認められた、先生にほめられたということが、子どもたちの満足感となり、さらに認められたい欲求を持つようになる。

〈他校の例を知らせる〉

学級会の議題は、当然、学級の児童の願いから決められるものであるが、時々、他校参観の例を話している。「こんな議題で話し合っていた」「こんなところが上手だった」「こんな点はみんなの方がいいと思った」と土産話をする。それによって「今度は自分たちもそういうことを話合いたい」「上手なところを真似てみたい」「自分たちのいいところは、クラスの宝物にして大事にしよう」と、子どもたちの次の学級会への意欲は盛り上がる。教師は、子どもたちの意欲を盛り上げるためには、演技者である必要もあるように思う。

〈小平市立 小平第四小学校 鶴沢典子〉

《学級会活動入門期の指導(3)…… 議題を見つける目を育てる指導の工夫》

入学したての一年生は、「国語」や「算数」は知っているも、「学級会」という言葉は、耳新しいものである。通常のオリエンテーリングだけでは、今一つははっきりとイメージをつかめないものである。

初期の指導においては、教師が司会（議長）、指名、黒板書記など全ての仕事をするが、2学期ごろからはやさしい部分から子どもに手伝わせていくことはどこでもしていることだろう。議題を見つける目を育てるのは、さらに大変であるが、大切なことである。

1学期も半ばごろ、児童に「なにかこまっていることはないか」と、問いかけてみた。A君が、全く個人的な、自分自身のみに関することをうれしそうに発表した。とたんに教室中がドッと笑った。「みんなのクラス」「クラスの中で困ったこと」という言葉の意味をここでおさえるよいチャンスであった。A君以外のほとんどがそれに気付いていたからこそ笑えるのである。「学級」という集団の意識を持たせることが出来たのである。

2学期には、次の3つの観点を与えて、議題集めをしてみた。

- ① こまっていることはないか。
- ② やりたいことはないか。
- ③ みんなでたのしみたいことはないか。

3点すべてについて書ける子どもは少なかったが、結果は教師の期待以上のものであった。

①こまったことでは、「そうじをさぼる」「男の子がすぐぶつ」「君がちゃんとやってくれない」など、いっぱい出てくる。ここで気をつけたいのは、学級指導との関連である。学級指導として扱った方がよいものが多いので、教師自身の選択の目が必要である。

②③では、様々なおたのしみ会的な要望が多く出てきた。これは、1学期末におたのしみ会を行ったためである。幼稚園や、保育園で誕生日会等のおたのしみ会を経験しているが、1年生では、司会進行からプログラムづくり、かざりつけなど、今までは先生に頼っていたものを、自分達に任されたものだから、子ども達のハッスルぶりはいうまでもない。この1学期末のおたのしみ会は、実は教師が運営しているのだが、「みんなの力でよくできたね」と子ども達を多いにもち上げ、満足感と成功感をたっぷり味あわせておくことが大切である。これらの経験を多く踏んだ子ども達は、次々に集会のアイデアを出していくものである。

アンケートの結果を、短冊カードにして、常時クラスに貼っておく。その後提案された議題もカードにし、指名を書き添えて上げると、嬉しくて、議題をさがすようになってくる。

〈中央区立 月島第三小学校 遠藤 朋子〉

〔事例・4〕

《意欲的な話し合い活動を推進させるための計画委員会への指導》

1. 計画委員会の構成

一昨年は、学級会毎に議題案を決めていたが、昨年は、効率をよくし見通しを持たせるために、月の初めか終わりの担当の議長団に一カ月の議題案の整理をさせた。今年は、児童一人一人が問題意識を持ち、意欲的に参加できるように新しい計画委員会を作った。

計画委員会は二つあり、一つは月の議題案を決めるためのもの、もう一つは話し合いの流れや役割などを決めるためのものである。

〈計画委員会A〉

各生活班から一名ずつの計七名で構成。各班では、月毎の順番を決めておく。

〈計画委員会B〉

輪番制で、担当の生活班の児童と提案者で構成。

2. 計画委員会Aのオリエンテーション

新しい活動を始めるにあたり、学級の児童全員でそれを確認し、集団意識を高めるため全員参加の計画委員会を設けた。

教室の真中で委員が話し合いをし、他の児童は回りでそれを見た。全員に計画委員会ノートを持たせ、委員には話し合われたこと、他の児童には気がついたこと自分だったらこうするなどを書かせた。回りの児童には発言権を与えなかったが、ノートには「これは今すぐ話し合わなくてもよさそうだ」「議題の一番はこれだ」「早くやってみよう」といった意見や感想がたくさん書かれていた。

1. 始めの言葉
2. 話し合うことの確認
3. 話し合いの順序の確認
4. 集まった問題の確認
5. 問題の整理
6. 議題案の決定
7. 取り上げられなかった問題の解決方法
8. 全員にはかる期日の決定
9. その他
10. 決定事項の確認
11. 反省
12. 先生の話
13. 終わりの言葉

話し合いの進め方は、右の表の通りである。ノートには、進め方のほかに、集められた問題の一覧・議題案選びの観点・自己評価などが記されている。

3. 計画委員会・話し合い活動への意欲化

このオリエンテーションで、学級会はみんなで作って上げていくものであり、一人一人が大切な役割を担っていると感じた児童が多かった。「話し合うことがよくわかった」「計画委員がしっかりやっているのだから、ぼくもたくさん発言できるようがんばる」などの感想は、話し合いへの橋掛かりとしての内発的動機づけになったものと思われる。

〈立川市立 柏小学校 鷲尾 健 一〉

Ⅳ. 研究の反省と今後の課題

1. 研究の反省・成果

昨年度に引続き、「一人一人が意欲をもって実践する学級会活動のあり方」を主題にして第2年次の研究を進めてきた。“意欲をもつ”ということは、まず基本的な欲求が満たされ、さらに高次の欲求を満たそうとすることである。—を合言葉に、児童の欲求の実態を多面的にとらえ、研究した。次のようなことが、成果や反省として挙げられる。

① 児童の欲求の実態をつかむ、多様な方法を学んだ

児童の実態をとらえる方法として、まず第一に挙げられるのは、観察法であり、どの授業者もめん密に行っていた。さらに三人の授業から、次のような多様な客観的な実態調査が提示され、参考になった。

ソシオメトリック・テスト、話し合い活動に関する意識調査、学級適応への援助のめやすと項目調査、学級集団星座グラフ(学級適応状況とリーダーシップの有無を知るために)、学級生活の採点、自己診断テスト、学級会活動についてのアンケート等である。

② 児童の欲求をさらに高次のものに高めていく指導のあり方

「こんなグループでこんなことをしたい」「自分の役割を認められたい」「やってよかった。次はこんなことをしたい」等の思いの現れが高次の欲求の現れである。高次の欲求が次々とわき上がるような指導の方法が次のようであることを確認した。議題選定はていねいにする、議題提案理由が学級会活動の方向づけの重要なポイントであること、議事決定では、安易に多数決を採らないこと、終末の児童の相互評価、教師の助言が次の意欲につながること等である。この点は、大いに今後の研究の余地を残している。

③ 年間の研究の進め方の見通しが、事前に十分検討された

部の研究主題の中の“意欲をもつ”とはどういうことなのであるか、当初十分に討議された。そのために、授業を見る視点、授業案の検討等の視点が明確で分かり易かった。

2. 今後の課題

主題設定の段階では、仮説を明確にたてて研究を進めると、成果も見極め易いので、実践していきたい。また、最も基本となる児童の欲求の実態のとらえ方に今一つ工夫の余地がある。児童の真の願いをつかみ、高次の欲求を持ち続けるような指導法の研究をしていきたい。

3. おわりに

この一年間、研究のために、ご多用の中、出席して下さった幹事の先生方、進んで研究授業を引受けて下さった3人の先生方、執筆に携わって下さった先生方、研究会場を提供して下さいました校長先生はじめ諸先生に深く感謝いたします。

また、授業研究の際、適切なお指導とご配慮を賜った、元全国道徳特別活動研究会会長岡本孝司先生、前江戸川区立第四葛西小学校校長小笠原探源先生、元東京都特別活動研究会会長外村近先生、同小河一久先生の諸先生に深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしくご指導の程、お願い致します。

Ⅱ 児童会活動

テーマ 「実践力を育てる児童会活動の在り方」

I. 本年度の研究について	31
1. 主題設定の理由	31
2. 研究の視点	31
3. 研究の内容と方法	31
II. 授業研究(実践事例)	32
1. 全校の友達がもっと仲良くなるには、どうしたらよいだろうか	32
—代表委員会話し合い活動—	台東区立金曾木小学校
2. みんなで使う所、遊ぶ所に名前をつけよう	36
—代表委員会話し合い活動—	東村山市立富士見小学校
3. たて割り遊びをもっと楽しくするためには、どんな工夫をしたらよいでしょうか	40
—代表委員会話し合い活動—	板橋区立成増小学校
III. 月例研の協議から	
1. 人間関係を作るには	44
2. 教師集団の共通理解の大切さ	45
3. 責任ある許容性 —真の自主性を育てるために—	46
4. 実践力とはなんだろう	47
IV. 資料	48
○組織	○代表委員会だより
V. まとめと今後の課題	50
1. 研究の成果	50
2. 今後の課題	50

〈児童会コーナー〉

- | | |
|--------|-----------------|
| コーナー 1 | 代表委員会って 何だろう？ |
| コーナー 2 | 計画委員会、運営委員会…？ |
| コーナー 3 | ちょっと待って、その年間計画！ |

○研究の経過

- 61.5.27(火) 定期総会 分科会 組織作り 本年度の研究方針
- 61.6.13(金) 研究計画 研究主題 研究内容 研究日程
- 61.7.8(火) 代表委員会の望ましい議題についての研究
- 61.9.16(火) 授業研究 (実践事例1) 台東区立金曾木小学校
「全校の友達がもっと仲良くなるには、
どうしたらよいだろうか」
- 61.10.21(火) 授業研究 (実践事例2) 東村山市立富士見小学校
「みんなで使う所、遊ぶ所に名前をつけよう」
- 61.11.11(火) 授業研究 (実践事例3) 板橋区立成増小学校
「たて割り遊びをもっと楽しくするためには、
どんな工夫をしたらよいでしょうか」
- 61.12.11(木) 研究のまとめ 研究集録の編集計画 研究発表の計画
- 62.1.19(月) 研究集録の内容の検討 研究発表の準備
- 62.2.19(木) 研究発表の準備
- 62.2.27(金) 研究発表会

研究・執筆者名	
部長	中川 秀男 中野・桃園三小
副部長	岩堀 早苗 江東・越中島小
副部長 (司会)	佐々木善光 文京・真砂小
副部長 (司会)	若林 彰 板橋・板橋四小
副部長	味村美恵子 大田・入新井一小
副部長	山崎 誠二 台東・浅草小
前部長	今野 正保 新宿・淀橋三小
	福田 俊彦 新宿・天神小
(発表者)	池田 久子 台東・金曾木小
	伊藤 雅祥 江東・亀島小
(記録)	金子 尚子 品川・四日野小
	藤田 祐子 大田・道塚小
	門馬 茂 豊島・文成小
	高宮 良子 板橋・高島二小
(司会)	早乙女悦子 板橋・稻荷台小
(提案者)	福島 尚子 板橋・成増小
	木部 久子 板橋・成増小
元部長	渡辺 寿 練馬・中村小
	田中 悦子 足立・入谷南小
	伊藤 幸一 八王子・横川小
	喜多 晶子 立川・柏小
	岡庭 雅子 武蔵野・大野田小
	清水つる子 武蔵野・大野田小
元部長	星野 隆治 三鷹・井口小
	物井 弘 三鷹・井口小
	渡辺 勝夫 三鷹・井口小
	伊藤 均 青梅・三小
	金田一清子 青梅・三小
	望月 信二 青梅・二小
(記録)	井上 陸美 調布・柏野小
	川村 恭子 小平・学園東小
(発表者)	村田 邦子 東村山・富士見小
	吉田 一幸 保谷・東小
	関 幸治 港・青南小

1. 本年度の研究について

1. 研究主題について

昨年度に引き続き、2年次に亘る研究主題である。昨年度は、実践力の内容を具体的な授業研究を通して探ろうとした。そこで残された課題の一つが「生活に深くかかわる議題の取り上げ方をどうするか」であった。児童会活動の特質は、くり返すまでもなく「児童の自発的、自治的活動」にある。従って、一つ扱いを誤ると、いかにも教師の代わりに生活指導を児童にゆだねることになりかねないといった議題を安易に取り上げることが厳しくいましめねばならない。しかし、その前提に立ちながらも、現実には議題名だけを見ればある危険を感じさせるような議題も出てくるものである。そうであるならば、むしろ「生活に深くかかわる議題」に挑み、そのことを通して望ましい議題本来の特質とする、自発的、自治的活動の大切さを再確認すること、また、そのような議題を扱う際に十分留意すべきことを明らかにすること、さらに、その活動の過程から児童の実践力の内容を一層明らかにすることを研究のねらいとして今年度の研究を構想した。

2. 研究の視点

(1) 実践力の育成にふさわしい議題の発掘に努める。

上記の研究構想の趣旨を受けて、「行事でもなく、集会活動でもなく、生活指導に深入りしない」議題はないか探る。

(2) 実践力の概念を実践的により明らかにする。

実践力とは何かを、児童がどのような場面で、どのように動くことかで探る。

(3) 実践力の育成を念頭におく教師の配慮事項を明らかにする。

自発的・自治的活動としての特質を最大限尊重しながら、「生活に深くかかわる議題」を取り上げる際の留意事項を明らかにしていく。

3. 研究の内容と方法

(1) 授業研究を通して実践的に研究を進める。なお、その際地域・学校規模に配慮して授業校を選定・依頼する。

区部12学級・市部19学級（新設校）・区部18学級の3校において実施した。

(2) 月例研究会を充実させ、授業研究のまとめとともに、いくつかの課題を定めて協議を深める。（Ⅲ 月例研の協議から）

(3) 研究の段階的な深まりとともに、「すぐに役立つ児童会活動の工夫」についての情報交換の機会を意図的に設定する。

Ⅱ. 授業研究

〈事例1〉「全校の友達がもっと仲良くなるにはどうしたらよいだろうか」

－代表委員会話し合い活動－（台東区立金曾木小学校）

1. 本校の代表委員会について

① 代表委員会の組織



- 常任委員・委員長は二期制（4～9月・10～3月）
- 学級代表は三期制
- 代表委員会活動日 第2火曜日（金曾木の時間）

代表委員会が円滑にすすむために、事前に、議題、提案理由、話し合いの順序など模造紙に書きピロティ（玄関広場）に貼り出して、全校に知らせる。クラス討議が必要な場合は、臨時に代表委員会を行い、クラスの意見をもって代表委員会にのぞむ。この時間の設定は、昼休みや放課後を利用している。話し合われた内容は「代表委員会だより」で各クラスに知らせる。

② 本年度1学期に取りあげた議題

- | | |
|-------------------|------------------------------|
| 4月 1年生を迎える計画をたてよう | 6月 学校で困っていることや、やってほしいことを調べよう |
| 前期の計画をたてよう | |
| 5月 運動会のスローガンを決めよう | 七夕集会の計画をたてよう |

2. 本時にいたるまで

① 問題把握

6月の意識調査の結果、遊び、掃除、ことば使い、上級生と下級生の問題、友達関係、集会など様々な意見が出された。その中で全校の児童が仲良くなる事が大切だという意識が高まった。

② 解決の視点

全校で話し合うことにする。単に話し合いに終わらせるのではなく、具体的な解決の方法を考えさせる。

③ 議題の設定

常任委員会で解決の方法を話し合う中で、本時に取り上げた議題が決定した。

3. 本時の展開

- ① 全校のみんながもっと仲良くなるための具体的な活動や内容を考えさせる。
- ② 学校生活の問題を児童自身の具体的な活動で解決していこうとする考え方を育てる。

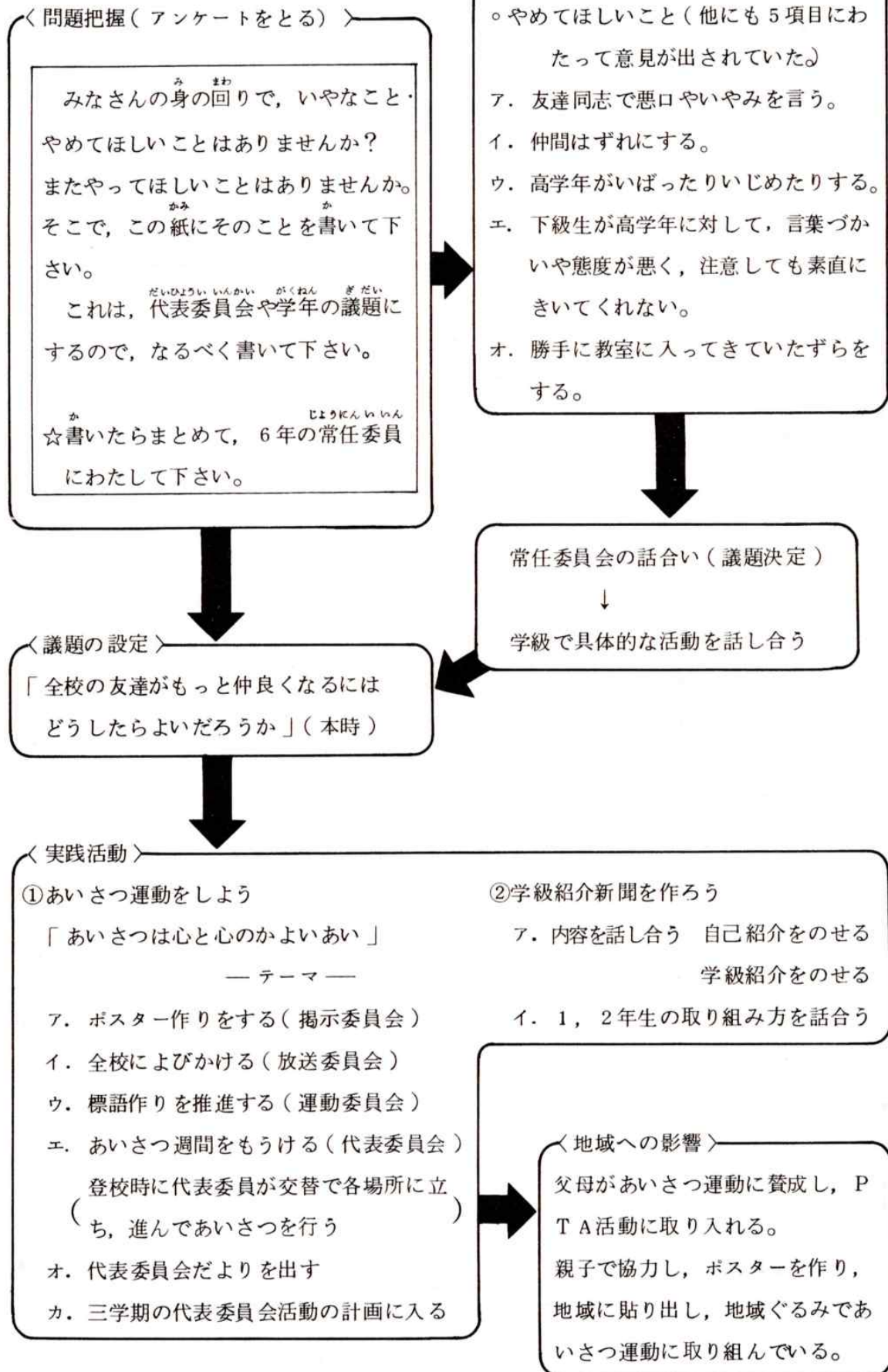
<実施計画>

活動の過程	指導上の留意点
<p>1. はじめの言葉</p> <p>2. 問題の確認, 「全校の友達がもっと仲良くなるにはどうしたらよいか」</p> <p>3. 提案理由の説明</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>「学校で困っている事や、やってみたい事を調べよう」というアンケートをとった結果, 「上級生がいじめたり, いばったりする」「友達同志で悪口やいやみをいう」というような内容のことが多くありました。そこで, 全校の児童が, お互いをよく知り, 又, 他のクラスのことをよく知り合えばもっと仲良くなれるのではないかと考え, この議題を提案しました。</p> </div>	<p>役割分担をしっかりとさせる。</p>
<p>4. 議題についての話し合い</p> <ul style="list-style-type: none"> ① クラスで話し合ってきたことを発表しあう。 ② 質問や意見を聞き, 話し合う。 ③ 全校の友達がもっと仲良くなるにはどうしたらよいか決める。 ④ 実施の時期と役割分担などを決める。 ⑤ 決定事項の発表 ⑥ 先生の話 ⑦ おわりの言葉 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 短冊に書き, クラス別に貼り出しておく。 ○ クラスの意見にこだわらず, 全校で取り組める方法を考えさせる。 ○ 話し合いが円滑にいくように, 意見を分類整理させる。 ○ 1・2年生にも取り組めるように配慮させる。

<評価>

議題について十分理解でき, 具体的な活動や内容が考えられたか。

4. 活動の概要



5. 考察

児童たちが、自分たちの生活をみつめ、学校生活をもっと楽しく過ごしたいと考えるようになった時、自発性が生まれ、活動のねらいが明らかになり、実践的な力がついてくるのではないだろうか。

児童にとっての学校生活の楽しさとはなんだろうか。授業がよくわかる・集会がいつも楽しい・いじめがなく友達と楽しく遊べることなどがあると思われるが、それらは、なんといっても豊かな人間関係あってのものだろう。この意味で、豊かな人間関係を育むという機能も、また特別活動の担う「一つの」役割であると考えられる。

今回とりあげた議題は、児童の要求の中から生まれたものであり、9月に取り扱ったものにもかかわらず、今なお活動が続けられ、取りあげられているという事は、児童の、自分たちの生活をもっと良くしたいという願いの現れではないか。「全校の友達ともっと仲よくなるにはどうしたらよいだろうか」という具体的な活動の一つとしての「あいさつ運動」は、父母の心も動かし、PTA活動として地域にまで取り組みが広げられた。「あいさつは心と心のかよいあい」というテーマのもとに児童と父母が協力して作ったポスターが地域に貼り出されたが、このことは、大人も子どもも、豊かな人間関係をどれだけ望んでいるかということがよくわかるエピソードであった。

今まで児童集会や学校行事参加のための議題が多く取り扱われてきたが、こういった生活問題なども、代表委員会を通して、子どもの立場から考え、一定の児童会活動としての限界をふまえた上で活動させるのも、児童に豊かな実践力を育む一つの視点であると考えられる。

〈児童会コーナー 1〉

代表委員会って 何だろう？

みなさんは、初めて代表委員会に出席しました。さあ、代表委員会ってどんな活動をするのでしょうか。みなさんにぜひ考えてほしいことはみんなの学校生活がもっと楽しくなるように意見をどんどん出してほしいことです。自分だけのことや仲よしの人たちのことだけではなくて、1年生から6年生までみんなのことを考えるのですよ。気をつけてみると、きっと解決しなくてはいけない問題が出てくるはずですよ。そんな問題

をみんなで真剣に話し合ってみましょう。みんなの力を合わせて考えを出し合って私たちの〇〇小をもっとすばらしい学校にしていきたいと思います。



代表委員になった子たちは、意欲をもって目を輝かせています。この子たちが生き生きと活動できるよう、私たち教師も共に考えていきたいものです。

全校の代表なのだ、みんなの立場になって考えるんだ、ということを実感させて、受け身になることなく進んで活動できるよう、代表委員会のスタート時に役割を明らかにしましょう。

先生方の励ましで、子どもたちは大きく躍進していきます。

〈事例2〉「みんなで使う所，遊ぶ所に名前をつけよう」

—代表委員会話し合い活動— （東村山市立富士見小学校）

1. 本校の代表委員会について

今年度開校したばかりの新設校であることのよさを 代表委員会の組織づくりや活動に生かせたらと思い，学校づくり・歴史づくりをしていこうとする方向で子どもたちの意識を高めようと働きかけてきた。4年生以上各学級男女1名ずつの18名の構成メンバーは，月1回の代表委員会の活動時間を軸に，議案によってはグループで分担し，昼休みや放課後を使い計画・実践してきた。開校にちなんだ活動や集会ばかりでなく，子どもたちの学校生活を考えていく上で，生活上の問題点を探り，児童活動として何ができるのかを試行してきた。6年生を中心に，きめの細かい計画や自主的活動が少しずつできるようになってきている。これまで取り組んできた議題は次の通りである。

4月	1年生を迎える会をしよう	
5月	遊び場の使い方を考えよう	○開校を祝う会をしよう ○全校文集をつくろう ○施設に名前をつけよう ○タイムカプセルを埋めよう
6月	ユニセフ募金を集めよう 開校を祝って記念になることをしよう	
7月	開校祝いのパレードをしよう	
9月	運動会を盛り上げるために何かできないだろうか	
10月	全校児童と代表委員会の活動をよりしっかりつなげるための手だてはないか みんなが使う所，遊ぶ所に名前をつけよう	

2. 議題設定に至るまで

6月に開校式典を行うことになり，開校を祝う会を児童会で計画してはどうかと学校から話があった。そこで，開校を祝って単に集会を計画するだけでなく，「開校を記念して全校でどんなことをしたいか」という取り上げ方で話し合った。その結果次の4点にじぼられた。

- | | |
|---------------|----------------|
| ① 仮装パレードをしよう | ② 全校文集をつくろう |
| ③ 施設に名まえをつけよう | ④ タイムカプセルを埋めよう |

①②は1学期の取り組みとし，③は施設の完成を待つこととし，④は1周年を期して実施することとした。本議題は③の議題設定にあたる。

本議題の取り組みとして，これまでに次のようなことを行ってきた。

- (1) 代表委員会児童と学校を回り，どんな施設に名前をつけたいか話し合った。
- (2) 代表委員会児童の案を基に先生方に提示し共通理解を図った。（職員朝会等）
- (3) 代表委員会便りと高学年児童による低学年児童への働きかけで議題の周知を図った。

3. 実施計画

実施計画		
第7回 代表委員会の計画 10月21日(火) 2:15より		
議題	みんなで使う所、遊ぶ所に、名前をつけよう。	
提案理由	開校を記念して、他の学校にはない富士見小の素晴らしい施設を生かすため、みんなに親しまれる名前をつけようと考えた。	
係分担	議長 深田 耕一 副議長 千々石 森生 書記 吉野 典子 ノット書記 海崎 洋子	
話し合いのわあて	全校児童の考えを生かせるような施設を選び、話し合いの名前つけの方法を考えよう。	
話し合いの順序	時間 気をつける事 準備	
1	各学級から出た意見を発表する。	問題点
2	前日までの問題点を確認し、話し合う。	ア 築山に何を施設を別々に名前をつけるか。 イ アスレチックは別々に名前をつけるか。 ウ アスレチック全体に名前をつけるか。 エ 桜の木には名前をつけるか。
3	どんな方法で名前をつけるか ア 半年で割りあてて、名前をつける イ 学級で1つずつ決める ウ アンケート方式にする エ 毎日1つずつ、募集による名前をつける	・問題点と方法をあかじの板書カードにしておく ・全校の人達の考えを集められる方法は、ないか。
4	決まった事の確認と、残された問題	

施設の名前づけ

今、代表委員会では、学校のいろいろな所に名前をつけることに取り組んでいます。他の学校にはない、富士見小のめずらしい施設を生かすために、全校のみなさんのアイデアを募ります。ぜひ、新しい名前をつけましょう。今考えているのは、

1F	園工室横の三角コーナー
2F	わたりのうか
3F	わたりのうか
3F	家庭科室横の三角コーナー
中庭	
野外ステージ	
つき山	
つき山の遊具 (スベリ台、トンネルなど)	
北太のアスレチック遊具	
さくらの木	

以上のナカ所です。みなさんはどう思っていますか。他に名づけたい所がありましたらお知らせください。

4. 話し合い活動の様子

新しく6~7この施設名があがり施設選びをする中で、「校舎」をどうするかで意見が分かれた。「親しめるように、校舎にも名前をつけたい」とする4年生と「他の学校にもあるめずらしいものではない」とする6年生との間に意見のやりとりがあったが、結局校舎には名前をつけないことになった。また、アの築山は全体に名づける、イのアスレチックは1つ1つに名づける、ウの桜の木は施設ではないが名づけることになり全部で17の施設が決まった。

名づけの方法では、全員がより強く名づけにかかわれるとして、学級での取り組みとなり、学級数19に足りない施設2つを、築山でまとめず1つ1つに名づけることで解決していった。

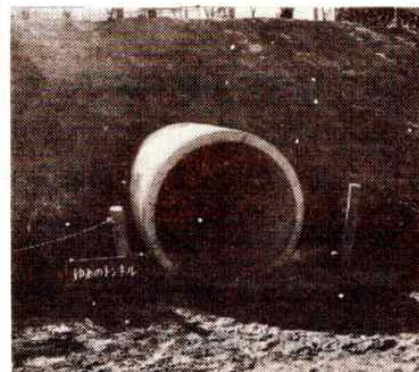
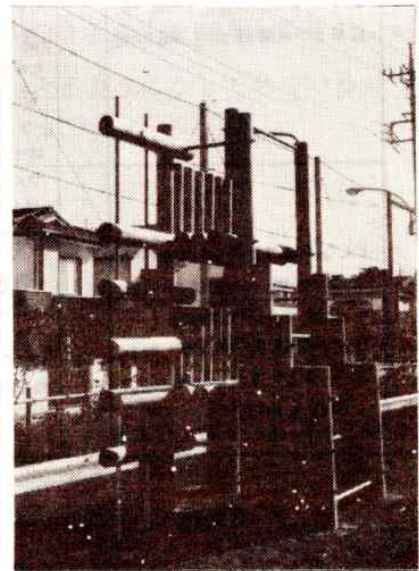
低学年には親しみやすい遊具をつけさせてやりたいとの一致した気持ちから、どの遊具を何年生にするかが論点となる。5つあるアスレチックの中から1年生には危険そうなもの1つを2年生にまわしたり、よく遊んでいる人気の高い遊具は何年生にするかなど、低学年の生活や気持ちをよく考えた活発な意見のやりとりの中で、この場では低学年の学年割り当て施設が決まる所まで話し合われた。

5. 授業後の活動

残された割り当て施設を昼休み、放課後に集まり話し合っていく中で、各学年にそれぞれ学級数分の施設を割り当てるが学級割り当てはせず、学年に任せて名づけしてもらうことになった。その後、11月26日ロング集会にて、名前の発表会をしようということになり、計画していった。実施にあたっては、教師の共通理解を図るため、2度各学年1名の教師に入ってもらって拡大した特活部会をもち、職員会議に提案したりした。子どもたちより出た案は、生かしてもらい、更に盛り上げるための貴重なアイデアやヒントをこの拡大特活部会等でもらった。

次の表は、各学年の工夫による名づけの方法と各施設につけられた名称である。

学年	分担された施設名	子どもたちのつけられた名前	名づけの方法
1年	凡太の階段 わたりぼう つば くみ木	ドレミふかいたん ジャンケンまるた ぐるぐるターザン むすびつきち	4つのアスレチック遊具で、それぞれ遊び、名前をイメージして決めた後、各学級で4つの名前を意見を出し合い、おてこたえを決めた。その中から子どもたちの希望が多いものに決めた。
2年	タイヤ のぼりぼう 的当て板・のぼりぼう	れんぞく タイマ さるのぼり ふじみかべ・のぼり+ゆめ	学年教師が相談し、学級1つずつの遊具を割り振り、お遊具で遊べた種、各学級ごと話し合い、名づけられた。
3年	つき山 トンネル すべり台	ふじみマウンテン ゆめのトンネル グリーンコースター	子どもたち全学年から、3つの施設の希望を募集し、おてこたえを1覧表とし、その中から子どもたちの希望が多いものに決めた。
4年	1Fのいそコーナー 中庭 2Fのわたりぼう	作品コーナー ゴム庭 水そうとさかなのろうか	学年で話し合いをもち、その場で意見を出し合い決めた。
5年	1F玄関の三角コーナー 野外ステージ 3Fのわたりぼう	ひかりの郵便 希望のステージ 富士晴れトンネル	各学級で名づけたい施設の希望を出し、おてこたえで施設の希望を出し、その中から学年で話し合い決めている。
6年	3Fのいそコーナー 温室 さくらの木	ゆかりコーナー おたけハウス 仲間の木	



上 ひみつきち

下 ゆめのトンネル

11月26日 施設の名称発表会は、1年生から順にひとつひとつ名前を発表し、名づけについて各学年・学級より話してもらった。名前を読み上げる度に、ファンファーレと共に3階ベランダより巻き紙を下げるなど、盛り上がった。子どもたちは、次の発表を楽しみにし、発表と同時に歓声を上げたりしていた。発表後は、名前づけを記念し全校がひとつとなって遊びこの会を終わった。肌寒い日であったが和やかで楽しい一時であった。

この後、職員作業があり、タイヤの遊具ができ、施設につけられた名称の名札が作られた。また、一覧表や表示板も現在、児童の手により作製中である。

6. 考案

児童活動を進めていく上でどうしても大切となるのは、全職員の理解であろう。本議題のような学校全体にかかわるものにとっては、全職員の理解と協力が絶対条件となる。代表委員会での取り組みがいつもガラス張りであって、しかもガラス窓はいつでも全開という状態をつくるように手順をふみ、他の職員に知らせ、時には知恵を借り援助してもらえたことが今回の成功につながった一要因ではないだろうか。ここで名づけていった遊具の多くは職員作業により作られたものであるし、名称決めから名札づくり、取り付け作業に至るまで、全職員の作業に負う所が大きい。新設校での職員の学校づくりへの情熱が子どもたちへと伝わり、その心をまとめ上げた形で今回の名づけが、楽しく夢のあるものになったのかもしれない。その意味で本議題は、開校したばかりの本校にはふさわしいものであったろう。名づけ活動は子どもたち一人一人の生活に根ざしたものであり、学校への帰属意識を育てる方向へとつながっていったように思う。

今、つけられた名称が子どもたちの学校生活に温かなものを生み出してきているように思う。「ゴム庭へ集まってください」「ぐるぐるターザンで遊ぼう」「グリーンコースターですべろうよ」の声を聞く時、ふと心が和むのは私だけではないだろう。

日々、学校行事をこなすだけでも大変な中、新設校であるための忙しさも加わって、代表委員会からの提案は、様々な制約を受けてしまうことがある。それゆえ子どもたちの発想を大事に育て、児童会活動を活発にしていくために、議題の見通しをたて、学校全体の中での児童会活動の時と場所を保障し、学校との調整役となっていくことが、指導していく者の大切な点ではないだろうか。

〈児童会コーナー 2〉 計画委員会・運営委員会・・・?

いろいろな名称で呼ばれているけれど、この委員会は、一体何をするとところなのだろう。簡単に言えば、「代表委員会での話合いがスムーズにできるようにお膳立てをするとところ」お膳立ての中身は…

- 議題の収集・選定
- 提案理由の吟味
- 話合いの柱立て
- 時間の配分
- 役割分担
- 資料の準備
- 全校への広報
- 会場の準備(黒板, 座席など)

— ここが大切! —

子ども達が提案理由をよく理解すること



資料を用意して目や耳で話し合うことを理解させる。

— ここが大切! —

時間を守ること



始まりの時間を守るように。話合いの柱立ては時間の見通しが持てるように。



〈事例3〉「たてわり遊びをもっと楽しくするためには、どんな工夫をしたらよいか」

—代表委員会話し合い活動—（板橋区立成増小学校）

1. 本時に至るまで

(1) 6月の議題 「みんなからの議題で話し合おう」

↓

アンケートをとる（議題集め）→（困っている事、願い事、楽しくしたい事）

↓

集った議題より選定 …… 議題「たてわり遊びをしよう」

↓

話し合って決まったこと

- 校外班のグループにする。
- 毎月第二土曜日の朝休みにする。
- 1回目は7月12日（土）にやる。

※たてわり班は登校する時の
校外班をそのまま使う。

(2) 7月の議題 「たてわり遊びの反省をしよう」

- 良かった点……………
 - 楽しくできた。
 - 登校する時は一緒でも、あんまり遊んだことはなかったのよかった。etc
- 直したい点……………
 - 遊んでいる時、高学年と低学年、または、男子と女子が別々に遊んでしまった。
 - 班の仲間が集合場所に集まらなかったため、遊び始めるまでに時間がかかった。

話し合って決まったこと

- 「たてわり遊び」は、今後も続けていきたい。しかし、少し工夫をしてからやっていきたい。

(3) 9月は運動会の練習等のため「遊び」を中止。ところが計画委員会は全校に知らせなかった。そのあと、4年生から「やりたかったのに」と指摘された。

(4) 11月5日（水）2回目の「たてわり遊び」実施（10月に延びていたものを臨時に）その日、盛り上がった時に雨になり続きを8日（土）に実施。遊ぶ内容も、要領もわかったのか、楽しかったという児童が増えた。

(5) 実施して、もっと楽しくするための方法を考えなくてはならないことに気づき、代表委員会で話し合うことにした。（具体的な改善を考えて）

2. 実施計画

児童の活動	指導上の留意点
<p>1. はじめの言葉（歌、めあて、出欠、役割分担）</p> <p>2. 議題の確認 「たてわり遊びをもっと楽しくするには、どのような工夫をしたらよいでしょうか」</p> <p>3. 提案理由の説明</p>	
<p>7月と11月と2回「たてわり遊び」をしました。楽しかったという人もたくさんいました。でも、反省や問題点も出てきました。どんなことを工夫したり、気をつけたりすると、もっと楽しくできるのかを話し合ってもらいたいと思って提案しました。</p>	
<p>4. 提案の確認</p> <p>5. 議題について</p> <p>① クラスから出された問題や工夫を発表してもらおう。</p> <p>② 出てきたものの中からどのようなことが、実行できるか話し合う。</p> <p>6. 決まったことの発表</p> <p>7. 委員会や学級からのお知らせやお願い</p> <p>8. 先生から</p> <p>9. おわりの言葉（めあての反省、次の議題について）</p>	<ul style="list-style-type: none"> • たてわり遊びをすることが、なぜ大切であるかを再認識させる。 • 全校児童に対する思いやりが芽ばえるようにさせる。 • 話し合いを焦点化するための資料を提示させる。 • 予想される話し合い <ul style="list-style-type: none"> ☆ 遊び場所 ☆ 遊びの内容 ☆ 班長の態度 ☆ 自分達の態度 ☆ 時間 • ノートの書記に簡単に発表させる。 • 時間がない時には、メモを出してもらい、直接ニュースにのせる。 • 指導者2人の教師で話すことを分担しておく。（進行、発言、内容、ねらい、等） • 進行上、努力した点などを賞賛するようにさせる。

3. 実践力の芽生えと考えられる児童の発言 — 授業記録から —

(1) 活動の形態の工夫を促す発言

C₁ 1つの班の人数が少ないときには、いくつかのグループが合同で遊べばよいと思います。
私たちの班は3人しかいないので、この前も合同でやってよかったです。

(2) 約束の提起

C₂ 時間をもっと長く取ってほしいという意見がありましたが、時間を長くするのではなく、カバンをおいたらすぐにどこに集まるのかをはっきりさせておけばよいと思います。

C₃ 時間を長くという意見がありましたが、時間はのばせないなので、登校中に遊びを決めておけば、遊ぶ時間も長くなると思います。

(3) 約束の想起

C₄ 体育館でやることについてですが、先生の目が届くところでやるということになっているから、朝は先生方が職員会議で体育館に来れないし、もしやったとしても事故でもあったら大変だから体育館はやめた方がいいです。

C₅ クラスの人だけでないし、先生のいないところや教室はあぶないのでやめた方がよいと思います。

4. 事後の活動

活動した日	活動の様子, 児童の反応, 先生方の様子
11月29日(土) 4回目	<ul style="list-style-type: none"> • もりあがった代表委員会のすぐあとだったので、代表委員のクラスの人への呼びかけがよかった。特に、6年の班長へは徹底したようだった。その結果、前回よりも、事前に遊びを決めて来る班長が多くなった。 • 計画委員会の準備に工夫がみられた。 <ul style="list-style-type: none"> ①「今日はたてわり遊びです」の表示を門のところにした。 ②みんなが来る前に、遊ぶ場所のポールを立てた。 ③放送で呼びかけた。 その結果、遊んでいる時間が長かったと感想を持つ子が多かった。 • 6年のクラスで調理実習の準備があり、班の人数の少ないところは、遊ぶ人数にならず、遊べなくなってしまった子も出た。 • 打ち合わせが短かったので先生方も外に出て来た。
12月13日(土) 5回目	<ul style="list-style-type: none"> • 計画するのに、担当教師のフォローが少なくなった。 • 6年の調理実習の時だったが、連絡し、他の班と合同でやっているのがみられた。 • 「やる前の予想に反して、楽しかった」という声が高学年からも出るようになった。 • 6年生でも思いきって楽しめるたてわりにしたいと反省に出してきた。

<p>1月10日(土) 6回目</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○集まる場所のボールの指示を待たずに集合する様子がみられた。 ○看護当番の先生が「たてわり遊び」であることを朝の放送の時に呼びかけてくれるようになった。また、日誌の中にも、たてわり遊びだったので、朝休みはみんなよく外に出ているが、中休みは残っている子もいた、などの記録もみられるようになった。
-------------------------	---

5. 考察


遊びは、本来自然発生的なものである。おにごっこで柵に登ろうが、木にぶらさがろうと、注意を受けないのが、子どもたちが喜ぶ遊びであろう。

しかし、集団生活を主とする学校では、いくつものきまりの中で生活しているのが現状である。したがって、学校で扱う遊びは、遊びの種類をふやしてやることであり、人間関係を育てることである。本議題は、これを実証するひとつのこころみである。

自分たちの生活をよりよくしようと取り組んだけれど、事後の活動にもみられるように、楽しいと反応している児童、自由にならないからつまらないと思う児童とに分かれているようだ。しかし、6年のクラス代表が2学期の反省に出しているように、不満に終わらせずに、更によりよくしようとしている。これは、この活動にまじめに取り組み豊かな成就感を味わえたからでこの芽生えこそを、我々教師がいかに、育てていくかが大事なことだと思う。

〈児童会コーナー 3〉

ちよっと待って。 その年間計画!!



きみ達 その計画を全部やるとすれば、
今年は一休何回代表委員会を開くこと
になると思う?
当然クラスからの提案もあるだろうし、委員会
もあるよ。分担も反省も考えておかないとね。
集会ばかりをきみ達考えているみたいだけど
困ってることや、もっと良くしたいことも、議題にし
方がいいんじゃない?
学校がもっとよくなるように、今年は一休り取り
組むよ……ね。

(O)

わたしたちの代表委員会の
2年間活動計画

1学期

- 4月 1年生を迎える会を計画しよう
- 5月 子ども祭りの計画をしよう
- 6月 雨の日の遊びをしよう
- 7月 セツ集会をしよう

2学期

- 9月 運動会のスローガンを決めよう
- 10月 スポーツ集会をしよう
- 11月 きん労感謝集会をしよう
- 12月 冬休みの過ごし方を話し合おう

3学期

- 1月 お正月遊びをしよう
- 2月 6年生をきりかえよう
- 3月 1年間のまとめをしよう

Ⅲ. 月例研の協議から

1. 人間関係を作るには

昨今マスコミなどをにぎわし話題になっている“いじめ”の問題、これは子どもたちの人間関係のゆがみが大きな原因の一つといえるであろう。本来、子どもたちが遊びの中で培うべき人間関係、人間同士のふれあいが、現代の子どもたちには欠け、また、それを培う遊びが見られない。ひと昔前であれば、上級生、下級生が下校後、ともに遊び、知らず知らずのうちに、ガキ大将を中心とした「縦社会」というものが形成されていた。その中で、子どもたちは、友だち同士のぶつかり合いを経験しながら、人間関係というものを学んでいった。また、家庭においても、兄弟関係の中で縦社会の上下関係を学んでいった。

現代の子どもたちは、遊ぶ時はほとんど同学年の子どもたち、それも一部の限られた子どもたちというせばめられた人間関係が多い。それどころか、子どもたちの熱中しているファミコンゲームなどに至っては、一切の人間関係を必要とせず、独りだけの閉鎖された世界に浸ってしまうこともある。

そんな現代の子どもたちが少しでも“ふれあいの持てる場”が学校生活である。特にその中でも、特別活動は他の活動と比べて、そのふれあいの場が多くあるといえよう。子どもたちの自分たちで学校生活をより楽しくしよう、より豊かなものにしようという動機に支えられている児童会活動は、現代の乾いているともいえる子どもたちの人間的なふれあいの中で重要な意義がある。もちろん、人間関係を育もうとする営みの全てを子どもたちに課すことはできない。

しかし、子どもたち自身に問題意識を持たせ、自分たち自身で人間関係を豊かにしていく場を与えることは、上記の意味で現代の子どもたちにとって、特に大切であると考えられる。

T区K校の「全校の友だちともっと仲良くなるにはどうしたらよいだらう」という代表委員会の議題は、議題そのものが直接自分たちで人間関係を深めさせることをねらっているといえる。教師からの一方的な指導や押しつけでなく、子どもたち自身で考え、解決を図ろうという姿勢が、真の意味で「友だちと仲良くすること」即ち、人間関係の大切さを学ばせることを可能にするのではないか。また、上級生が下級生をいじめるというような問題の本質的な解決は、罰や監視などによるのではなく、特別活動などで設定された場での上級生と下級生とのふれあいを通して、相互理解させていくことが必要である。

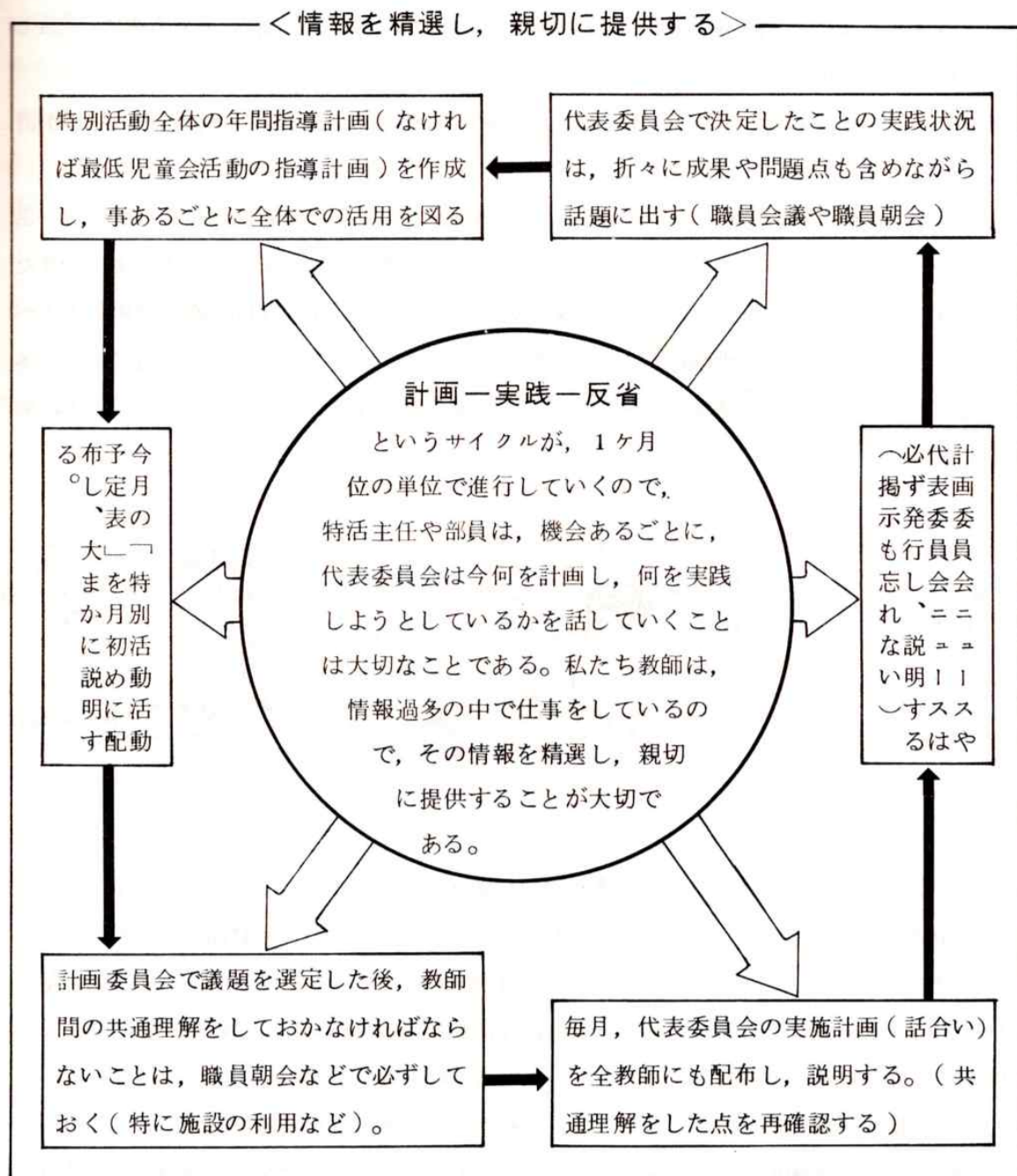
「為すことによって学ぶ」を指導原理とする特別活動では、人間同士のふれあいの大切さは、単に、知的理解にとどまるべきでなく、実際に行為として体験させていく。子どもたちが人間関係の大切さに気づき、そして実践し体験を通して深めていくのが望ましい。

以上のように、特別活動は、子どもたちの人間関係を深め、育てていく大切な場であるが、指導者側がその指導原理を充分見すえて指導をしていく必要がある。

2. 教師集団の共通理解の大切さ

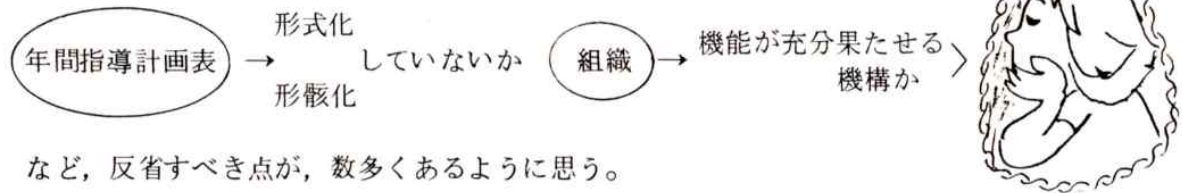
特別活動の中でも、特に児童会活動は教師集団の共通理解が大切である。このことはいつの年も、いつの時も言われてきた。今年度の研究授業でも言われた。それは、児童会活動は常に全校的な規模で実践するところに特徴があるからである。共通理解なくしては指導あるいは実践はありえないからである。

そこで問題となるのは、どのような共通理解が望ましいのか、どのようにして共通理解を図っていくのかということである。今年度の研究授業で協議された中から、そして毎月持ち寄った実践報告の中から、共通理解の望ましい図り方をまとめてみたい。



3. 責任ある許容性 — 真の自主性を育てるために —

私達教師は、子どもの自主的・自治的な活動を促す指導をするために、あれこれと悩みながら、特別活動の指導をしている。ところが、この『指導』が真に子どもの自主的・自発的な活動を促すことになっているのか、もう一度立ち止まって考えてみたい。例えば



など、反省すべき点が、数多くあるように思う。

例えば、代表委員会の話合いの時、子ども達が議題をきちんと把握していなかったり、まだ、その日何を話し合うのか、連絡が届いていなかったりすることもある。それなのに、「話し合う意欲がないのではないかと、勝手に決めつけてはいないだろうか。

議題も、指導計画が先行し、子どもの話し合いたいものが後回しにされたり、いつのまにか消えてしまったりしてはいないだろうか。

また、集会を行う場合でも、「みんなと一緒に遊びたいんだ」「みんな一緒だったから、あの集会は あんなに楽しかったじゃないか」というような先行経験があってこそ「またやりたい」という気持ちが児童から湧きあがって来るのではないだろうか。年間計画に従い「大イベント」をすることのみが 積極的、活発な活動であると思いがちであるが、子どもの中に「本当に楽しかった！」という気持ちがあるかどうかも見きわめなければいけないと思う。子ども達に



というような考えを、いつのまにか持たせてしまっている指導のいたらなさであるが、なぜ校庭で中休みにサッカーをしてはいけないのか、サッカーをするのに体育館を使うためには、どんな方法をとればいいのか、どういう働きかけをすればいいのか、など もっと考え、悩みあい、ぶつかりあってこそ真の自発的・自治的な活動が生み出されるのではないかと考える。あまりにも性急に物事を処理しようとして、子ども達の自発性を摘みとってしまっているのではないかと。指導者がもう一步後に下がって、“待つ”ことをしなければならないのではないかと。そして あらゆる意味で『許せる範囲』を検討し直したいと思う。そういう指導者の「責任ある許容性」こそ大切ではなかろうか。

4. 実践力とはなんだろう

(1) 実践力の裏付けとしての必要感

「実践力とはなんだろう」という課題で、研究会で話し合いを持った。多分に感覚的な表現であるが、「子どものやりぬく力」「子どもが生き生きとした表情で活動すること」といった発言が多く飛び交った。日常の実践を前提にしたこれらの表現の中には、「子どものエネルギー」の強さを意味している響きが多く見られた。考えてみると、このことは、「実践力」を考える上で、示唆に富む。「子どものエネルギー」は何に由来しているかということである。

「全校のみんながもっと仲良くなるにはどうしたらよいか」について、エネルギーを発揮するには、「仲良くして楽しかった」「あんなことができて良かった」という経験の裏付けが必要であった。「たてわり遊びをもっと楽しくするためにはどうするか」について、エネルギーを発揮するには、「たてわり遊びの楽しさ体験」を前提とする。このように考えてくると、児童の実践力の裏付けになるのは、「このままでは、あの楽しさを再び味わえない」という必要感に他ならない。実践力を育てる上で一つ留意すべき点であろう。

(2) 実践力の裏付けとしての信頼感

「みんなで使う所・遊ぶ所に名前をつけよう」で、児童が意欲をもやしたのは、「先生方がぼくたちにまかしてくれている、信じられている」という喜びに由来している。自分たちの活動で新しいものを創造できる喜び、しかもそれをまかせられた喜びがある時、児童は限りなくやさしくなった。ここは低学年にやらせてあげようという風にある。活動の動機を認め、活動の過程で認め、その結果を認め賞揚してあげたことで、大きく実践への意欲をのばしたのではなかろうか。実践力を育てる上で留意すべき二つめの点であろう。

(3) 実践力の裏付けとしての基礎・基本

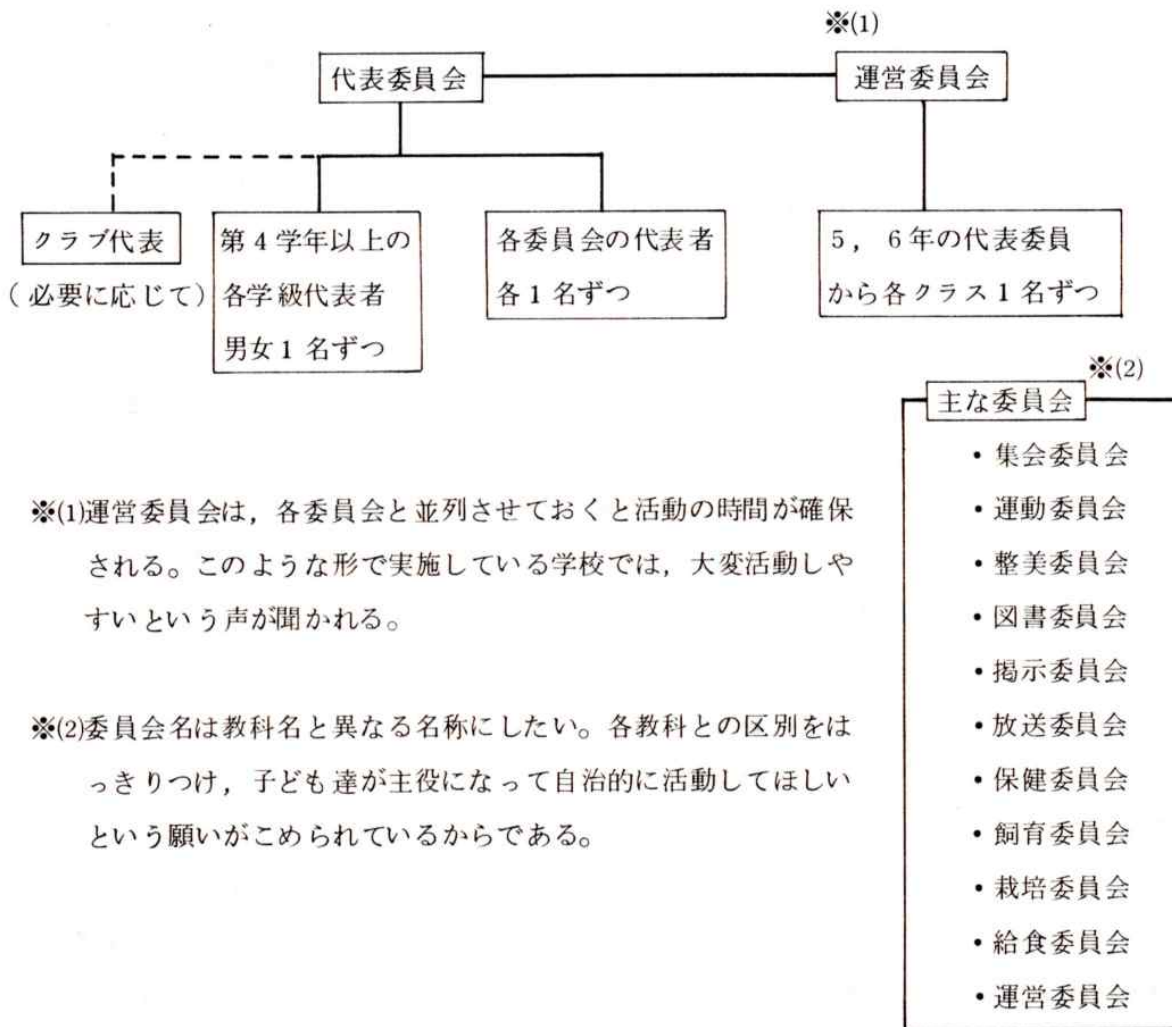
児童の自発的、自治的活動を特質とするが、まったくの白紙でその活動が生まれるわけではない。委員会活動の活動の仕方・集会活動の準備の仕方・集会自体の進め方についてのごく基本的な事柄についての理解は、どこかで与えられていなければならない。ただ、その理解も、長い目で見た失敗の体験を大切にしながら図られることが、実践力の育成をねらう際の留意すべき三つめの点であろう。

(4) 実践力の裏付けとして活動の見通し

児童が意欲的に活動できるためには、全体としての活動の見通しが大切であろう。いつ、だが、どこで、何をするのか明らかになっていることが必要である。その見通しを、児童と担当教師とが一緒に作り、一人一人の児童の中に「自分は役立っている」という実感を育くませるようにしたい。四つめの留意点であろう。

VI. 資料

— 代表委員会の組織 1 — (A校の例)

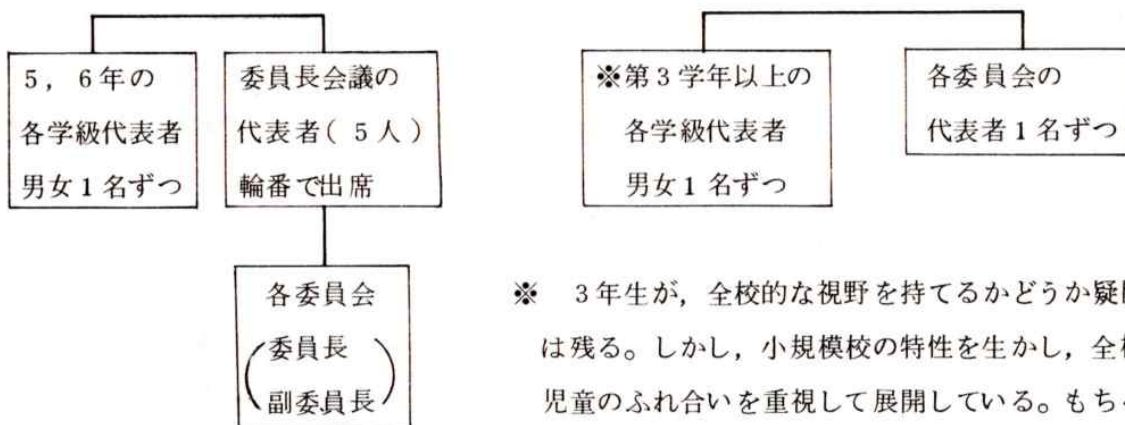


※(1)運営委員会は、各委員会と並列させておくと活動の時間が確保される。このような形で実施している学校では、大変活動しやすいという声が聞かれる。

※(2)委員会名は教科名と異なる名称にしたい。各教科との区別をはっきりつけ、子ども達が主役になって自治的に活動してほしいという願いがこめられているからである。

— 代表委員会の組織 2 — (H校の例) — 代表委員会の組織 3 — (K校の例)

H校は大規模校である。(36学級)



※ 3年生が、全校的な視野を持てるかどうか疑問は残る。しかし、小規模校の特性を生かし、全校児童のふれ合いを重視して展開している。もちろん、高学年の児童の温かい支えがあることはいままでもない。

V. 研究の成果と今後の課題

児童会活動研究部では、研究主題に迫るために授業研究をふまえて研究をすすめてきた。第二年度の研究成果として、次のようなことが挙げられる。

1. 研究の成果

(1) 自発的・自治的活動を育てることの大切さを再確認できた

「生活に深くかかわる議題」を勇気をもって取り上げては来たが、その種の議題の扱いに際して留意すべきことを多く発見することができた。自発的・自治的活動の豊かな営みによって児童が心理的に解放され学校生活の楽しさをそれとして経験できないでいて、上記の議題での活動を組み入れた時には、一歩誤ると児童をむしろ管理的な雰囲気追いこむ危険性を有している。自発的・自治的活動が児童会活動の基盤であるということの重みを痛感させられたのである。

(2) 「生活に深くかかわる議題」を取り扱う上で多くの前提のあることが明らかになった

上でも、書いたように、「生活に深くかかわる議題」を扱うには慎重さが要求される。児童にとって本当に必要な課題であるか。活動が具体的で児童の活動に工夫の余地はあるか。といった諸条件をきちんと押さえておくべきであろう。児童会活動の特質をふまえた限界をしっかりと認識しておかねばならない。

(3) 教師の共通理解の大切さを再確認できた

今、代表委員会が何をやろうとしているかは、児童たちにもみ周知されるものではなく、教師集団にも知られることが大切である。全校規模の活動を本質的な性格とする児童会活動であるからこそ、そのことが必要である。

(4) 「実践力」が少しずつ見えてきた

各校での悩みや実践を交換しあう中で、「実践力」とは何か少しずつ明らかになってきたように思える。もちろん、まだ理論的に整理されたわけではないが、具体的な実践を通して、「ああ、子どもたちは力がのびたなあ」という実感の中に「実践力」の内容が含まれていると痛感させられたのである。

2. 今後の課題

上で記した成果それ自体、完結したものではないという意味でこのこと自身をより深く追求していくことは、今後の課題と言える。まず、より豊かな自発的・自治的活動のあり方を再度探っていくこと、「生活に深くかかわる議題」を取り上げる際にも「安易な取り上げ」にならないための前提条件を、より明らかにしていくことが、今後に残された課題である。

ご指導・ご助言いただいた諸先生方に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

Ⅲ クラブ活動

テーマ 「自発的・自治的活動を高めるクラブ活動のあり方」

○ 研究の経過および研究者・執筆者名簿	52
I. まえがき	53
1. 研究主題について	
2. 研究の進め方	
II. 研究内容	54
1. クラブ活動の実態	
(1) クラブの種類	54
(2) クラブ内の異学年集団構成について	55
(3) クラブ設置・選択指導における配慮	56
2. 各クラブのもつ特色	
(1) 運動系と文化系	57
(2) 活動形態に現れる特色と分類	57
(3) 特色を生かす集団構成と活動	58
III. 事例	59
1. R小の実践事例より（入部，選択指導について）	59
2. 各クラブ別の活動事例（10例）	62
• バレーボールクラブ • サッカークラブ • ゲートボールクラブ	
• 体操クラブ • 卓球クラブ • 演劇クラブ • 科学クラブ	
• 調理クラブ • 将棋クラブ • マンガクラブ	
IV. まとめと今後の課題	72

○ 研究の経過

- 61.5.27(火) 定期総会, 分科会, 組織作り
 61.6.17(火) 研究テーマの確認, 研究計画の検討
 61.7.8(火) 研究計画の決定, 実態調査計画の検討, 各校実態報告
 61.9.9(火) 研究方法(集団構成について)の検討, 各校実態報告
 61.10.30(木) クラブ参観(墨田区立両国小学校) 講師 小野 真澄先生
 61.11.25(火) 特色に応じた活動事例についての検討
 61.12.11(木) 研究集録プロット作成, 執筆者の決定
 62.1.19(月) 研究集録内容の検討, 研究発表の準備
 62.2.12(木) 研究発表の準備
 62.2.27(金) 研究発表会

研究・執筆者名簿

部長	塚越 正昭	墨田・両国小	二木 康夫	世田谷・山野小
副部長	宇田川 稔	世田谷・船橋小	後藤 郁子	世田谷・三宿小
〃	長田 信彦	板橋・中板橋小	千代谷七枝	世田谷・松原小
〃	湯田 耕司	東久留米・第一小	平野 時英	世田谷・祖師谷小
庶務	菅野 靖江	台東・東泉小	日根野 光	渋谷・大和田小
(発表)	浅木 麻人	江戸川・南葛西二小	二杉美知枝	北・浮間小
会計	佐藤伊都子	墨田・両国小	前部長 後藤 治司	荒川・第二端光小
	原田規己子	千代田・千桜小	(発表) 西田 菊佳	荒川・第三日暮里小
	寺崎 一子	中央・豊海小	池田 恭一	荒川・第三端光小
(発表)	中村 一久	中央・有馬小	桃井多美子	練馬・大泉学園緑小
	梅木 栄子	新宿・落合一小	柴山 守	足立・綾瀬小
	藤田 研治	文京・駕籠町小	保科このみ	足立・宮城小
	千原ゆう子	台東・待乳山小	長峰美枝子	八王子・片倉台小
元部長	関口 照治	墨田・業平小	奈良 共康	武蔵野・第一小
	浅井 良久	品川・戸越小	土屋 徳松	町田・南第二小
	小倉富美子	品川・小山小	秋池千恵子	小平・第十小
	樋田 典子	目黒・向原小	澤畑喜美恵	東村山・東萩山小
	金武 素子	目黒・宮前小	大垣 花子	清瀬・第九小
(記録)	須藤久美子	大田・池雪小	木内 悦雄	多摩・西永山小

1. まえがき

1. 研究主題について

クラブ活動は、児童活動の特質である「自発的・自治的活動」を実践する重要な場である。

異学年の児童で構成されているクラブ活動では、各自の能力や特性を十分発揮しながら、伸び伸びと展開されなければならない。

クラブ活動は、異学年集団の中において、共通の興味、関心を追求しながら、自主性・社会性を養い個性の伸長を図ることを目標にしている。

しかし、活動の目標は、「自発性・自治性を高める」と掲げながら、児童の興味関心の追求が効果的に進められなかったり、実施計画などを立てる段階で、児童の考えを尊重せず、教師が中心に作りあげてしまう。また、集団活動を活かすことなく、技術向上のみに専念するクラブが見られる。

また、教師が、児童の自発的・自治的活動を伸ばすことの大切さに気づいていないのではないだろうか。

そこで、私たちは「児童の自発的・自治的活動を高めるクラブ活動の在り方」を追求することにより、児童自身が進んで活動に取り組み、クラブ活動が活発化すると考え、この主題を設定した。

2. 研究の進め方

私たちは、児童の「自発的・自治的活動を高めるクラブ活動の在り方」について、研究を進めるにあたって、次の8つの視点から、この問題に迫れると考えた。

- | | | | | |
|-------------------|--------------|-------|-------|-----------|
| 1. 組織作り | 2. 実施計画 | 3. 予算 | 4. 評価 | 5. 指導力の育成 |
| 6. 人間関係（異学年集団）の育成 | 7. 教師の指導のあり方 | | | |
| 8. 教師の助言の在り方 | | | | |

以上の事項を、継続研究として進めていきたいと考えている。

そこで、1学期は、主に「クラブ活動における、自発性・自治性を高める要素とは何か」について、各地区、各幹事校の実態調査をもとにクラブ活動内容、形態を分析し、その特色に応じたグループ作りと活動方法などを検討した。

2学期は、1学期の実態を分析し、さらに、都内各幹事校からのクラブの実態をアンケートで集め分析した。そして、実際に墨田区立両国小学校のクラブ見学を通して、研究を深めた。クラブ活動部会は、常に実践に裏づけされた理論の上にたち、さらに実践を重ねて研究を進めた。

Ⅱ. 研究内容

クラブ活動についての質問紙を使った実態調査は、毎年度春各幹事校に依頼して実施してきたが、継続して調査を行うことにより、その年度ごとのクラブ活動の様子を把握することができた。

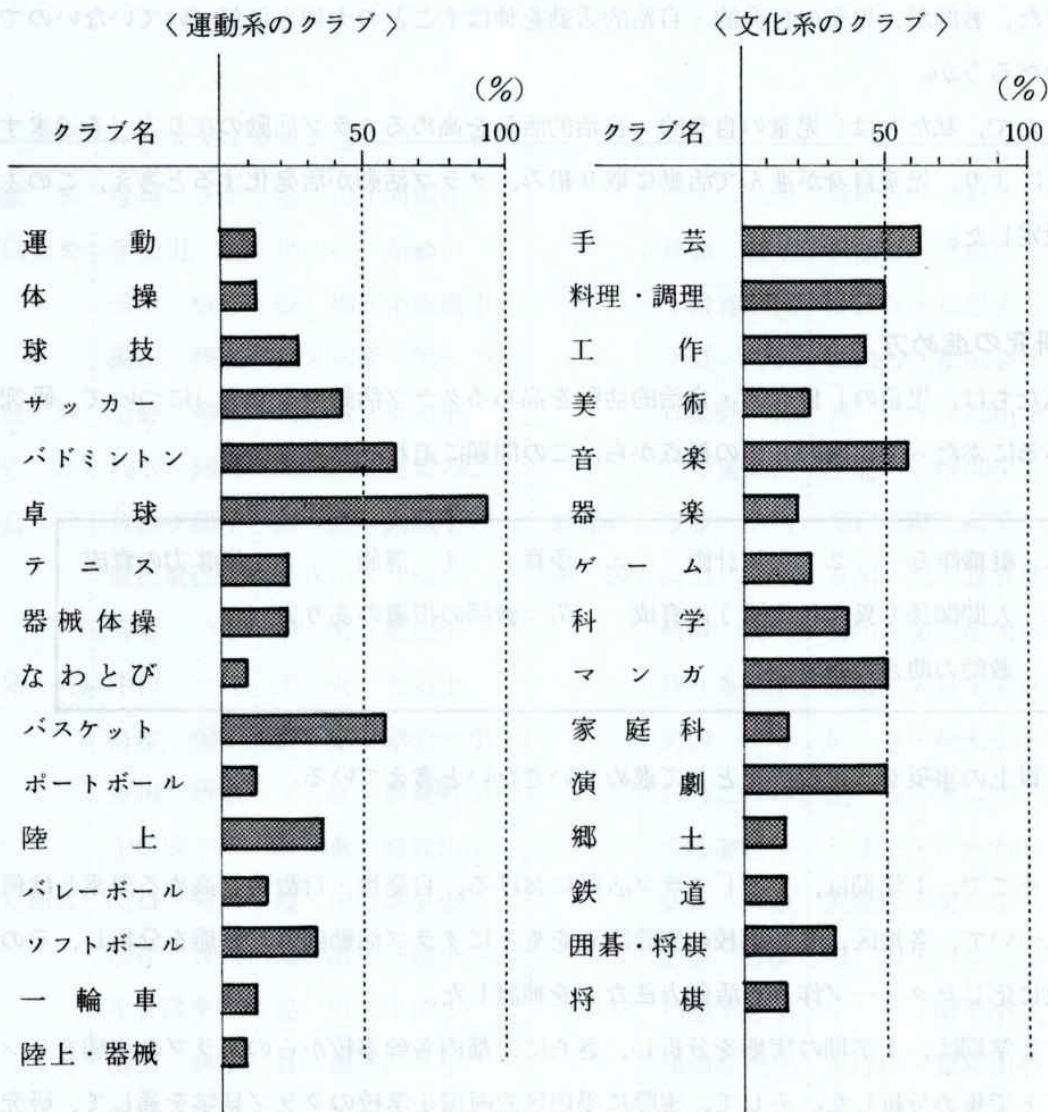
本年度は、特に、クラブ活動を設置（所属決定を含む）する際の問題点や、配慮事項等を中心に置き、調査研究を進めてきた。

1. クラブの種類

クラブ活動では、児童の自発的・自治的活動を高めるために、児童一人一人の活動に対する意欲が大切である。そのためには、児童が希望しているクラブを設置することや、また希望したクラブに所属できることが意欲を高める上からも必要になってくる。

(1) クラブの種類

昭和59年度に、クラブの種類（設置クラブの名称）についての調査を実施した結果が、つぎの表である。グラフについては、その設置率を表したものである。



また、出現率が低いためにこのグラフには表れないが、次のようなクラブを設置している学校もある。

〈運動系クラブ〉……体育・ラインサッカー・テニソン・器械・剣道・校庭スポーツ・バトンダンス・バトン・ジョギング・自転車・ダンス・創作ダンス・体育館スポーツ・体操水泳・インディアカ

〈文化系クラブ〉……手芸料理・図工・図工おもちゃ・油絵・絵画・合唱・鼓笛・遊びゲーム・科学工作・おもちゃ工作・マンガ将棋・テレビ・アニメーション・VTR・ホーム・合奏・器楽合奏・書き方・習字・発明・実験・歴史・読書・文芸・絵本作り・模型・工芸・理科・伝承あそび・けん玉・将棋ゲーム・ミシン・アンサンブル・パソコン・放送・つり・野鳥・乗り物・動くおもちゃ・英会話・リコーダー（アンサンブル）・地図鉄道・机上旅行・紙しばい・美術マンガ・手話・民舞・ねん土造形・工芸・美術工作・紙ひも・歴史社会・小さな劇場・科学実験・自然観察・やきものねん土・ゲーム手品

設置クラブの名称に、教科的色彩の濃いものはいくつかみられるが、活動内容が児童の創意工夫によって作り出されていることから、名称そのものは、クラブ活動のねらいを考え、変更していかなければならないものである。

運動系・文化系のクラブとも、2種類の活動内容を一つにまとめてクラブとして設置しているものが見られる。運動系のクラブでは、校庭・体育館の広さの問題や、活動の際に使用する設備や用具の点で合同クラブを作り、文化系のクラブでは、所属希望の児童が少ないために、活動内容の似ているクラブを合わせ、所属人数を確保しているものと考えられる。

(2) クラブ内の異学年集団構成について

本年度実施のアンケート調査から、クラブ設置の際の定員や、クラブ内の学年構成、異学年集団構成の方法に焦点を絞り、研究してきた。

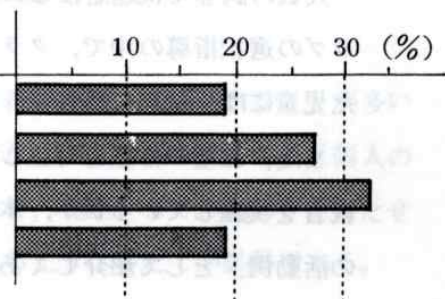
調査月6月、調査回答校40校、児童数平均556.1人、学級数平均16.3クラス、設置クラブ数平均12.8クラブ、年間実施回数平均29回、1回の活動時間平均52分であった。

① 各クラブにおける、所属定員について

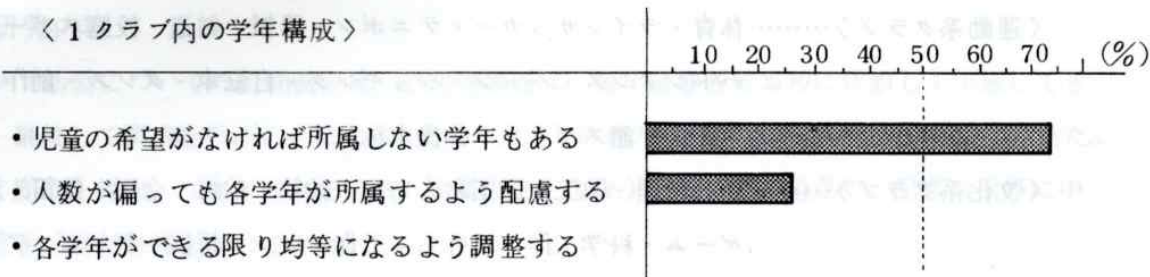
各クラブの所属児童数に、定員を設けている学校が50%、定員を設けていない学校が47.5%、無答が2.5%であった。

〈児童数の配分の方法〉

- 6年生から希望を優先（所属できない学年がある）
- 6年生から希望を優先、残りを4・5年に割り振る
- 希望調査の結果により、各学年の定員を決めておく
- その他



〈1 クラブ内の学年構成〉



- ・児童の希望がなければ所属しない学年もある
- ・人数が偏っても各学年が所属するよう配慮する
- ・各学年ができる限り均等になるよう調整する

各クラブに定員を設けていない学校が約半数みられたが、児童の希望が異なった場合には、人数の調整をしている学校が多い。また、児童数の配分方法では、6年生優先の考え方が約半数を占めており、クラブ活動の特質でもある異学年による構成で実施できないことも考えられる。

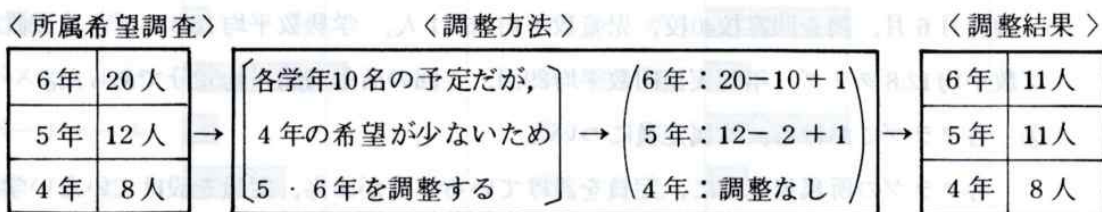
① 活動を高めるために年間の指導計画として実施しているもの

- ・クラブ見学…… 90% ・クラブ発表会…… 90% ・体験入部…… 7.5%
- ・クラブ長会…… 22.5% ・学級指導(入部・選択)…… 75%

クラブ長会は、リーダーを育成していくためにもぜひ実施していきたい。また、クラブを選択するための学級指導も、児童の活動への意欲に直接結びつくものなので指導が必要である。

(3) クラブ設置・選択指導における配慮

異学年の集団を組織し、民主的な話し合いにより自発的に活動を進めていくことは、個々の児童の自主性や社会性を養い、個性の伸長を図る上で、よい機会である。このことから、クラブを組織する場合には、1クラブの中に、4～6年生がすべて所属していることが望ましいと考えられる。そこで問題となるのが、クラブ選択時における児童の所属希望の偏りである。どのクラブも、施設設備や活動上の問題から人数に制限を持つことになるが、所属児童の人数調整の方法は、6年生優先ではなく、どの学年もできるかぎり均等になるように考慮しなければならない。下は、定員30人のクラブの人数調整の例である。



※定員数・調整方法は、あらかじめ児童に知らせる。

人数の調整で問題となるのは、希望の通らなかった児童の活動への意欲の点である。クラブの選択指導の中で、クラブのねらいを十分に理解させるとともに、希望の通らなかった児童には、個別に話し合い、納得させ意欲の向上を図りたい。

また、児童の希望を尊重し、所属希望人数の調整を最少限にするために、複数クラブの統合を実施している例が、本誌59ページに「R小の活動例」、前回集録(22集)に「M小の活動例」として紹介してある。

2. 各クラブのもつ特色

(1) 運動系と文化系

クラブには、同様の異学年集団で構成されていてもそれぞれ特色がある。それを生み出す要素には次のようなことが考えられる。

- 学年構成
- 所属人数
- 歴史・伝統
- 種類

これらの中で特に顕著に特色が現われるのは種類によってである。種類は大きく、⑦ 運動系 ⑧ 文化系に分けられる。

⑦ 運動系のクラブは児童の人気が高く、部員数の多いものもあるが、施設の関係から希望者の調整などで苦勞することもある。しかし、活動の内容は、はっきりしており実施計画はたてやすい。

⑧ 文化系のクラブは、最近の児童の興味・関心が多様化している傾向を反映して、様々な種類のものが設置されている。そのためクラブの新設・廃止で苦勞することがある。小人数編成のものも多く、内容も趣味・教養的なもののほかに、ゲーム・イラスト・マンガなど娯楽的なものも増えている。

(2) 活動形態に現われる特色と分類

種類によって現われる特色を活動形態という視点から分類してみると、(ア) 集団活動を主体としたものと(イ) 個人活動を主体とした活動に分けられる。それを運動系・文化系にあてはめてみる。

	集団活動を主体としたクラブ	個人活動を主体としたクラブ	(ア) 集団活動を主体としたクラブ
運動系	バスケットボール, サッカー ソフトボール, バトン ドッチボール, バレーボール	卓球, バドミントン 陸上, 体操 テニス	はチームなどの小集団で活動することが多い。そのためグループが高まった時、児童にとって自分の高まりとして受けとめられ
文化系	音楽, 演劇 ゲーム	手芸, 料理, 科学 イラスト, 囲碁, 将棋 美術, 書道, 読書	意欲的に参加できることがある。しかし、個人の技術、体力、能力が活動方法に影響するので、構成員の個性を生かせる活動内容を考えなければならない。

意欲的に参加できることがある。しかし、個人の技術、体力、能力が活動方法に影響するので、構成員の個性を生かせる活動内容を考えなければならない。

(イ) 個人活動を主体としたクラブは、個人が各々の目標にむかって活動することが多いので、集団としての関わりが希薄になり活動が不活発になりがちである。しかし、個人の技能に応じた活動ができるので充実感が得やすい。そこで、集団としての関わりを持たせることで個人の高まりと集団の高まりがしたと感じられるような手だてが必要である。

(3) 特色を生かす集団構成と活動

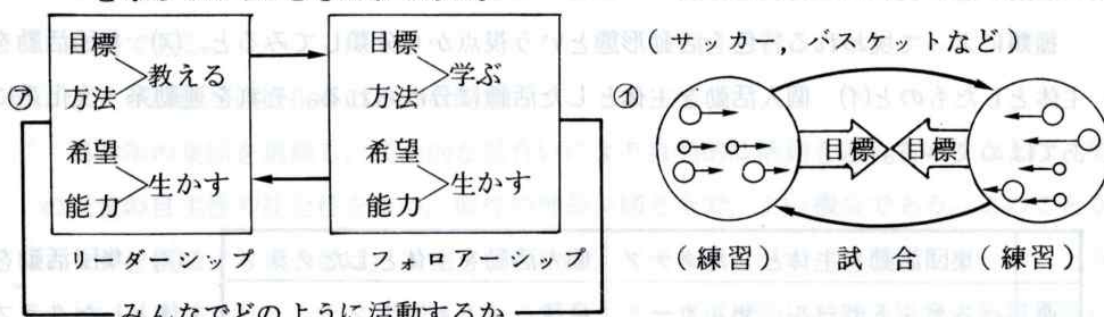
集団を構成する場合は、児童相互が教え合い、助け合えることを条件として押さえておかなければならない。したがって学年や能力差だけによる集団構成は避けるべきであり、そのうえで特性に応じた集団構成の方法、活動内容を考えるべきであろう。

〈特色を生かしたグループづくりの方法〉

(a) 集団活動が主体のクラブは、チームやグループ単位で活動するものが多いので、編成時、集団の中で個性、能力を生かせるよう次の点に留意するとよい。

- ① 上級生、経験の有無を考え各チーム均等に配置する。
- ② クラブ長などクラブ全体の運営に関わる児童を各グループに分散させる。
- ③ グループの成員が何かの役割が分担できるようにする。

さらに、各グループごと、あるいはグループどうしの試合、練習などの活動が考えられるが、その時、⑦上級生や経験のあるものがグループ内の他の児童と協力し合い、具体的な活動目標・方法を示すとともに下学年の希望を生かして活動できるよう指導・助言することが大切である。また④個人技能と集団技能を絡み合わせて様々な内容を考えておくことも大事である。

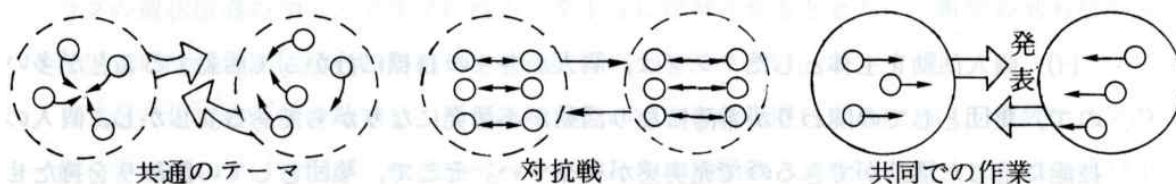


(b) 個人活動が主体のクラブは、集団としての活動が乏しくなりがちなので、より協力的な関係が育てられるよう、グループ単位の活動も考える。

- ①共通のテーマ ②対抗戦 ③共同での作業

以上のような活動が考えられるが、グループのまとまりが弱くなりがちなので個の質の高まりが、グループの高まりと感じられるよう『何を一どうするか』など作品や技能についての学年・能力差に応じた各自の目標と、グループの目標を十分検討させることが大切である。また、目標をしっかり持ち、協力的関係をつくるうえで、友人、上級生から学べる雰囲気づくりに心がけるべきである。

- ①(読書, 手芸) ②(卓球, 将棋) ③(料理, 科学)



Ⅲ. 事例

1. R小(S区)の実践事例より

R小学校は、商業地区にある全校20学級の中規模校である。狭い施設の中で児童の希望を生かしたクラブ設置と入部指導を重点に努力をしている。61年度にこれまでの方法を改善し新しい方法で取り組んだので、その概要を紹介する。

(1) 前年度(60年度)までの入部指導に関する実施要領

(a) 日程

1月29日	クラブ長会(発表会計画)	3月1日	クラブ発表会(5, 6校時)
31日	クラブ活動(発表会計画)		3, 4, 5, 6年生参加
2月7日	クラブ長会	5日	第一回希望調査
14日	クラブ見学	7日	クラブ活動(年間反省)
21日	{ (3年生)	12日	第二回希望調査
26日	クラブ長会(発表会準備)	15日	新クラブ決定
28日	クラブ活動(発表会準備)		

(b) 希望調査

第1回……既存の17クラブについて、4, 5年生は第1希望から第3希望、3年生は、希望するクラブを順位をつけずに記入する。新設希望があれば併せて記入。

第2回……5年生の第1希望を優先して定員を定め、3・4年生の割り当て人数を提示(新設クラブがあれば含めて)再度希望をとる。

(c) 所属決定

第2回希望調査をもとにクラブ活動担当者を中心に特活委員会で決定する。5年生は全員第1希望に所属できる。3・4年生も大部分は、自分の希望した3クラブのいずれかには入部できる。

(2) 61年度改善に至る問題点

- 運動クラブでは、新6年生の人数が多くなり(優先のため)集団構成上、学年の偏りが大きくなり、下学年の活動が6年生依存の傾向になっていた。
- 文化系のクラブでは、6年生が少なく、クラブによってはリーダーの存在を欠き、グループ運営が困難であった。
- 毎年新設希望をとってはいるが、既存のクラブから選択する意識が強く、児童の希望により新設に至るまでの例がなかった。
- 新6年生第1希望優先のため、6年生の活動意欲は高いが、反面自己中心的な活動になり、下学年をリードする気持のゆとり欠ける面もあった。
(6年になってやっと一番好きな事ができるので、自分が楽しみたいという気持)

(3) 61年度入部指導(改善点)

(a) 改善のねらい

- ア. 児童が既存のクラブの活動にとらわれず、自分の興味・関心を生かした選択ができるよう配慮する。
- イ. 異学年の集団活動としての条件を整えるため、4, 5, 6年生の人数に偏りが大きくなるよう集団構成を配慮する。
- ウ. 児童が、与えられた条件(環境)の中で自分の希望した活動をいかに実施していくか、実施計画を立てる必要性を理解させ実践させる。

(b) 61年度所属決定までの手順



第1回希望調査 これまでのクラブ活動の種類から離れ、学校の施設等の条件を考えに含めた上で、作れそう・作ってほしいクラブを3種以内記述させた。

第2回希望調査 表1に示した通り54種類の活動(クラブ)が第1回調査の結果出

表1 希望調査用紙 された。これを15のグループに分け、第2回希望調査を実施した。
(3, 4, 5年生を体育館にて一斉指導)
調査の前に次のことを児童に徹底した。

自分が一番はいいと思うクラブには○、二番目にはいいと思うクラブには○をつけてください。

- ①表に示したものは皆の希望したものであること。
- ②各自の希望した活動が、必ずクラブ活動として実現できるように計画したこと。
- ③調査の結果、希望の人数の多少によって表に示したグループが1つのクラブとして共に活動することがあること。
- ④グループとしてまとまった場合は、各自の希望の活動ができるよう4月の授業で工夫して実施計画を立てること。

卓球	バレーボール	新体操	器械運動	地域研究	歴史研究	古代研究	料理	伝承遊び	おり紙	手づくり	理科観察	こん虫	天体	生物研究	発明	科学
パドミントン	バスケットボール	空手	すもう	鉄道	もけい	鉄道もけい	落語	クイズ	ゲーム	手品	紙しばい	読書	習字	新聞作り	作文	文芸
なわとび	おえかき	紙わんど	マンガイラスト	絵本づくり	美術	スケッチ	油絵	合唱	オペラ	音楽	吹奏楽	管弦楽	写真	演劇	人形づくり	手芸

- ①表に示したものは皆の希望したものであること。
 - ②各自の希望した活動が、必ずクラブ活動として実現できるように計画したこと。
 - ③調査の結果、希望の人数の多少によって表に示したグループが1つのクラブとして共に活動することがあること。
 - ④グループとしてまとまった場合は、各自の希望の活動ができるよう4月の授業で工夫して実施計画を立てること。
- 例えば、学期ごとに活動内容を変える。
(グループごとに活動を変える。)

第2回希望調査は、表1の通り第1・第2希望として児童に選択をさせた。

その結果、表2の通り14のグループとしてまとめ、新クラブとして発足することになった。

表2 61年度 設置決定クラブ

クラブ	児童数	性別	名称	グループ作り
科学・天体 生物研究	19	2	エキサイティング 科学	4年と56年 混合
ふり紙・料理 伝承遊び	25	2	料伝	4,5,6年 混合
古代研究 歴史	17	1	古代歴史	調べたい内容 グループ作り
器械運動 新体操・バレエ	27	2	器械体操	種目ごと (07,11,12)
卓球 バドミントン	35	2	バツタ	4,5,6年混合
新聞の学習 紙の品・ゲーム	14	1	いろいろお楽しみ	種目ごと
すもう 空手	9	1	武道	全員
もけい 鉄道もけい	18	1	鉄道もけい	4,5,6年混合
バスケットボール ドッチボール・サッカー	86	4	バスケット ドサ	4,5,6年混合
手芸 人形づくり	13	1	手芸	活動の種類ごと
管弦楽 音楽 吹奏楽 合唱	23	2	音楽	全員いっしょ
油絵・美術 スケッチ・絵画 マンガ・イラスト	34	3	美術	活動の種類ごと
陸上 なわとび	13	1	陸上なわとび	全員いっしょ

新クラブの決定に際して次の事柄に配慮したが、予想以上にスムーズな作業であった。

- 希望活動の統合グループには、各学年の偏りがないようにする。

- グループ全体でも2, 3名という少人数の場合は、児童と直接話し合いの上、第2希望のグループを選択させる。(実際には、3名の例があった。)

(c) 61年度初期の活動(指導計画から)

ア. 指導上の留意事項(抜すい)

- 選択の意図を生かし、自己の希望した活動を続ける工夫を実施計画として組み立てさせるよう配慮する。

- 異学年の活動が有意義に進められるようクラブ内のグループ構成に配慮する。

イ. 具体的な配慮事項

- 第1回から第3回までの活動を実施計画作りの時間として設定して、計画の立て方の指導、助言を丁寧に行う。

- 第1回活動日は、全クラブを集め計画作りについてグループ作りを中心に一斉指導を行う。

- 実施計画をもとに、クラブ長会で活動場所(体育館・校庭)の調整、割り当てを行う。

- 活動の見通しを明確にさせるため年間の実施予定日と回数を明示する。

(3) 61年度活動の考察

- 自分の活動を実践する意欲が高まり、実施計画作りに真剣に取り組んだので、個々の活動に対する計画性が高まった。

- 文化系のクラブは内容別のグループ作りにより自分の希望通りの活動を満足させていたが、運動系の場合、期間を区切って複数の活動を実施したクラブには、児童の不満もあった。

- クラブによっては、グループとしてのまとめりは高まったが、クラブ全体のまとめりに欠けた。

2. 各クラブ別の活動事例

バレーボールクラブ							
4年	16名	5年	10名	6年	20名	計	46名
1. 活動内容							
<ul style="list-style-type: none"> バレーボールと、バスケットボールを、月ごとに交替して活動する。 1単位時間を60分とし、前半30分を練習、後半30分をゲームに当てる。 年間計画 							
種目	時期	1 学 期	2 学 期	3 学 期			
バレー ボール		<ul style="list-style-type: none"> ルール・ゲームの方法の理解 	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な攻撃の型練習 	<ul style="list-style-type: none"> 模擬試合を通していろいろな技の研究 			
バスケット ボール		<ul style="list-style-type: none"> 基本練習(パス・レシーブ・サーブ) 	<ul style="list-style-type: none"> 攻めと守りの方法を研究 	<ul style="list-style-type: none"> 送別試合 			
2. グループの形態							
<ul style="list-style-type: none"> 男女・学年の混合がほぼ均等になるようにして、4グループに編成する。 但し、このグループは基本的なグループで、練習などはこのグループで行うが、ゲームの時には、男女別グループ編成など、流動的にとり入れる。 							
3. 活動の様子							
(1) グループでの活動内容							
<ul style="list-style-type: none"> キャプテンを中心にして、各々の基本練習を行う。 グループ内で技術的に巧みな者が示範しながら、練習に励む。 11～12名のグループを、目的に合わせてチーム編成をして練習する。 (例)バスケットボールの攻めと守り練習……攻め5名・守り5名・審判1名 バレーボールのレシーブ練習……サーブ4名、レシーブ7名 							
(2) 役割分担の様子							
<ul style="list-style-type: none"> グループごとに次の係を決め、月ごとに交替する。 <ul style="list-style-type: none"> 準備体操 用具 記録 係グループには異学年混合で編成し、3つの係をローテーションする。 <ul style="list-style-type: none"> ①準備体操→用具→記録 ②用具→記録→準備体操 ③記録→準備体操→用具 キャプテンは全体のリーダーとして各種指示を行い、グループをまとめる。 							

留意事項

- クラブ名は、できるだけ児童の創意を大切に、つけるようにする。
- 技術を伴うために常に異学年混合グループを作り、上級生と下級生との連携を考える。

サ ッ カ ー ク ラ ブ

4 年 16 名 5 年 14 名 6 年 17 名 計 47 名

1. 活動内容

- 全体を4つのグループに分け、2つのグループがゲームに、2つのグループが練習にまわる。また、ゲームの審判者2名は、練習グループの中から出す。
- 原則として、前半20分、移動5分、後半20分とし、前半と後半で活動を交替する。雨天の時には、教室にて基礎体力をつける各種の運動を行う。
- 年間計画

1 学 期	2 学 期	3 学 期
<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームの方法と主なルールの理解 ・ラインサッカーを通して、基本技の練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・トラッピングやパスワークの練習 ・攻撃・守備形態の練習 ・サッカーのゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> ・シュート、キーパーの防御練習 ・8つのチームに分けてトーナメント戦

2. グループの形態

- 4年、5年、6年がどのグループにも同じように入るようにして、4グループに編成する。
- 3学期には、この4つのグループを更に2グループずつに分け、計8グループ編成にして、トーナメント戦を実施する。
- 各学期の最後の活動日には、学年内を2チームに分け、学年別に対抗戦を実施する。

3. 活動の様子

(1) グループでの活動内容

- 6年生をキャプテンとして、活動内容や方法について話し合い、活動に入る。
- 基本練習の時には、グループを2～3名ずつに細分化し、ボールを出す人、受ける人、コーチに分かれて練習をする。

(2) 役割分担の様子

- 各グループごとに準備係として6名をおき、準備体操から用具の出し入れ、活動内容の伝達などを行う。また、その交代は月ごととする。
- ゲーム時のキーパー、審判、ディフェンス・オフenseなどのポジションは、公平に当たるように輪番制をとる。但し、キーパー、審判については、二学期までは、熟知した者、あるいは上級生で分担してもよい。

留意事項

- ・コート大きさ、練習方法など、使用できる広さに合わせた創意工夫をする。

ゲートボールクラブ

4年 8名 5年 10名 6年 8名 計26名

1. 活動内容

- 一単位時間を原則として、45分とし、活動を次のように配分する。

①	10分	本時の活動計画
②	30分	ゲーム
③	5分	ゲームの反省

→雨天の場合は廊下で個人レッスン

- 年間計画

1 学 期	2 学 期	3 学 期
<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームの方法やルールについて研究する。 近所のゲートボールクラブの人の話をきいたり、ゲームを見学する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームに慣れる 友だちのプレーを見ながら、自分のプレーを研究したり、アドバイスを与える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・親善試合をする チームの組み合わせを変えて 近所のゲートボールクラブのチームと

2. グループの形態

- 15×20mのコートを2面とり、次のような構成でグループを編成する。

		4年	5年	6年	計			4年	5年	6年	計
Aコート	A	2名	3名	2名	7名	Bコート	A	2名	2名	2名	6名
	B	2名	3名	2名	7名		B	2名	2名	2名	6名

- このグループは、学期ごとに抽選を行い、編成替えをする。

3. 活動の様子

(1) グループでの活動内容

- グループ内で熟知した者をコーチとして、アドバイスを受けたり、友だちと見せ合いながら、一人一人の技を磨くようにする。

(2) 役割分担の様子

- ゼッケン番号により、各号の役割分担をする。

Aチーム・奇数番号 Bチーム・偶数番号

{ 1・2(4名)キャプテン 3・4・5・6(8名)コートの準備
 7・8・9・10・11・12(12名)ゲート・ゴール等、諸用具の係

留意事項

- ・地域との交流は意義深い、感謝する気持ち・態度など、養っておくようにする。

体 操 ク ラ ブ

4年 7名

5年 5名

6年 4名

計16名

1. 活動内容

○ 全体的な活動の概要

1年間を通じ、マット運動・とび箱・鉄棒等を行う。原則として1カ月ごとにこれらの運動を行い、それぞれの種目に沿って能力別グループで練習を行う。

○ 年間計画

4月	鉄棒	9月	鉄棒	1月	とび箱
5月	マット運動	10月	マット運動	2月	マット運動
6月	とび箱	11月	マット運動	3月	マット運動
7月	組み体操	12月	とび箱		

・ 4月に自己紹介，グループ決め，実施計画立案

・ 3月にクラブ発表会
一年間の反省

※それぞれの種目

鉄棒（さかあがり，えびあがり，けあがり）

マット運動（倒立，ブリッジ，地上回転，側転，バック転）

とび箱（台上腕立て前転，台上前転，台上側転）

2. グループの形態

○ 能力別グループ

運動ごとに能力別のグループを作る。それぞれの運動の最初の練習の時に全員に規定の演技を行わせ，それによってA，B（またはC）のグループに分ける。

3. 活動の様子

(1) グループでの活動内容

- グループに分かれ，リーダーの合図に従って練習をする。
- 2人1組で，個人カードをもとに互いに補助をしたり見合ったりしながら練習する。
- 技能の高いグループが他のグループの練習を補助するなど，練習方法を工夫する。

(2) 役割分担の様子

- グループに分かれて，リーダーを中心に準備運動，整理運動をする。
- グループリーダーを中心に，練習の確認，練習の反省をする。
- グループごとに用具の準備，後片付けをする。
- 2人1組が協力し，補助をしたり，個人カードの評価をする。

留意事項

- ・ 児童は，自分の体力以上の種目を選びがちだが，体力・能力に合った種目を選ばせる。
- ・ 個人技でも，グループの活動を重視する。
- ・ 組み体操など，グループで活動できるものを多く取り入れ，自主的な活動へと発展させる。

卓 球 ク ラ ブ

4年 15名 5年 14名 6年 10名 計39名

1. 活動内容

○ 全体的な活動の概要

グループの活動を重視し、練習を自分たちで計画・実行していく中で、基本のルール、ゲームの進め方を知り、技能の向上をはかる。4年生に対しては、グループで助け合っとうまくできるようにさせる。

○ 年間計画

1学期	実施計画立案, グループ決め, 基本技術の練習, グループ内での試合。
2学期	グループ練習, グループ対抗試合。
3学期	グループ練習, トーナメント試合, クラブ発表会参加, 1年間の反省。

2. グループの形態

○ 異学年男女混合グループ

グループ内に技能の優れた指導のできる児童を1名入れる。下学年は各グループに入れ、5, 6名のグループを編成する。

3. 活動の様子

(1) グループでの活動内容

○ グループごとに、リーダーを中心に今までの練習の反省をもとに話し合い、練習方法について相談する。

○ きまったことをグループごとに発表する。

○ リーダーを中心に準備運動を行い、グループごとの練習をする。

※あるグループの1, 2学期の練習報告

4月(ショート) 5月(カット, サーブ) 6月(サーブ, レシーブ) 7月(試合)

9月(カット, ドライブ) 10月(フットワーク, バック) 11, 12月(対抗試合)

(2) 役割分担の様子

○ グループリーダーを中心にした話し合い, 準備運動, 整理運動。

○ グループリーダーを中心にした技術指導。

○ 全員で協力しての用具の準備, 後片付け。

留意事項

- グループリーダーは技術指導を中心に活動するので内容に対し不満を感じるかもしれないが、指導するという満足感, 充実感がわくようにさせる。
- 学年間の技能差はあるが、異学年グループ編成により、仲間意識を育てていく。

演 劇 ク ラ ブ

4年 10名 5年 5名 6年 12名 計27名

1. 活動内容

- 舞台劇グループと人形劇グループに分かれて創作活動を行う。
- 舞台劇グループは、1学期に「七夕集会」に出演する。2, 3学期は、児童集会・校内テレビ放送に出演する。
- 人形劇グループは、1年間に、低学年・併設の幼稚園に巡回公演及び、校内テレビ放送に出演する。

○ 公演までの経過 →

	舞台劇グループ	人形劇グループ
○ 舞台劇グループと人形劇グループは固定化しておらず、学期毎に入れ替わる。	① 台本探しまたは作成 ② 原案の打ち合わせ ・ 配役・練習の見通し・大道具等の制作 ③ 担当に分かれて練習及び制作	① 脚本原案の打ち合わせ ・ 筋の運び・対象・時間の長さ・材料・制作・準備・作業の手順・配役・練習の見通し ② 係を分担して制作
2. グループ形態 ○ 舞台劇グループと人形劇グループは、児童の希望	④ 立ちげいこ ⑤ 公演準備	③ 操作と声・効果音を合わせた練習 ④ 公演準備

を基に分ける。しかし、できるだけ学年の偏りがないようにし、両グループにクラブ経験者か6年生が入るようにする。

3. 活動の様子

(1) グループでの活動内容

- リーダーを中心にメンバーの意見を出し合いながら、よりよい表現活動を目指して高め合う。
- 表現の上手な者・クラブ経験者が、下学年を教え、信頼関係を作る。

(2) 役割分担の様子

- いろいろな活動を経験するように、配役やスタッフは交代制で行う。

留意事項

- ・ 6年生や特定の人のみが、いい役につかないように配慮する。
- ・ 活動に必要な用具や材料は、ある程度揃えておく必要がある。

科 学 ク ラ ブ

4年 7名 5年 14名 6年 8名 計29名

1. 活動内容

○ 1単位時間でできる実験をグループ毎に計画し、実験する。

○ 1単位時間の流れ→

(事前)	当日の朝までに 昼 休 み	実験内容のプリント 実験用具の準備と点検
①	10分	実験内容の説明と予想の記録
②	20分	実験及び実験結果の記録
③	10分	実験のまとめ
④	5分	後始末

○ 各班は学期毎に実験
計画表を作成し、計
画表に従って実験内
容のプリントを作る。

○ 学期末に4グループの発表会を行う。

○ 実験内容例 ・ガラス細工作り ・アイスクャンディー作り ・ろうそく作り
・熱気球作り ・銅メッキ ・石けん作り ・電磁石作り

2. グループの形態

○ 学年に偏りがないように4グループ編成にする。従って、1グループ7～8人で構成させる。1グループに6年生が2人いた方が相談しやすい。

3. 活動の様子

(1) グループでの活動内容

- 実験予想や考察の時、グループ討議を行い、一人一人活発な意見を出し合う。
- 上級生を中心に基礎的な実験技術を学び合うことにより実験意欲を高める。

(2) 役割分担の様子

- グループ討議の司会及び活動の記録係は、輪番制で行う。また、実験内容のプリントの作成も順番に行う。(最初は、クラブ経験者または上級生が行う)
- 実験用具の準備は、2, 3人ずつ交代で行い、最後の後始末の点検も行う。
- 発表会では、全員、一度は発表者を経験する。

留意事項

- ・火気・薬品等の取り扱いに充分気を付け、指導を徹底する。
- ・教科の延長の内容ばかりにならないようにする。
- ・教師の指導は、事前に充分に行い、実験中の指導助言は少なくする。

調理クラブ

4年 11名 5年 7名 6年 14名 計32名

1. 活動内容

○ 1単位時間でできる簡単なおやつづくり

○ 1単位時間の流れ→

(事前)	当日の朝までに 昼・休み	買い物・作り方のプリント 6班分の器具の準備と材料の準備
①	5分	作り方の説明(担当班の係)
②	30分	実習
③	10分	試食会・実習の反省
④	5分	後始末

○ 1班～6班が、献立を決め、各班が1単位時間の担当班として、全体に説明をす

る。買い物や当日に使う器具の点検を行う。

○ 献立例 ・スイートポテト ・蒸しパン ・グレープフルーツゼリー ・ムース
・ポップコーン ・クレープ ・ごませんべい ・クッキー

2. グループの形態

○ 学年に偏りがないように6グループ編成する。従って、1グループ5～6名で構成される。また、6班まで担当が終わると編成替えを行う。リーダーも替わる。

3. 活動の様子

(1) グループでの活動内容

○ 6年生のリーダーを中心に、献立や当日の分担を決める。

○ グループ内で技術的に巧みな者が示範をしながら実習する。

(2) 役割分担の様子

○ 準備・実習・後始末は、グループ全員で行う。ただし、「今日の実習の反省」の司会・記録は、交代で行う。

○ 当日の担当班になった場合は、次のことを全員で分担する。

・説明のプリント作成 ・買い物 ・器具等の点検 ・6班分の材料分け
・各班の後始末の点検

留意事項

- ・刃物や火気の取り扱いに充分気をつけ、指導を徹底する。
- ・食べることにばかり興味が走らないようにさせる。
- ・児童の材料費の負担が大きくなるように注意する。

将 棋 ク ラ ブ

4年 7名 5年 5名 6年 7名 計19名

1. 活動内容

- 初心者に対する解説をする。(駒の動かし方, 将棋のルール, 玉の詰ませ方など)
- 勝ち抜き戦をする。(個人戦, 団体戦)
- リーグ戦をする。(個人戦, 団体戦)
- 詰将棋をする。

2. グループの形態

- 各グループとも4～6年生の入った混合グループで, グループ数は4つ。
- 各グループの能力は, だいたい同じようにする。
- 学期ごとにグループの編成替えをする。

3. 活動の様子

(1) グループでの活動内容

個人戦が中心になりがちであるが, グループの一人一人が上手になろう, という
ことで互いに教え合って活動をしている。詰将棋や団体戦では, 大きな将棋盤(小
黒板を利用したもの。駒はマグネットを取り付けたもの)を使い, グループで協力
して考えられるようにしている。

(2) 役割分担の様子

グループ内で能力のある児童が自然と教える立場になって, 初心者に教えている。
従って, 5年生が4年生に, 4年生が5年生に教える場面もある。

詰将棋は, 出題者をあらかじめ決めておき, 出題された問題を時にはグループで
話し合っ

留意事項

- 団体戦では, グループの中で将棋をよく知っている児童の一方的な考えにより, 駒が進められてしまうことがある。グループ内での相談の仕方についても指導しておく。
- 活動内容に変化を持たせるよう, ゲームの方法などにグループで楽しむ工夫をさせたりして, 話し合いの機会も増やす。

マンガクラブ

4年 11名 5年 8名 6年 5名 計24名

1. 活動内容

- 基本的なマンガのかき方を習う。(線画, ユーモアサイン, 顔の表情, 模写など)
- 4コママンガづくりをする。(ふきだしを加えて, 簡単な言葉をつける)
- クラブ内発表会。
- 短編マンガ集づくり。
- 校内クラブ発表会に参加する。



2. グループの形態

これまでにマンガクラブの経験のある児童を中心に、各グループに各学年の児童が入るようにした。グループの数は、4グループ。

3. 活動の様子

(1) グループでの活動内容

基本的なマンガをかく場合や4コママンガをつくる場合でもグループ内で班長を中心に教え合いながら活動をしている。前年度のクラブ経験者が上手にリードしている。また4コママンガづくりや短編マンガ集づくりにおいては、グループで1作品を協力して作ることもとり入れている。

(2) 役割分担の様子

4コママンガづくりでは、グループで考えた1つの物語を各自が4コマずつ担当し、一つのマンガを完成させるようにした。

また、短編マンガ集づくりでは、マンガをかく係、言葉を考える際、色をつける係などと役割分担をして仕上げるようにした。

クラブ内発表会では、一人一人が必ず係を分担した。

留意事項

- 個人の活動が多くなりがちであるので、グループや全体の場で互いの作品を見せ合って話し合う機会を多くもつようにする。

Ⅳ. まとめと今後の課題

1. 研究のまとめ

昨年度「自発的・自治的活動を高めるクラブ活動のあり方」とテーマを変更し、研究を進めてきたが、充分研究をつくせない面もあった。そこで、本年度も同じテーマで研究することにした。このテーマは、クラブ活動の本質にせまる重要な問題をもっているため、研究にあたって苦労が多かった。しかし、多忙にもかかわらず都内の各地区から、たくさんの先生方のご参加・ご協力を得、この研究をまとめることができ感謝している次第である。

特に本研究を深め、解明していくため、千代田区立西神田小学校の佐藤校長先生、江戸川区立下鎌田小学校の小野校長先生に指導助言をいただいたり、墨田区立両国小学校の先生方に見学の際に大変お世話になりましたことを、ここに厚くお礼申し上げたい。

本年度の研究は、異学年の集団活動を生かす手だてとして各クラブ内のグループづくりの方法に視点をしぼり、クラブ活動が、何よりも児童の興味・関心の追求によってより効果的に進められることを配慮しながら行ってきた。そして、次の3点に的をしばって研究を深めるよう努力をつみ重ねてきた。

(1) クラブ活動の実態の把握

自発的・自治的活動の高まるクラブ活動にするためには、児童の興味・関心が強いほどその成果が上がるものと考えられる。過去のクラブの種類と最近の種類の違いは、年々クラブ数が多くなり、新時代を考えさせるものが出現し、種類の多様化がみられることである。クラブの種類が多様化に応えるために、集団構成、指導計画、クラブ設置・選択指導における配慮面を研究してきた。

(2) 各クラブの特色をつかむ

クラブには、大きく分けると運動系と文化系がある。運動系のクラブは児童の希望が集中し、文化系のクラブには、児童の興味・関心の多様化から、内容も趣味・教養・娯楽的なものも増えている。活動形態に現われる特色、特色を生かす集団構成と活動のあり方を研究して自発的活動を高めるクラブ活動の在り方を深めた。

(3) 事例の研究からテーマにせまる

1つの学校の実践事例から問題点がどのように変容していくかを追求したり、いくつかの学校から集めたクラブ別の活動事例を通して、活動内容、グループの形態、活動・役割分担の様子を研究してきた。

2. 研究のまとめ

本年度は継続研究の2年目にあたり、昨年に引を続き8つの視点から、問題の解決に迫ってきた。けれども、予算と評価については、研究に取り組んできていない。今後の研究課題である。また、来年度は、本年度の研究を踏まえ、1つのクラブ活動の年間を通して、組織の構成、活動内容などのテーマにそって研究していくことが必要である。

Ⅳ. 学級指導

テーマ 「発達段階に応じた指導内容と授業展開のあり方」

I. まえがき	75
1. 研究主題について	75
2. 研究の方法	75
II. 発達段階と指導内容	76
1. 児童の発達特性と集団の発達過程	76
2. 指導内容と授業展開	77
III. 人間関係の改善向上に関する指導内容例	78
1. 低学年の「協力」にかかわる指導	78
2. 中学年の「協力」にかかわる指導	78
3. 高学年の「協力」にかかわる指導	80
IV. 授業研究とその考察	82
1. 主題「たくさんのともだちとなかよくあそぼう」 1年	82
2. 主題「ほんとうの協力」 3年	86
3. 主題「友だちのよいところ」 5年	90
V. 研究の反省と今後の課題	94

学級指導コーナー

1. 学級・学校生活への適応に関する指導	77
2. こんな資料はどうですか（導入・展開）	80
3. こんな資料はどうですか（展開・終末）	81

○研究の経過

- 61 . 5 . 27 (火) 定期総会, 研究部会, 組織づくり, 今年度の研究方針
 61 . 6 . 20 (金) 研究主題の決定, 研究計画, 各校区市の情報交換
 61 . 7 . 10 (木) 人間関係に関する指導, 低中高別指導内容の研究計画, 授業研究の計画
 61 . 9 . 2 (火) 研究授業の指導案検討
 61 . 9 . 19 (金) 研究授業 文京区立駒本小学校 3年 丸西学級
 61 . 10 . 13 (月) 研究授業の指導案検討
 61 . 10 . 21 (火) 研究授業 多摩市立東永山小学校 1年 細野学級
 61 . 11 . 18 (火) 研究授業 大田区立蓮沼小学校 5年 朝田学級
 61 . 12 . 10 (火) 低中高別指導内容のまとめ, 研究集録の内容検討, 執筆分担
 62 . 1 . 12 (月) 研究集録の原稿検討, 研究発表会の役割分担
 62 . 2 . 9 (月) 発表内容の検討, 発表資料の準備
 62 . 2 . 27 (金) 研究発表会

— 研究・執筆者名簿 —

部 長	鈴木 和子	港 ・ 白金小	河野 和子	北 ・ 稲田小	
副部長	高松 和彦	武蔵野・第四小	橋本 美喜	荒 川・尾久小	
(司 会)	嵯峨 悦子	墨 田・錦糸小	(記 録)	篠崎たか子	荒 川・赤土小
"	吉仲ミチ子	千代田・永田町小		金田 京子	板 橋・志村坂下小
"	重松 誠	港 ・ 御田小		高山 厚子	板 橋・志村五小
(発表者)	細野 良正	多 摩・東永山小	元部長	安岡 正凱	練 馬・大泉三小
(記 録)	富田 嘉子	新 宿・東戸山小		形部 操	足 立・千寿旭小
	篠原 昌子	中 央・十思小		池上由美子	足 立・千寿七小
	小幡 賢司	港 ・ 東町小	前部長	米本 滋雄	葛 飾・細田小
(司 会)	藤本 仁	港 ・ 白金小		赤岡 幸子	葛 飾・住吉小
(発表者)	丸西美佐子	文 京・駒本小		岩瀬 勝美	江戸川・船堀小
	渡辺 廣子	文 京・金富小		藤村 礼子	江戸川・二之江小
	田中 豊一	文 京・青柳小		鈴木 恭子	江戸川・上小岩二小
(記 録)	藤田 新二	墨 田・中川小		渡辺 勝夫	三 鷹・井口小
	青山 啓子	品 川・中延小		森山 裕夫	三 鷹・第三小
	橋本 京子	品 川・四日野小		曾木 祥子	府 中・第十小
(発表者)	朝田 幸子	大 田・蓮沼小		宮崎 太郎	調 布・緑ヶ丘小
	朝倉深太郎	世田谷・代沢小		田中 尚子	小 平・第一小
	二田 孝	世田谷・代田小		井上 和芳	東大和・第九小
	加藤 裕美	豊 島・清和小		加川 英一	東大和 第四小

1. まえがき

1. 研究主題について

ファミコン時代の対人困難症、まじめ人間を笑い者にしたり、一人遊びの方が気楽で楽しいと感じたりする子供の増加等のむずかしい問題に対して、学級指導はどのような取り組みをしたらよいのであろうか。

学級指導は「教師の意図的、計画的な指導」が重視されるが、特別活動の目標である「望ましい集団活動を通して……、集団の一員としての自覚を深め……、自主的、実践的態度を育てる。」ことをしっかりおさえ、上記の問題をふまえて、人間関係の改善、向上をめざす指導のあり方の研究を進めることにした。

昨年度は、「言葉づかいに関する指導」「相互理解に関する指導」を中心に、発達段階に応じた指導内容と授業展開のあり方について考えた。授業研究や互いの実践例から、児童の発達の特性や発達過程、そして、集団構造の発達過程をふまえて、授業を行うことの大切さが分かった。また、学級集団の発達に大きくかかわる担任教師の日常の学級経営が基盤となって、実践化に結びつくよりよい学級指導の授業が展開されることも実証された。

そこで、昨年度に続いて学級・学校生活への適応に関する指導の、集団における人間のかかわり合いの中で、自己を正しく生かし向上する、互いに認め、協力して高め合う指導をとり上げることにした。今日的な児童の問題傾向として、集団への無関心、いつまでも強く現れる自己中心的な言動等が、数多く出された。今までいわれてきた発達心理学における児童の発達段階からみて、この学年だからできるはずと決めつけることをせずに、深く学級や児童の実態を探り、そこから指導案を立てることが大切であろう。人間関係にかかわる学級指導の、低学年からの系統的な積み重ねが不十分な学級では、学年にふさわしいねらいを設定しても、その達成はむずかしい。各教科と同じように、6か年間を見通した指導計画に基づく指導の重要さが、改めて確認された。

2. 研究の方法

低・中・高学年別の授業研究、部員の実践例と、発達過程に関する理論とを合わせて、主題の解明に迫ろうとした。

授業研究では、事前に指導案検討の会をもった。

- ① その学級の実態をより深く知る。
 - ② ねらいをしぼり、指導内容を明確にする。
 - ③ 指導過程の各段階における効果的な発問と、資料を考える。
- 3点を中心に話し合い、授業研究においては、2～3名の観察児を定めて、活動状況や反応を、できるだけくわしく記録し、研究会で報告した。観察児の事後の実践化への動きや変容を担当が追跡し、研究会での部員の実践例と関連づけた話し合いや、講師の先生のご指導をもとに、発達段階に応じた指導内容を考えた。より速やかな児童の変容を図るため、身近な具体例から児童にこれではいけないという緊迫感をもたせ、問題や原因等を追求する授業展開を工夫した。

Ⅱ. 発達段階と指導内容

1. 児童の発達特性と集団の発達過程

学級指導は、学級の成員全員を対象に、児童の日常生活に密着した指導をし、学級における好ましい人間関係を育てることをめざす教育活動である。小学校6か年間を見通した系統的な指導計画に基いた、各学年の発達段階をふまえた指導を積み重ねることにより、よりよい成果があげられよう。児童の発達段階に応じた指導内容と授業展開のあり方を追求するためには、まず、各段階の児童の発達特性をおさえ、更に、集団としての発達過程を明らかにすることが必要だと考え、低・中・高学年の三段階に分け、次のようにおさえた。

○ 児童の発達特性と集団の発達過程

段階	発達特性	集団の発達過程
低学年	<ul style="list-style-type: none"> 初期は幼児性が強く、情緒が動揺しやすい。大人への依存度が大きい。 活動的でじっとしてられない。 具体的なことを通さないと理解は困難。 経験的、主観的思考。行動的に思考する。 学習と遊び(いたずら)とが未分化。 きまりの守り方は機械的、他律的。教師の規制に依存。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己中心的で、児童相互は集合状態。 児童は個々が教師に直接結びつき、教師を中心に相互に交流。 次第に自他の分化ができ、他人の立場を考えられるようになる。 ひとり遊びから小さな集団の遊びへ。 その中から集団生活への魅力、集団の目標の発見。個人的目標の抑制を学ぶ。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> 知的能力が発達。興味・関心・好奇心が強まる。力動的で学習や運動に体当たり。 教師との個人関係が薄くなり、自発的活動の要求が強まる。 直観的思考から多面的、論理的思考へ。 その子らしい学習態度が身につく。(個人差が広まってくる) 男女の活動の違いが現れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間との結びつきが強まる。小集団の分立が見られる。閉鎖性の強い集団。 集団意識が高まり、集団の凝集性・集団活動が盛んになる。 集団の統一維持のため、集団規範やリーダーが生まれる。(自発的自己統制) 自治的な活動への芽生えを望ましい方向に育てるのが適切な指導となる。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 探求心が旺盛となる。 自己を意識し、友達に対する愛情、同情も現れる。自分を支え高める友を求める。 多面的、抽象的思考が高まる。 共感的能力が高まりグループ学習が成立。 きまりに対する柔軟な姿勢が出てくる。 二次性徴発現。男女の特性を認め合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 友人関係の結びつきは一層強くなる。 凝集性が高まり、組織的に活動するようになる。学級意識が強くなる。 自他の個性についての理解が客観的になり、特質を生かした役割を分担する。 集団の持続に必要な調停役や集団活動を促進する指導的な児童が現れてくる。

2. 指導内容と授業展開

事後の生活に生きて働く知識・態度・技能・習慣を確実に身につけさせるためには、学級の実態に即した指導であることがとりわけ大切である。「機械親和・対人困難症」といわれるファミコン時代の子ども達の場合、1年生から4年生、5年生までもぼんやり顔が続くことがまれではない。時代の激変の中で、児童の発達段階における変化やばらつきも激しい。従来の発達心理学の枠をはみ出し、「見えない」「わからない」子どもとなる傾向が強くなり、単純に学年発達段階に即応できるとは言えない。児童理解に努め、学級の実態を正確に把握して、指導内容、授業展開について検討することが大切である。年度の変り目では、担任どうしが、学級引き継ぎについて、できるだけ詳しい情報交換を行っておくようにしたい。

各段階での指導について原則的に次のようにおさえ、研究を進めた。

○ 児童の発達段階と指導の方向

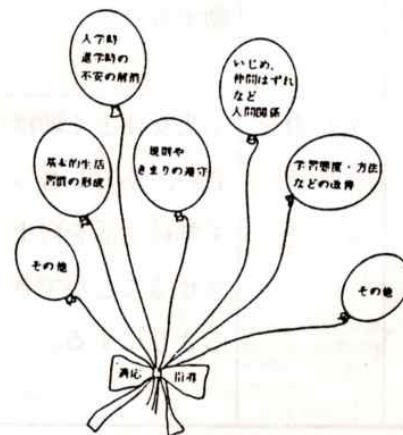
段階	指導の方向	資料例
低学年	<ul style="list-style-type: none"> ●くり返ししつける。手をとって教える。 ・体を動かさせる。ごほうびを約束する。 ・見る、聞く、話す、実際にやってみる等の五感を通した指導が大切。 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体性の強い、興味・関心を喚起し、心情に訴えるもの(スライド、紙芝居、指人形、ペープサート、映画、掛図、模型、遊具、レコード、OHP、など)
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ●教えしつける。やらせて覚えさせる。 ・クイズやゲームを通して考えさせる。 ・グループ毎で競わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的で、判断を深めたり、イメージを与えたりするもの(作文、日記、班日記、学級日記、録音、VTR、説話など)
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ●考えさせしつける。考えさせ、共感させる。(押しつけを感じさせない工夫) ・自分達の手で作成させた物を資料として活用することも意欲づけになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・焦点を明確にしながらかん同思考を促すもの(スライド、統計表、グラフ、調査) ・知見を深めたり、思考の停滞を打開するもの(新聞記事、掛図、OHP、説話)

— 学級指導コーナー —

学級・学校生活への適応に関する指導

学級の子ども達は、学級生活や学校生活の中で、絶えず様々な問題に当面し、悩んだり苦しんだりしながら生活している。外見は、仲良く楽しそうに見える学級も、一人一人の児童にとっては、何かしらの欲求不満があり、それらを抑制しながら、(また時には、爆発させて)生活している。学級担任は、これらの子ども達の諸問題やまた近い将来において当面すると予測される問題を取りあげて指導しなければならない。これが適応指導である。

適応指導の内容

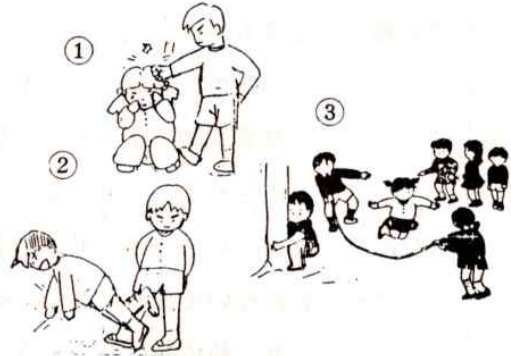


Ⅲ. 人間関係の改善向上に関する指導内容例 — 「協力」にかかわる指導 —

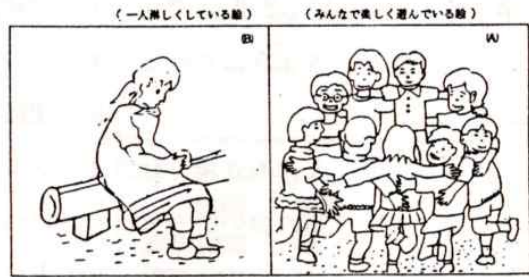
	主 題	ね ら い	指 導 内 容
低 学 年	友達と 仲よく	◦人からいやがられることをしていないか自分を反省し、友達のことを考えた行動ができるようにする。	1. お話を聞く（いやなめに合った友達のこと） 2. 人から嫌われる理由を考える。 （きらわれる絵①②③） ・乱暴 ・いじわる ・かってな行動 3. 相手の気持ちになって行動する大切さに気付かせる。 4. 仲良く助け合って生活するように意欲づける。
	友達を ふやそう	◦仲良く遊べる友達を、ふやすことができるようにする。	1. テレビを見る。「友達っていいね」 2. テレビを見た感想を発表する。 3. 仲間になれない理由について考える。 ・テレビを見る ・絵を見て考え、発表する。 4. 仲良く遊び、友達をふやすにはどうすればよいか考える。 ・友達調べ ・友だちの日記より
中 学 年	掃除の 協力	◦掃除の手順と分担を理解し、協力して、早くきれいにできるようにする。	1. 最近の掃除のし方について考え、問題点に気づかせる。 2. 原因を考えさせ、掃除の意義・ねらいを理解させる。 3. 早くきれいに掃除ができる具体的方法を考えさせる。 4. 次回の掃除から実践するよう意欲づける。
	グループ の協力	◦グループ活動の大切なことがわかり、励まし助け合って、グループ活動する。	1. 今までのグループ活動の様子をふり返らせる。 2. 楽しかったグループ、そうでなかったグループはどこに原因があったのか、反省し、発表させる。 3. これからのグループ活動を楽しく充実したものにしていけるための方法を話し合い、目標等を決めさせる。 4. 教師の説話を聞かせる。
	男女力を 合わせて	◦男女仲よく助け合い、協力し合って学級生活を向上させることができるようにする。	1. 班日記、アンケート集計結果から、学級内の男女間の問題点に気づかせる。 2. 男女が仲よくできない理由について発表させる。 3. 協力し、仲よくしていけるための方法を話し合わせる。 4. 各自の努力目標を決めさせ、よりよい学級作りを目指すようにさせる。

指導上の留意点・資料

- いやなめにあった経験を話す。
- きらわれる理由、きらう理由の絵を掲示する。
- 友達に対して思いやりのない態度はなかったか、自分の経験を発表する。
- 今日の生活行動から仲よくできたことを書く。



- 楽しく遊んでいるようすを知らせる。VTRを、ストップを入れたりして、考えさせる。
- VTR「一人ぼっち」のようすを二枚の絵を比較させながら、その違いに気付かせる。
- 友達の発表を聞かせ、考えを発表させる。
- 仲良くする楽しさに気付かせる。

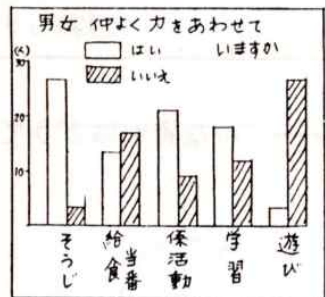


- 「ぞうきんからの手紙」を読み、VTRで掃除の様子を見せる。
- グループごとに話し合いをさせる。
- 手順を確かめ、分担するだけでなく、班長の指示を聞き、みんなで協力することの大切さを理解させる。
- 「ぞうきんへの手紙」を書く。反省カードの利用。

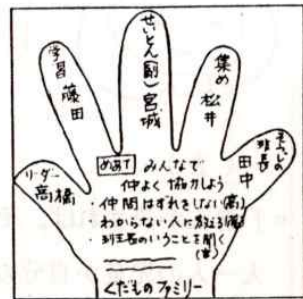
ぞうきんへ
つらい思いさせてごめんね。ついでに
しろくてあんなに汚らなりました。きん
かいはん長の言うことをきいて、みんな
で力をあわせてそうじをします。しん
んじにふわふわするから、みんなして
ね。またふわふわしたい。○○より

三年三組のみなさんへ
ぼくはぞうきんです。ぼくは今どう
てもかたししいです。
なせかというところ、みなさん、ぞうじの
じかんを田んぼに出して下さい。
ぼん長さんの言うことをきいて、すいふさ
けています。ぼくたちをきいて、なま
まのほうき君でなまなばらさんたり。
ぼくは、やがてふわふわしたいです。ほうき君は
しかりは、ぼくたちと遊んで下さい。
どうぞ、ぼくたちのおかいをきいてくだ
さい。さようなら

- 事前にグループ活動について作文を書かせる。楽しく活動できたグループとそうでなかったグループを取り上げる。
- 個人の反省も含め、グループごとに考えさせる。
- グループの名前、めあて、役割分担、個人の目標などを決めさせる。
- グループ活動の大切さについての話をする。

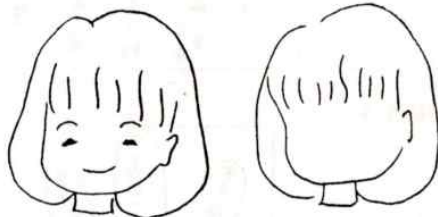


- 男女が仲よく力を合わせて活動できていない具体的な場面を発表させる。
- 仲よくできない理由だけでなく、仲よく協力し合っている理由についても話合わせる。男女の特性についてもふれる。
- 1の資料を利用し、今後の心構えを話合う。
- 努力目標を掲示し、仲よく協力できたら花びらをつける。遊びの場面は、学級会の議題で取り上げるよう方向づける。



	主題名	ねらい	学 習 活 動
高 学 年	クラスの ためにな る活動	児童一人一人が、 友達の活動に関 心をもち、クラ スのために役立 つ活動をするよ うにさせる。	1. 学級生活の中で、良くなっている点について話合う。 2. 良くなってきた理由を知るため、経験を話合う。 3. 友達やクラスのために役立っていないか、みんなで考える。 4. 「知り合う」会を設定して学級全体の取り組みとする。
	自分の悪 いところ	友達に対する言 動について振り 返り、積極的に 直し、生活でき るようにさせる。	1. 児童作文を聞き、問題点を話合う。 2. どんなことをされていやな思いをしたかについて話合う。 3. なぜ、いやな思いをさせるのか話合う。 4. どのように注意して生活していくのか考える。 5. 実践するように、あいことばを決める。
	友達に学 ぶ	友達の立場や仕 事の良い所を知 り、協力して学 級生活を送らせ る。	1. アンケートの集計結果より、互いの良くなっている点について話合う。 2. どのようにしたら良くなったのか、体験を基にして考える。 3. 協力して生活するために実践することを決める。
	みんな仲 間だ	男女の協力の大 切さが分かり、 相手の立場や気 持ちを考え進ん で実践させる。	1. 係活動のVTRを見て、良い点について話合う。 2. 男女が協力して生活すると、どんな点で良くなるのか考え、話合う。 3. 進んで実践するためには、どうするのか話合う。 4. 学級全体の取り組みを決める。

— こんな資料はどうですか（低学年の導入・展開段階の例） —



（表）

（裏）

- 表に普通の顔、裏は表情の全くかかれていない顔のペーパーサート。教師の話に合わせて使用し登場人物に対する注意をひきつけます。
- この資料は、さらに展開の前段でも使用し、顔のない登場人物の表情を想像することにより、思考を深めることに役立っています。

◦ 「導入が決まれば、その授業は成功。」 導入の段階では、取り上げた問題について、一人一人の児童が自分の問題として受けとめ、「何とかしなければならぬ」といった気持ちを起こさせるように持っていくことが必要です。

指 導 上 の 留 意 点 ・ 資 料

- 良くなった点についてみんなに認識させる。
- 話がうわすべりにならないよう体験に基づく内容にさせる。
- 何げない行動についても考えさせる。
- 実践方法を明確にする。

① ② ③ 運動カード (掲示用)

① ② ③

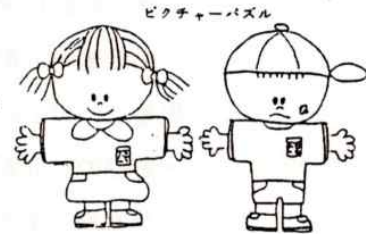
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

① 自分のために役立っている。

② みんなのために役立っている。

③ 何げない活動もみすごさないで生活しよう。

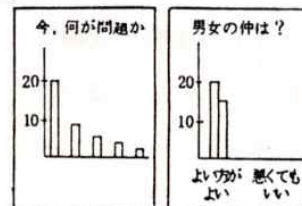
- 実際に学級の児童がいやな思いをしていることを知り、みんなの問題であることに気づかせる。
- どのような行動が最もいやがられるのか視覚にうったえる。
- 自分も友達もそれぞれ悪いところがあることに触れる。
- 具体的に考えさせる。



- 児童の見逃している点を認識させる。
- 実際の場面からの話に基づいて話合わせる。
- 男子、女子の良い面について十分考えさせる。
- 行動目標となるように具体的にさせる。

← のぼそう		へらそう →
15人	6	13人
28人	7	7人
26人	9	6人
30人	10	2人
33人	11	3人

- 男女が協力している場面をしっかりと押さえる。
- 男女相互に認め合うことの大切さに気づかせる。
- 場面ごとに考えさせる(学習, 生活)
- 具体的な行動が自分自分ではっきりつかめるようにさせる。



——こんな資料はどうですか(低学年の展開・終末段階の例)

- 展開の後段では、「どうすればよいのか」解決策を持たせませす。板書の「言われたくない言葉」に大きな×印をはりつけ、つかわないように意識づけした後に個人カードの記入をさせたところ、身近な具体的な言葉で書くことができました。
- 終末は、解決策が見つかったので、実践していこうという意欲を高める段階です。
- だれもがよく知っている歌(幸せなら手をたたこう)の替え歌を作ってみみんなで歌うことにより、学級全員で約束を守っていこうという意識を高めます。教師の意図する言葉を残し、線で囲んだ部分を児童が考えました。

ほら みんなで 笑いましょう

仲よしなら たいどで しめそうよ

悪口は言わないで

いいことして てをたたこう

Ⅳ. 授業研究とその考察

事例 1

主 題 たくさんのともだちと なかよくあそぼう

1. 主題設定の理由 入学当初より学習時間、休み時間等の学校生活を通し、友だちをばか
いで孤立する児童を出さないよう「ひとりぼっちがいたらあそびにさそおう」
児童の様子を見ると、放課後の遊びを相談するグループ、翌日の会話や日記
特に、男女の面から児童の学校生活を見てみると、
- 休み時間に男女の遊びがわかる（男子-サッカー、女子-なわとびなど）。
 - 係活動の分担の希望をとると、男女別々になる傾向がある。 ○ 欠席者への児童は、以上の点に困ったようすもなく、ただ普通のことと感じて生活してい
 - 遊びの志向がちがう。 ○ 男女一緒に遊ぶ経験が少ない。 ○ 男女一緒に遊
 - 男女別々でも特に困らず、必要感がない。 ○ 友だちを知らない。 など
- 男女という心身の性差が少ない低学年から、だれとでも仲よく遊ぶ楽しさ、男
発展していくものと考え。
- 遊びを通して、いろいろな友だちと遊ぶことが楽しいことに気づかせ、更にだ
2. 本時のねらい たくさんの友だちと遊ぶ楽しさを知り、たくさんの友だちと仲よく遊べ
3. 展開と授業考察

	指導内容	学 習 活 動	資 料
導 入	1. 本時の課題について意識づける。	1. 昼休み、どんな遊びをしてきたか発表する。 ・サッカー ・ゴムだん ・シーソー ・なわとび	○資1 遊んでいる絵
		2. 遊んでいる絵を見て、遊びに関する学習であることを知る。	
展 開 前 段	2. サッカー遊びが男子のみで遊んでいることに気づき男女一緒に遊べることをわからせる。	3. 男女別々な遊びをやっていることを知る。	
		4. サッカー遊びが男女一緒に遊べることを話合う。 ○ サッカー遊びの楽しさを話し合う。 ○ 一緒にできないわけを話す。	
	3. みんなでサッカー遊びをする。	5. 2チームにわかれサッカー遊びを楽しむ。 ・チームわけ ・簡単なルールの説明	○資2 簡単なサッカーのルール図

1年（適応） 1単位時間 授業者 多摩市立東永山小学校 細野 良正

にする行為（人を笑ったり、ちゃかしたりするなど）を戒め、休み時間など遊びの中に入れてなという指導を続け、好ましい人間関係をつくってきた。

からグループでよく遊んでいることがわかる。しかし、男女が一緒に遊ぶ場面は意外と少ない。

○学習中、男女混合のグループを作らせるとなかなかできない。

手紙を依頼すると、異性だと躊躇する。

る。男女が自然と別々のグループにわかれていく実態を見て考えられることは、

ぶ楽しさを知らない。 ○遊びへの入り方、誘い方を知らない。 ○遊び方、遊びを知らない。が考えられる。

女を意識させない生活経験をさせることが、学年がすすむにつれての男女の協力や思いやりに

れとでも仲よくできる友人関係をつくりたいと考え、本主題を設定した。

るようにさせる。

指導上の留意点	授 業 考 察
<ul style="list-style-type: none"> ○予想される遊びをカードに書いておき、はる。 ○主題の提示 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの発表は、今やってきたことなので多く発表があり、本時の学習の動機づけに役立った。 ・課題意識を持たせる点が弱かった。もっと明確に意識づける工夫が必要であった。
<ul style="list-style-type: none"> ○サッカー遊びの楽しさを多く語らせ、やらない子もやってみたい気持ちをもたせる。 ○得意な子どもが、一緒にできない子どもに教えるようにさせる。 ○得意な子どもにルールの説明をさせる。 ○わからずぼんやりしている子にはゲームを中断しリーダー 	<ul style="list-style-type: none"> ・サッカー遊びを選んだことは、ボールをけることになじんでない子どもにとって負担があったのではないか。他の遊びを選んだ方がより効果的なものになったと考えられる。 ・実際に子どもの体を動かし、遊ばせたことによって遊びの楽しさが実感できたと思う。 ・リーダーの子がわからない子に教えたが、わからない子ようすがリーダーの子に具体的にどこがわからないか、よく

		6. サッカー遊びをやってみて、困ったこと楽しかったことの発表をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・うまくけれなかった ・はじめてだけど、おもしろかった ・また、こんどやってみたい 	
展 開 後 段	4. 遊びの中に入れない子への誘い方、入り方を考え演じさせる。	7. 遊びの中へ入る時のことば、誘う時のことばを発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ・「○○さんいれて」「うん いいよ」 ・「○○さん いっしょにやろうよ」「うん やろう」 8. ロールプレーで演じる。	資3 遊びの仲間に入れないでいる絵 資4 ロールプレー(遊びの入り方、誘い方)
終 末	5. みんなで遊びたい意欲を持たせ、実践に結びつける。	9. 表をもとに、みんなでやってみたい遊びを選び自分の名前を書いたカードを表にはる。	資5「じぶんのしているあそび、みんなにしたいあそび」の表 資6 名ふだカード

4. 評価 たくさんの友だちと遊ぶことができ、友だちと仲よく遊ぼうとする意欲がもてたか。

5. 観察児について

A男 発言・行動とも活発な子どもである。リーダー的な存在で学級内での信望もかなりある。遊びは男女の区別なしに、室内・屋外遊び共によくやっている。

前半・よく拳手をして、どうしてもいいたいと意志表示をしている。

- ・教師の発問によく反応し、的を得た発言をしている。
- ・サッカー遊びを先頭になってよくやっている。

後半・資料3の絵を見て、「いれて、うんいいよ。」と発言する。

- ・ロールプレーを演じたがるが人数制限のためにできない(くやしがる)。
- ・みんなでやってみたい遊びは、ビーズ遊びを選んだ。

自分の知らない遊びや興味ある遊びをやってみたいと態度が素直に出てきている。資料5をうまく活用している。

B子 人から誘われたり、話されたりすると反応する消極さが見える子どもである。遊びも、室内で絵をかいていることが多い。

前半・指しゃぶりをする。自分がやってた遊びを発言する。

- ・サッカー遊びをやるがわからず、隅にすわりこむ。

後半・リーダーにやり方を教わって、サッカー遊びに再び参加する。

- ・ロールプレーを演ずる。みんなでやってみたい遊びはこおりおにを選ぶ。ロールプレーを楽しそうに演じていた。

<p>ーが教える。 ◦また、やってみたいという期待感をもたせる。</p>	<p>わかったのではないか。</p>
<p>◦場面を限定し、ことばも多くせず、明日から即実行できるようにさせる。</p>	<p>・ロールプレーで演じることにより、興味がわき誘い方入り方がよくわかり効果的であった。 ・演じたがる子が多くいたが、時間の都合上数人に絞った。全員に演じさせた方がより効果が望める。</p>
<p>資5は事前に調査しておき表にしておく。</p>	<p>・表に自分の名ふだをはっていくことで「○○ちゃん、○○あそび やろう」という声が出ていた。いろんな遊びをやり友だちがふえていく期待感がわいた。</p>

6. 研究協議会から

(1) 発達段階と指導内容

- ①ようやく学校生活に慣れてきた一年生のこの時期に、友達との遊びについての指導は大切である。兄弟が少なく、大勢の友達と遊ぶ楽しさをよく知らない児童が多い現状をふまえて、この主題を採り上げたことはよかった。
- ②一年生としては、男女を意識する必要がないのではないか。男女分かれて遊ぶことが多いようであるが、自然なのではないだろうか。偶然にそうになっていると思われる。一年生の段階は集団で遊ぶのは5・6人が限度である。仲よく遊ぶという面を指導しておけば、自然と好ましい人間関係ができてくると思われる。





(2) 授業の流れ

- ①導入場面で課題意識を明確にすることが大切である。この点を児童に示しておかないと授業から何を児童は、学びとるのか迷ってしまう。昼休みの遊びの発表から入った点はよかったが、遊びを多く知ることなのか、友だちと仲よく遊ぶことなのか曖昧な点があった。
- ②展開後半の遊びへの入り方、誘い方は別の時間で指導した方がよい。内容が豊富すぎ、焦点がうすれてしまう。
- ③ロールプレーを用いたので授業がもりあがっていた。発達段階から考えても有効な方法であった。

事例 2

主 題 ほんとうの協力

1. 主題設定の理由 本学級の子どもたちは、編成替えを経て3学年を迎えたが、進級当初はだったりする姿がしばしば見られた。その後、新しい“仲よし関係”ができ、表の質を高めていこうとする態度は、2学期を迎えた今も育っているとは言い難い。にできない場所はそのままにしておいて平気である。学習の場面、給食当番や日面をとりあげて指導し、それをほかの場面に転じたりひろげたりできるようにさ
2. 本時のねらい そうじがまじめにできるよう互いに注意しあったり、汚れている所をきれ
3. 展開と授業考察

	指 導 内 容	学 習 活 動	資 料
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ○そうじの時間であるのに遊んでいる様子を想起させる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. ざんねんカードを読む。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">どんな様子で遊んでいましたか。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・ほうきでチャンバラをしていた。 ・ぞうきんの投げ合いをしていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○資料① ざんねんカード <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> そうじのとき、ほうきをふりまわして遊んでいた人がいたので、そうじのおわりがおくれてしまいました。 </div>
展 開 前 段	<ul style="list-style-type: none"> ○遊んでいる友達がいってもあまり注意しない理由を考えさせる。 ○注意するのはその友達自身のためでもあることを理解させる。 	<ol style="list-style-type: none"> 2. <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">どうして注意しないのかな。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・自分も遊んでいることがあるから ・きいてくれないと思うから ・文句を言われるから ・仲よしの友達だから 3. <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">遊んでいる友達が困ることはないのでしょうか。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・そうじができない子になってしまう。 ・みんなの役に立つ人になれない。 ・先生にしかられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○資料② 遊んでいる絵 <div style="display: flex; align-items: center;">  <div> →の部分はマグシートで作っておく。※に移動させると床をはいている絵になる。 </div> </div> ○資料③ 遊んでいる友達を見ている絵 ○資料④ 目耳口のカード <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">    </div>
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ○注意のしかたされ方を具体的な会話で考えさせる。 ○ひとりの力ではできない所 	<ol style="list-style-type: none"> 4. <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">何と云って注意すればいいのかな。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・ちゃんとやろう。おくれちゃうよ。 5. <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">何と答えればよいのでしょうか。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・うん、わかった。ごめんね。 6. <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">ひとりではきれいにできない所を見つけたらどうすればいいのかな。</div> 	<ul style="list-style-type: none"> ○資料⑤ 学級目標 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 友だちのために何かできる子 </div> ○資料⑥ 学級目標 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 正しい言葉づかいで話す子 </div>

告げ口や争いが多く、友達の失敗を嘲笑したり、忘れ物をして困っている友達がいても無関心面的な助け合いは行われるようになったが、積極的に友達に働きかけ力を合わせて互いに生活例え、例えば、そうじをまじめにしない友達がいてもあまり注意しようとはせず、ひとりではきれいな直の仕事、係の活動など協力意識を深めさせたい場は多いが、まず一番問題の多いそうじの場をせたい。そう願って本主題を設定した。

いにするために声をかけあったりすることの必要性に気付かせ、実践できるようにさせる。

指導上の留意点	授 業 考 察
<ul style="list-style-type: none"> ○主題の提示 ○資料①に合わせて資料②を提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○文字だけの資料①に、親しみやすい絵の資料②を合わせて提示したことにより、ぞうきんなげ、おしゃべり、おいかけっこなど、どんなことをして遊んでしまったかという発言は得られた。しかし、この資料では児童の心情に訴える力に乏しく、「何とかしなければ」という切実感が生まれなかった。
<ul style="list-style-type: none"> ○資料②③④から、友達の遊んでいる姿が<u>見え</u>、騒ぐ声が<u>聞こえるのにだま</u>っている気持ちを、自分の体験から考えさせる。 ○資料⑤を示して助言する。 ○自分も遊んでいたことがあっても、仲よしの子でも注意することの大切さを強調。 注意しあう 	<ul style="list-style-type: none"> ○資料④は、これまでも日常の教育活動の中で機会あるごとに用いてきた児童には親しみのあるものである。注意しない気持ちを分析的に考えるのは3年生にはややむずかしいと思われたが、この資料の提示により、ほぼねらい通りの発言が得られた。 ○資料⑤も、学級経営の隅々にまで生かしたいという願いから常々強調してきたものである。「そうじができない子になってしまう」「みんなの役に立つ人になれない」などの発言から、注意するのはその友達自身のためであるということがよく理解されたと思う。
<ul style="list-style-type: none"> ○資料⑥を示して助言する。 ○資料②を操作し、ほうきではいている姿に変える。 ○資料④を示しながら、気付いたら(目)友達に声 	<ul style="list-style-type: none"> ○資料⑥は、本校の重点生活目標でもあり、これまで生活の様々な場面で言葉を中心とした指導をしてきた。児童からは、「ちゃんとやりなよ」「ねえ、ねえ、ちゃんとはこうよ」「わかったよ。ちゃんとやるよ。」という自然で気取りのない会話が聞かれた。

後 段	<p>はどのようにしたらよいか考えさせる。</p> <p>○自分たちのグループのそうじの場所、様子から具体的な行動を考えさせる。</p>	<p>劇にしてみましょう。</p> <p>・ロールプレイで演じる。</p> <p>6. 自分たちのグループのそうじの様子を思い出して、何と言ってどうしたらよいか、書いてみましょう。</p> <p>・注意しあう場面、声をかけ合う場面についてグループごとに話し合い、がんばれカードに書いて発表する。</p>	<p>○資料⑦ 教師からのさんねんカード</p> <p>○資料⑧ ロールプレイ</p> <p>○資料⑨ がんばれカードの書き方</p> <p>(1) 注意しあう場面</p> <p>(2) 声をかけあう場面</p>
終 末	<p>○互いに注意し声をかけあって協力していこうとする意欲を高める。</p>	<p>7. 今後の活動について知る。</p> <p>がんばれカードに書いたことができたなら、やったねカードに書いて先生のポストに入れましょうね。</p>	

4. 評価
- ・そうじの時間に遊んでいる友達がいたとき、ひとりではきれいにできない所を見つけたとき、友達にどのように働きかければよいかがあったか。
 - ・互いに注意しあったり、声をかけあったりして協力していこうとする意欲が見られたか。

5. 観察児について

A男 自分勝手ですぐおこる、乱暴するなどの理由で友達から排斥されている。友達から注意されても素直に聞き入れないことが多く、この点でつまずきが予想される。授業中は落ち着きがなく机の中から本を出したりしていた。グループごとの話し合いにも集中できなかったが、ロールプレイには興味を持って参加していた。そして、ロールプレイで演じたままを事後の清掃活動でそのまま実践していた。遊んでしまうこともあったが、注意されれば素直に聞き入れるようになり、一生懸命そうじをしてほめられることが次第に多くなった。

B子 おとなしすぎる、無口、笑わないなどの理由で排斥されている。友達に積極的に働きかけることが最も困難だと思われる児童である。授業中は、顔が全くの無表情であるのに足をたえず動かしており、あまり授業に参加している様子は見られなかった。

事後の清掃活動では、友達に声をかけられればしたがうが、自分から声をかけるまでには至らなかった。時々、笑顔を見せるようになり友達を驚かせた。あと一步の成長を待ちたい。

※A男、B子、共にI s s s (社会測定的地位指数)が-0.18で、学級内で最も低い。

をかける(口), よばれたら(耳)すぐに手伝えることを確認する。

声をかけ合う

子どもたちは、カードを書くことに慣れてないので資料⑨をヒントにする。

○ロールプレイには意欲的に取り組み楽しそうに演じていた。事後の清掃活動において、それと同じ行動やそれを転化したと思われる行動がしばしば見られ定着したことから、この活動が児童の印象に強く残ったことがうかがえる。

○グループごとの話し合いでは、すぐ明日の清掃に生かせるように自分たちの問題点や清掃場所の特徴をおさえた具体的な行動のしかたを考えさせた。どのグループも和やかに話し合い、カードへの記入、発表の役割なども上手に分担していた。また、他グループの発表には拍手を送っていた。

○がんばれカード(1)に書いたことよりも(2)に書いたことがたくさんできるようになってほしいと励ます。

○(1)は、みんながそうじをまじめにするようになれば必要がなくなる。また、(2)に書かれたような活動を充実させることによっても(1)のような場面は減っていくだろう。

6. 研究協議会から

(1) 発達段階と指導内容

① そうじの場面で協力できるようにするためには、まず、「なぜ、そうじをしなければいけないのか」という価値的なことがわかっていること、次に具体的な手順、方法、分担がわかっていることが必要である。これらについては以前に指導をし、児童も生活行動の原理原則としては心得てはいるが、現実には忘れなまけてしまうところに中学年児童の姿がある。友達に積極的に働きかけ力を合わせ、さらにそうじの充実を図ろうとする本時の指導の必要性はここにあると考えられる。

② グループ活動が盛んになる発達段階にあるので、その中からそうじの場面にしばって具体的に協力を考えさせたのは適切であった。また、授業展開においては学習活動6でグループごとの話し合いを取り入れているが他の展開場面でもグループ化を工夫したい。

(2) 授業の流れ

① そうじをまじめにしなければいけないのは分かりきっている。このような場合の導入には、子どもの興味・関心・好奇心をゆさぶる工夫が必要である。例えば、「ほうきからの手紙」といった擬人化された資料も効果的なもののひとつとして考えられる。

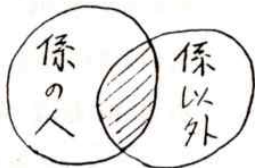
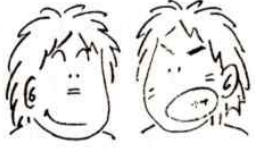
② 展開前段、後段で用いられた資料④、⑤、⑥は、これまでの学級経営でしばしば指導に用いられ、児童にとって親しみの持てるものであると考えられる。このような資料は見せただけで指導の積み重ね全体を想起させることができ効果的である。

③ 終末で、児童から「ほんとうの協力とは、思いやりのある言葉で注意しあったり声をかけあったりすることだと思いました。」との感想がきかれ、指導内容が一層深まった。

事例 3

主 題 友だちのよいところ

1. 主題設定の理由 本学級は、編成替えをした学級である。4月当初は担任や友達に慣れ
 っていない子が目につくようになった。また、休み時間2、3人で砂場やすべ
 係活動は、所属しているだけで活動の内容を助言しても無関心な子が多かった。
 二学期になると女子が帰りの会や生活日記に学級の生活について書くようにな
 合いになることが多かった。そこで、先ず友達によさに気づかせ認め合いのでき
 そ意欲の出発であると考えて、共に活動できる場を設定した。本時では、クイズ
2. 本時のねらい 友達によさを見つけ認め合うことが友達の輪を広げ、和やかな雰囲気
3. 展開と授業考察

	指 導 内 容	学 習 活 動	資 料
導 入	<ul style="list-style-type: none"> 学級のためによ く活動してい る人がいること を知らせる。 	<ol style="list-style-type: none"> 学級のために活動している係は、 どんな係ですか。 <ul style="list-style-type: none"> クイズ係 保健係 整美係 学級会係 特に積極的に活動した係は？ 	<ul style="list-style-type: none"> 後ろに掲示してある ポスターを見せて思 い出させる。
展 開 前 段	<ul style="list-style-type: none"> クイズ係の活動 が毎日続いた原 因を考えさせる。 係だけでなく係 以外の人も声を かけていること に気づかせる。 友達とのかかわ りを深める方法 を考えさせる。 どんな言葉で声 をかけるか具体 的に分らせる。 声をかけられた 時の対応のしか たを理解させる。 	<ol style="list-style-type: none"> なぜクイズ係の活動が、毎日続い たのだろうか。 <ul style="list-style-type: none"> ほめられる さいそくされる 内容がおもしろい 責任感がある 楽しませたい気持ちがある 友達を認め合い、友達をふやすた めには、どうすればよいか。 <ul style="list-style-type: none"> 声をかけ合う 助け合う 話合う 協力する そうじ中ふざけている友達を見 たらどのように声をかけるか。 <ul style="list-style-type: none"> ちゃんとおそうじしてね いっしょにやろうね ふざけないで 声をかけられた時、どのように返 事をしたらよいか。 <ul style="list-style-type: none"> わかった ごめんね すぐやるね 	<ul style="list-style-type: none"> クイズ係に感謝して いる児童の作文をO HPに写し読ませる。 ベン図で説明する。  <ul style="list-style-type: none"> 2人の男の子のペー プサートを演じる。 


なくて、多少緊張していたが、5月頃から授業中や給食時に立ち歩くなど基本的な習慣が身になり台で遊び、一人一人が好き勝手なことをしている感じであった。

女子が少数のため男子の意見が通ることが多く、男女の仲はしっくりとはいかなかった。

り問題が全体の場に出てくるようになった。しかし、相手の立場を考えた発言はできず、言える人間関係作りに一層力を入れなければならないと考えて取り組んだ。人に認められたうれしさこ係の活動を通して友達のよさに気づき認め合わせたいと考え、主題を設定した。

やる気のある学級になることに気づかせ、友達のよさをみつけることが出来るようにさせる。

指導上の留意点	授 業 考 察
<ul style="list-style-type: none"> ○ 係名だけでなく、みんなのためになっている理由も発表させる。 ○ クイズ系の活動は班の向上に役立った事を確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ よい点を具体的に説明でき、積極的に発表をする児童が多かったが、緊迫感をもてたか疑問である。 ○ 導入は、学級の悪い面を取りあげて問題を高めることが多いがよい面を取りあげても意識化をはかることができる。
<ul style="list-style-type: none"> ○ 係と係以外の人との両方の立場から考えさせ、その両方がかかわり合った時に友達との心が通じ合いやる気が起きることを理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 責任がある、やる気がある、などクイズ系の立場になって考える児童が多かったがクイズ系の生の声が聞けるとよかった。 ○ 作文を読んでから、クイズをさいそくされる、おもしろいと言うなど係以外の人働きかけがあることが理解でき、作文は思考を深めるために有効であった。 ○ 両者の心が通じ合った時にこそ認め合いができ、やる気ができることをベン図を用いたが、児童によく理解できた。
<ul style="list-style-type: none"> ○ この学級では、声をかけ合うことが大切であることを理解させる。 ○ 具体的にどんな言葉をかけるか、そうじの場面を設定して考えさせる。 ○ 声をかけられた時、素直に返事をしお互いに心が通じて仲よくなる事をおさえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 協力する、声をかけ合うという抽象的な言葉だけで本当に友情を深めることができるか。具体的にはげます、よいところを教え合うなどの言葉が児童の方から出ると具体的な行動のしかたを身につけさせることができたと思う。 ○ そうじの場面では、導入で扱ったようにあまり活動をしないう係にどのような声をかけたらいいか考えさせた方が関連があり、授業を深めることが出来たと考えられる。 ○ 言葉かけの方法は、即時に効果をあげることができるし、また、すぐに言いかえす児童の多いこの学級では、しっかりと身につけさせたい態度である。

<p>展開後段</p>	<p>○クイズの問題を考えさせる。</p> <p>○友達のよさを見つけさせ、友達クイズを作らせる。</p>	<p>7. このクイズの答は、だれでしょう。</p> <p>・Sです ・Kです</p> <p>8. となりの人のよさを見つけて、カードに書く。</p> <p>9. 書いたクイズを発表し、だれのよさかを考えさせ、発表をする。</p>	<p>○君は、そうじゃ当番の時、一番にとりかかります。(教師用)</p> <p>○ 児童用カード</p> <table border="1" data-bbox="1074 414 1366 624"> <tr> <th colspan="3">友達のよさを見つけよう</th> </tr> <tr> <td>1班 □□□□</td> <td>2班</td> <td>3班</td> </tr> <tr> <td>4班</td> <td>5班</td> <td>6班</td> </tr> </table>	友達のよさを見つけよう			1班 □□□□	2班	3班	4班	5班	6班
友達のよさを見つけよう												
1班 □□□□	2班	3班										
4班	5班	6班										
<p>終末</p>	<p>○事後の実践の方法を理解し、友達のよさを見つける意欲を持たせる。</p>	<p>○今後の活動について、話を聞く。</p> <p>○友達のよさを見つけて、あじさいの花を早く咲かせよう。</p>	<p>5年1組のあじさい</p> 									

4. 評価
- ・友だちのよさを見つけることができたか。
 - ・友だちのよさを見つけることは、友だちの輪を広げ、お互いにやる気を起こすということがわかったか。

5. 観察児について (① 選んだ理由 ② 本時のようす ③ その後の変容)

- Y男** ① 自己中心的な言動が多く、友達の失敗を大声で言いふらす。友達のよさを見る目を育てていきたい。
- ② 授業の前半は黙って聞いていた。発問に対して反応は示すが発表しない。クイズを書く場面から姿勢がくずれた。クイズの書き方をとなりに聞くが自分ではかけない。
- ③ クイズカードを書くことを面倒がる。相変わらず乱暴な言葉で言いたいことを言い攻撃的であるが、居残り勉強をしている児童に「がんばれよ」と、声をかけるようになってきた。
- A男** ① やや自己主張が強く、人の話を聞けない時がある。自分の思い通りにならないといつまでも言いほる。ひとりでは行動できず、常にS男と行動を共にする。2学期はS男とクイズ係を希望し毎日活動を続けた。自分を認められようと自慢したがる。
- ② 授業の前半は、自分が担当しているクイズ係のことでほめられたために、答えにくらしく、いつもより緊張して聞いていた。後半は、目をこすり、あくびをしたりしていつもの元気さが見られなかった。
- ③ 授業でほめられ、クイズの出題を工夫したり、さらにやる気をみせた。友達の解答の字が間違っても許せるようになった。しかし、3学期はクイズ係になれなかったため「まねっこしている」と新しい係の活動をせめた。個別指導と共に集団への働きかけも指導していきたい。

<ul style="list-style-type: none"> ◦ 日頃からよく友達を観察していることの大切さに気づかせる。 ◦ 性格的なよさではなくふだん気がつかない行動面のよさを書かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ クイズは、5年生としては、幼い方法だと思えるが、人間関係づくりが円滑にっていない本学級の実態と、また、情報化社会に生きる児童がもっとも興味、関心を示す最良の資料であると考え。 ◦ モデルのクイズを提示したことは、書く観点がはっきりと分かり、児童に書く意欲を起こさせることができた。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 班ごとにカードを貼り競争心を持たせると共に、4枚のカードになったらあじさいの花に色をぬらせ継続する意欲を持たせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ これからの活動を話す前に、担任から今日の児童のよさを発見した事例を話すともっと実践意欲が高められた。 ◦ 本時のまとめ的な話は、児童の意欲を減退させることが多いのでしない方がより効果的である。

6. 研究協議会から

(1) 発達段階と指導内容から

- ① 低学年からの積み上げが十分になされていない学年では、学校生活の基盤ができていなく高学年でも幼い行動をとるのが実態である。どこかの学年で実態に合わせて自分を見つめる指導をするべきである。本来、低学年「仲よく手をつなごう。」中学年「友情」手をさし出す。高学年「信頼」というように心と心を結ぶ適応指導をすべきである。
- ② 本時の指導内容は、中学年向きである。しかし、学級の実態には合っていた。このことは、クイズの問題になったら児童の反応に活気がでたことから分かる。
- ③ 集団指導を通して個人を高める指導をねらったが、実態から見て個の指導をしながら集団の適応指導をする方がこの学級では効果があると思われる。

(2) 授業の流れ

- ① 導入で係のよい面から入ったことは、とかく問題意識が低くなりがちであるが、この学級の児童の活発な発表ぶりから見て意識は高まっていたと言える。
- ② クイズ係の活動が、続く原因を考えさせ、そこには係と係以外の人との認め合いができていくことに気づかせ、そこにやる気が起き、心と心がふれ合って友情ができる。その友情をさらに深めるには、どうすべきかと展開した。やや言葉不足な面もあったが流れとしてはよかった。

(3) 児童の変容

「あ、よいことカードを書こう。」という子がでた。担任もカードに書き重ねた。しかし、カードに書くことを面倒がる子もいたので、班ノートを作って書くようにした。班の意識を高めることができたと思う。また、学級以外の事にも目を向け始め日記に書く子も出てきた。集団としては今一歩である。更にやる気のある学級づくりに努力していきたい。

V. 研究の反省と今後の課題

昨年度実施された文部省の「特別活動の実施状況に関する調査」(昭和60年5月実施)では、今後、学校として最も重点的に指導したい特別活動の内容として、学級指導を選んだ学校が、31%で最も多かった。このことは、各学校において、児童の健全な育成を図る上で、学級指導が大変重要な役割を果たすものと認め、今後、指導の徹底や改善がなされるものと考えられる。しかし、同調査で「学級指導における適応に関する指導について、最も重点的に指導した内容は何か」の問いに対しては、「日常生活の行動様式」が最も高く、「いじめ・仲間はずれの防止など人間関係」12.9%、「不安の解消」1.7%と低い率であった。

学級指導は、学級における好ましい人間関係の育成を中心とする教育活動である、ところが、人間関係の改善を扱う内容の指導が十分実施されないのは、児童の本音が出ず、建前ばかりの指導になりがちであるとか、児童の変容が把握しにくいなどの理由によると思われる。

これらの悩みを少しでも解明するため、学級指導部では、本年度も引き続き、適応指導における人間関係の指導内容や展開のあり方を授業研究を通して追求してきた。

1. 発達段階をとらえた授業

児童の本音を引き出し、効果的な指導を行うためには、発達段階に沿った指導内容、展開を工夫することが大切である。そこで、昨年度は、児童の個の発達特性について検討した。本年度は、学級の人間関係の改善をめざす指導の発達段階は、個より集団の発達に注目しなければならないと考え、各地域・学校の学年ごとの集団の実態を持ちより発達特性を検討した。これらをもとにしながら、授業研究を低・中・高学年各1回ずつ実施した。授業回数は昨年度より少ないが、毎回必ず事前研究会を開き、授業者を中心に指導内容、指導過程の各段階における発問、資料を検討し、深まりのある授業をめざした。その結果、発達段階をふまえながら各学級の問題点を十分掘り下げ、実態に密着した指導がより実践に結び付くことが実証された。

2. 「協力意識や実践力の向上」をめざす内容の系統的指導

学級指導は、即事、即効の指導を特質とする。しかし、その行動や態度が習慣化するまでには、児童の実態を観察しながら、時期をみて系統的に指導を累積することが有効である。本研究部では、本年度は「協力意識・実践力の育成」に関する主題を、発達段階を配慮したねらい、主な指導内容例を検討し、系統表の作成を試みた。これは、今後、各部員の学級で実践し、改善を図っていききたい。さらに、他の人間関係向上に関する内容の系統的指導も検討したい。

おわりに

お忙しい中を本研究部のためにご指導を賜った都立教育研究所主任指導主事井上裕吉先生、前全国道徳特別活動研究会会長大西弘先生、本会会長古橋宏先生、専門部副部長安岡正凱先生に厚くお礼申し上げます。授業や会場を快く提供して下さった校長先生はじめ同校の先生方、ご協力いただいた区市教研の先生方に、部員一同心よりお礼申し上げます。また授業研究を積極的に実践された、丸西美佐子、細野良正、朝田幸子各教諭に厚く感謝の意を表します。

顧問・役員・理事名簿

顧 問

顧 問	白 井 健 二	
"	小 谷 威	
"	久 納 六 郎	
"	小 島 明	
"	中 田 英 義	
"	広 瀬 英 二	
"	外 村 近	
"	小 河 一 久	中央・京橋小学校長

役 員

会 長	古 橋 宏	豊島仰高小学校長
副 会 長	岩 園 敏 明	八王子・第八小学校長
"	佐 藤 弘	千代田・西神田小学校長
"	石 川 和 男	豊島・駒込小学校長
"	竹 石 善 一	港・赤坂小学校長
庶 務 部 長	小 川 國 壽	港・三光小学校長
庶 務 副 部 長	岡 田 定 雄	品川・上神明小学校長
"	米 本 滋 雄	葛飾・細田小学校教頭
会 計 部 長	門 倉 昭 三	港・神応小学校長
会 計 副 部 長	小 池 宏	新宿・戸塚第一小学校教頭
"	小 林 和 子	豊島・仰高小学校教諭
専 門 部 長	岩 下 紀 夫	八王子・第七小学校長
専 門 副 部 長	安 岡 正 凱	練馬・大泉第三小学校長
"	星 野 隆 治	三鷹・井口小学校教頭
学 級 会 部 長	名 取 幹 夫	江戸川・第四葛西小学校教諭
児 童 会 部 長	中 川 秀 男	中野・桃園第三小学校教諭
ク ラ ブ 部 長	塚 越 正 昭	墨田・両国小学校教諭
学 級 指 導 部 長	鈴 木 和 子	港・白金小学校教諭
事 業 部 長	新 倉 剛	世田谷・八幡山小学校長
事 業 副 部 長	松 野 彰 夫	板橋・下赤塚小学校教頭
"	渡 辺 壽	練馬・中村小学校教頭
編 集 部 長	布 施 篤 美	多摩・東永山小学校長
編 集 副 部 長	高 見 沢 豊 栄	立川・第二小学校長
"	合 原 渡	文京・大塚小学校教諭
会 計 監 査	北 村 康 富	千代田・淡路小学校長
"	島 田 泰 介	町田・鶴川第四小学校長
"	小 野 眞 澄	江戸川・下鎌田小学校長

本部幹事

庶 務 部	池 田 令 子	文京・礪川小学校教諭
"	坪 井 敬 子	港・三光小学校教諭
"	福 島 哲 郎	豊島・仰高小学校教諭
"	山 口 由 香 里	豊島・仰高小学校教諭
会 計 部	針 山 利 子	豊島・仰高小学校教諭
事 業 部	二 田 孝	世田谷・代田小学校教諭
編 集 部	浅 井 良 久	品川・戸塚小学校教諭
"	石 岡 勝 彦	台東・根岸小学校教諭
"	柴 山 守	足立・綾瀬小学校教諭
"	赤羽根 智	多摩・東永山小学校教諭

理事・副理事

千代田区	吉仲ミチ子	永田町小学校
	中島 孝	富士見小学校
中央区	笥 進	明正小学校
	金子てる子	京橋小学校
港区	五十島良治	桜川小学校
	大谷 武夫	高輪台小学校
新宿区	今野 正保	淀橋第三小学校
	富田 嘉子	東戸山小学校
文京区	池田 令子	礪川小学校
	藤田 研治	駕籠町小学校
台東区	大石 千年	松葉小学校
	屋代 定男	坂本小学校
墨田区	辺見 弘	第二寺島小学校
	嵯峨 悦子	綿糸小学校
江東区	田中悠紀子	扇橋小学校
	小林 晃	毛利小学校
品川区	岡田 定雄	上神明小学校
	内山 仁	旗台小学校
目黒区	木村 将	菅刈小学校
	山縣貞伊子	中根小学校
大田区	後藤 隆	馬込第二小学校
	原田 昌明	馬込第二小学校
世田谷区	木庭 清八	中里小学校
	木場 住郎	多聞小学校
渋谷区	大道寺郁夫	笹塚小学校
	川井 得三	広尾小学校
中野区	中川 秀男	桃園第三小学校
	奥原 冬樹	北原小学校
杉並区	浅野 慶子	桃井第二小学校
	吉田 彰	荻窪小学校
豊島区	石川 和男	駒込小学校
	渡辺 史朗	朝日小学校
北区	小泉 信義	滝野川第四小学校
	柳内 功	東十条小学校
荒川区	那須 正義	第四日暮里小学校
	吉田 澄子	第三瑞光小学校
板橋区	小野 莞一	大谷口小学校
	阿部 好三	大谷口小学校
練馬区	安岡 正凱	大泉第三小学校
	桜井 悦子	大泉第六小学校
足立区	山口 一彰	扇小学校
	柴山 守	綾瀬小学校
葛飾区	前田 昭義	東金町小学校
	米本 滋雄	細田小学校

江戸川区	永田 美信	南小岩第二小学校
	小野 真澄	下鎌田小学校
八王子市	和泉 涉	由木西小学校
	志田原節子	横山第一小学校
立川市	鷲尾 健一	柏小学校
	田村誠一郎	南富士見小学校
武蔵野市	永井すみ子	第一小学校
	渡辺とし子	井の頭小学校
三鷹市	森山 裕夫	第三小学校
	渡辺 勝夫	井口小学校
青梅市	五ノ井泰則	霞台小学校
	望月 信二	第二小学校
府中市	塚本 貞男	第八小学校
	畑中 隆宏	住吉小学校
昭島市	山口 吉雄	拝島第三小学校
	坂井 康宣	拝島第三小学校
調布市	赤塚 靖	上の原小学校
	上山根百樹	杉森小学校
町田市	八巻 八郎	つくし野小学校
	青 正上	本町田東小学校
小平市	石原 尚志	第一小学校
	木川 征史	第五小学校
日野市	飯田 国代	第四小学校
	小笠原久雄	高幡台小学校
東村山市	吹毛井啓一	東萩山小学校
	伊東トミエ	化成小学校
国立市	赤池 正人	第二小学校
保谷市	星 憲彦	保谷小学校
	金成 美枝	東小学校
狛江市	浮田 芳夫	第一小学校
	山中 忠雄	第二小学校
清瀬市	片岡 恵次	第三小学校
	大和 久勝	第五小学校
東久留米市	安田 康隆	神宝小学校
武蔵村山市	神座 康夫	第三小学校
	佐々木和廣	第九小学校
多摩市	小林 耕一	東寺方小学校
稲城市	北村 孝夫	第六小学校
	柳元 太郎	第六小学校
東大和市	小川 義男	第九小学校
	池田 政次	第二小学校

あとがき（編集後記）

「実践力を育てる集団活動のあり方」の主題を掲げ、2年次の研究は終ろうとしています。都特活の四つの研究部では、昨年度に引き続き同じテーマのもとに、およそ次のような内容に焦点を合わせ、授業を通じた実践的な研究を積み重ねながら、主題の解明に努めてきました。

学級会活動研究部では、児童の心理的発達について、「欲求の階層論」（マズローの理論）を手がかりに、学級集団の心理的結合の高まり方を実証的に追求しようと試みてきたものです。

児童会活動研究部では、子どもたちの学校生活における諸問題に、自ら気づき自ら解決する自発的・自治的能力の拡充をめざして、その可能性を求める実践的な研究でした。

また、クラブ活動研究部では、クラブ内での望ましい集団構成のあり方をめぐって、各クラブの種類や特質に応じた小集団活動の育て方に取り組んできました。

学級指導研究部では、児童の発達段階に応じた指導内容の工夫と授業展開のあり方をめぐって、特に学級集団内での人間関係の「和と協力」に焦点をあて研究を深めてきました。

これらはいずれも、それぞれの活動に属する集団内の望ましい人間関係の育て方を基盤として、一人一人の適性や能力に応じた「実践力」をどのように育てたらよいかの究明であったと言えるでしょう。また、これらの実践的な研究は、特別活動に含まれる児童活動、学級指導、学校行事、さらには、特別活動と関連の深い道徳や生活指導等の特質を一層、明らかにすることの必要性を投げかけてくれたものであったとも言えます。各領域の諸活動が持つ固有の機能や特性を指導に当たる教師自身が、しっかりと見きわめておかなければ、望ましい指導が展開できないということを痛感させられた一年間ではなかったかと考えます。

時あたかも、教育課程審議会から「中間のまとめ」が示され、学級会活動と学級指導の統合化の方向が暗示されています。あらゆる教育活動を成り立たせる基盤として、学校生活における望ましい人間関係がなければなりませんし、またそれらの人間関係を包括し、教育活動の根幹を成す望ましい学級経営という面からも教師の資質が問われてくるものとも考えられます。

しかし30年余にわたって、育てられてきた特別活動の精神が、とりわけ、児童自らが「なすことによって学ぶ」自発的・自治的能力を育てることが、難しくなってくるという局面が見えかかってくてきています。豊かな人間形成に果たす特別活動の役割は、ますます増大するものと思われませんが、都特活としては、実践的に実証されつつある研究成果を最大限に活用しながら、それぞれの領域が持つ特質を一層明らかにしつつ、上記の今日的課題に対応していかなければなりません。

この一年間の研究の成果を足がかりに、更に次年度に向けて、実践的な研究を積み上げていく所存ではございますが、今後とも本会に一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

専門部副部長 星野隆治

研究集録 第23号

実践力を育てる集団活動のあり方

印刷 昭和62年2月25日
発行 昭和62年2月27日
編集 東京都小学校特別活動研究会
発行者 会長 古橋 宏

印刷所 株式会社 三誠社
代表取締役 茂呂 彌兵衛
文京区本郷2-22-4
TEL 812-0241・811-2062